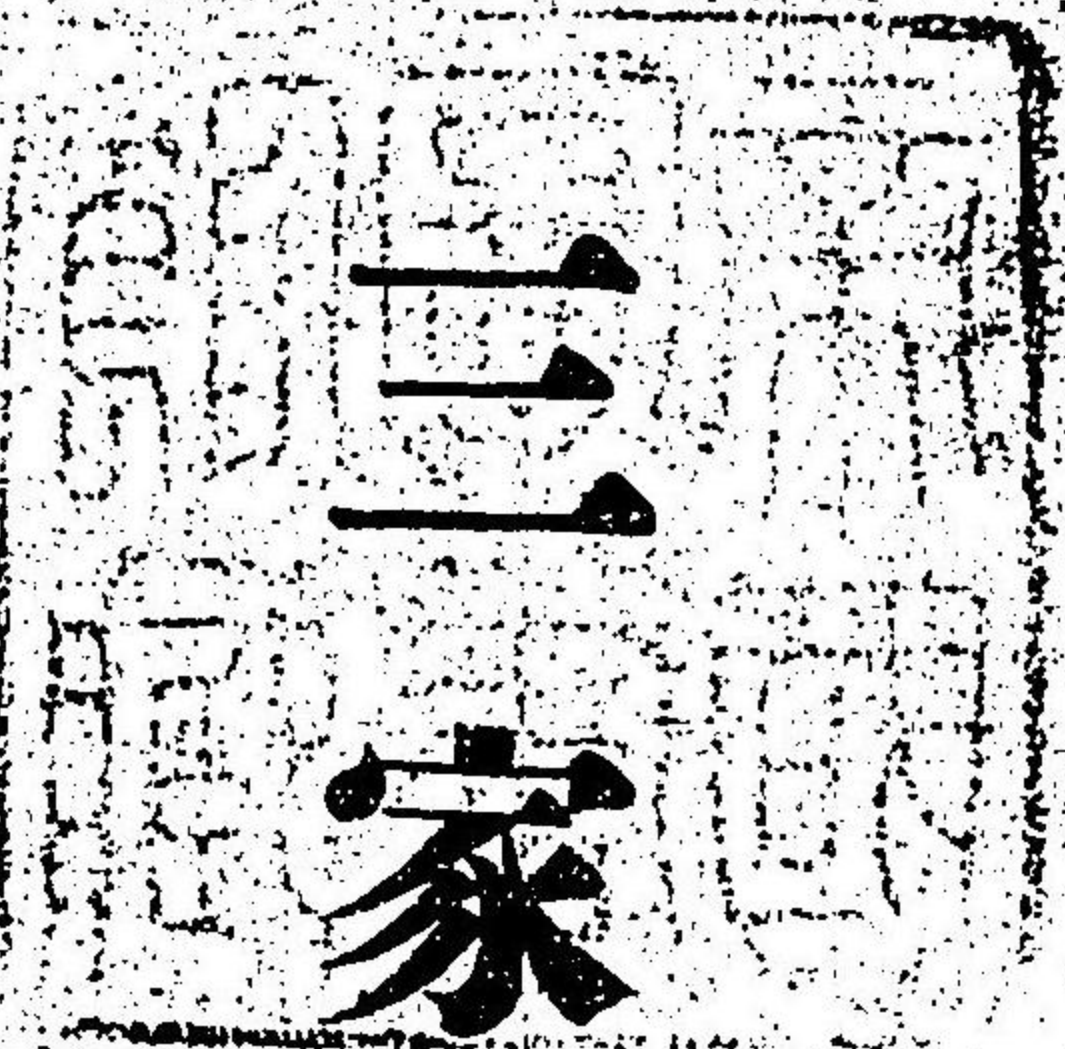


95-305



# 三家庭

フ  
ア  
ラ  
一  
原  
著  
海  
老  
原  
亮  
譯  
述





## 序

小説の行はるゝ今日より盛なるはなし。創作翻譯共に益々多きを加へ汗牛充棟の觀ありと雖も、其中に就き年少讀者に薦むべきものを求めて失望せざる者果して幾人かある。老幼團欒の間に通讀すべき高雅純潔の作に至りては殆んど稀なり。予は元來年少者の爲に小説の害多くして益少きを感じるものなり。然れども全く之を禁ずる事は得て望むべからざれば、之に代ふるに健全にして而も趣味ある良讀物を以てせんには若かじ。海老澤亮君大に茲に感あり。フアラ―博士の「スライ・ガムス三家庭」と稱する一小作を譯して公にせんとす。博士は英國第一流の宗教家にして又文壇の雄將たりき。文名噴々一世に喧傳したり。殊に「三家庭」は家庭の讀物として普く愛玩せられぬ。三十餘年前初めて此書の出づるや、故らに匿名を以て



The pathetic story here translated has moved the hearts of thousands:

It depicts in touching form the dreadful consequences of temptations yielded to, and sins committed, and may well serve to strengthen resolves to lead a higher, nobler, truer life.

I rejoice that this wholesome story has been made accessible to the youth of Japan. For it may become another of the many windows through which the Far East may look into the social and moral life of the Far West. And this is highly desirable; for such acquaintance will help bring into conscious harmony the better life of the East and the West, and hasten the day when all that is noble and strong and true in each, knit together by bonds of knowledge and sympathy shall unite to establish the universal rule of truth and love.

Sidney L. Gulick.

June 10, 1908.

Kyoto, Japan.

(同志社神學教授神學博士シドニー・ギニョック氏序文)

せしも忽ち高評を博して發賣高數萬部に上りたりと云ふ。後ち數年博士の名を署して刊行せられしが、爾來今日に至る迄尙依然として珍重せらる。以て尋常一様の小説にあらざるを知るべし。蓋し神出鬼没を欣ぶ年少者の好奇心を満足せしめ、併せて純良なる品性を養成し高潔なる情操を鼓吹する、本書の如きは誠に家庭小説の上乗なるものと謂ふべし。予は原書が英米の多くの家庭に珍重せらるゝが如く、此譯書が我多數の家庭に歡迎せられんことを切望して已まざる者なり。

明治四十一年晚春平安の舊都に於て

原田溪鹿



## 小序

人生の幸福は其過半家庭の裡にあり。富も名譽も以て購ひ得ざる尊き實は此裡に伏在す。之を譬へば家庭は猶夫れ砂漠の沃地オアシスの如き歟。此處に湧き出づる愛の泉をくぐるにあらずんば、荒野の旅路に勞れ果てぬる人の子は、遂に渴して又起つ能はざらん耳。更に比すれば家庭は猶夫れ港灣の如き歟。世海の荒浪に棹せる海士も、爰に良港を見出さずしては、遂に破船の憂目を嘗めざる可からざるなり。

今や上下擧つて家庭の紊亂を悲しむ決して以なきに非ざるなり。罪の濁流は此清き愛の泉を穢しつゝあるに非ざるなきか。禍の魔風は此港灣を吹き荒みつゝあるに非ざるなきか。然りそは既に滔々我同胞の家庭に横溢し來り、其處に湧きかへる清泉を壓倒し、其處に愁へる海士を憐まし、さては其邊りに咲き匂へる美はしき花を凋ませ、根底より其存立の意義を破壊したり。延いては國家社會を毒するもの、日にく激甚なるものあらんとす。苟も心ある者嗚呼誰かは浩嘆に堪へざらん。

されど斯の如きは決して人生の本旨にあらず。斷じて家庭組織に於ける原有の意義に非ず。さ

ればこそ人は人知れず爰に斷腸の想をなすなれ。見よ人の子の憐むべき状態を！此處に愛に渴して彷徨ふ良人あれば、彼處に厭世の涙堰き敢へぬ夫人あり。此方に親の頑迷を訴ふる兒女あれば、彼方に子の無情を啣つ老親あり。嗚呼世が清き愛の泉に渴仰し、眞の平和を覓めて止まざる様や一に斯の如し。

然らば此忌はしき濁勢を助長せしむる所以のものは抑も何者ぞや？惟ふに世人の情緒を顛弄する小説の如きは蓋し其尤なるものならん。見よ世の所謂肉的小説が如何に潔き青年男女の理想を墮落せしめつゝあるかを。事實は明瞭に之を證明し居るにあらずや。肉に依りて生るゝものは肉なり。「肉的歡樂は所詮豕肉の嘆に了るべきを知らざる者程憐れなるはなし。人の世を變へて禽獸の世となすものは是れなり。

余が神と人との爲に一生を獻げんとする一片の希望は、近來彌々熾なる弊風に就いて痛切に感ぜざるを得ざるものあらしめぬ。偶々宗教界の文豪博士フアラ一氏の著 "Three Homes" を讀み、其高潔なる内容に賛歎措く能はず。是れ眞に刻下我が讀書界に推すべき良著なりとなしぬ。されど素と是れ長篇なり、原文に忠實なる譯述を企つれば、其餘りに浩瀚たらん事を恐れ、爰に其抄譯を企て、自由に原文を取捨し、且敢て地名人名を我邦に取り、以て我が同胞の通讀に



便せしめ、尙數々自家の案を加へて彼此國情の差を補ひ、前後の關係を修綴し、爰に本書を編成するに至りし所以にして、己が不文菲才を顧みるの違なく、敢て秃筆を驅つて原著者の筆を害ひ、研學の餘暇勿卒稿を終つて杜撰の誹謗を甘受せんとするもの、是れ唯我愛する同胞の家庭に此書を獻げんとする微衷に他ならず。若し夫れ是に依つて更に家庭を深め、更に團樂の歡樂を増す一ホームを見出さば、余が望は則ち滿つるなり。

明治四十一年の春

洛陽の自然美に浴しつゝ、

譯者識

### 三家庭目次

第一	三人の友	一
第二	伊藤家	八
第三	藤原家	二三
第四	森家	三二
第五	父と子息	三〇
第六	誘惑の手	四〇
第七	淳の遭難	四九
第八	父の過失	五六
第九	好時機の逸走	六九



第二十	家庭への告別	一八二
第十九	絶望の板挟み	一六七
第十八	惨酷な禁制	一五九
第十七	既に遅し	一四七
第十六	忠の墮落	一三六
第十五	忠の心痛	一二四
第十四	進忠の退學	一一六
第十三	進の懺悔	一〇二
第十二	會場の光景	九七
第十一	進の罪過	八九
第十	大切な鞭	八一

第卅一	破船の難	二九七
第三十	海運丸の航路	二九二
第廿九	二人の足跡	二八四
第廿八	忠の手紙	二六九
第廿七	忠の同道	二五四
第廿六	兄弟の約束	二四一
第廿五	歸省の途	二三〇
第廿四	進の聖誕祭	二一四
第廿三	不思議な邂逅	二〇五
第廿二	行路の難	一九八
第廿一	奈落の門戸	一八七



第卅二	喪はれし一人	三〇七
第卅三	淳の想像	三二三
第卅四	蘭島燈臺	三三〇
第卅五	犠牲の小羊	三三九
第卅六	希望の山	三五四

## 三 家庭

### 第二三人の友

或美はしき夏の夕、殊に記念すべき或夕、夕陽既に手稻山の陰に沈んで、雲は早や夕照の色を映じてゐる。そのまばゆき黄金と真紅との美をもて燃ゆる雲烟も、やゝに其光輝を失ひ色褪せかけた時、遙かに聳ゆる藻巖の峻峯は其あたりの空と共に莊嚴雄偉な幽景を示し、やゝに蒼白さ反響の色を現はして相呼應してゐる。此方に消え行く真紅の色は彼方に増し行く蒼白い色となり、それも亦移り變る時、満天は實に言ひ難き光景を呈し來つて、終日碧玉のやうに輝いた空も、今は遂に銀色の面を顯はし、星は未だきらめかずとも蒼白い月輪さへ早や見え初めて、暮色漸やく蒼然、禽鳥競うて時に急ぐ、札幌博物館の高深な楡の木陰、涼風の袂を拂ふに任すれば、心身共に羽化して天の彼方に登仙するの概あり、生きて斯かる夕を迎ふ、鳴



呼まだ人生の恵ならずや。

三人の友は今や暑中休暇で自宅に歸り、今日野球試合よりの歸途である、何事をか物語り、自然美に圍まれて歩む彼等の樂しさよ。彼等の中最も多く此話の主人公となる者は快活氣な正直らしい森進といふ學生であつて、他の二人とは殆んど同年配今年恰度十七歳になる。されど彼が愛らしい快活な容貌も、時に訴ふる如き悲哀の眼を輝かせるのは、そも何等か其胸裡に秘め置かれし苦痛の表、象てはあるまいか？

其右にあつて重に話し掛けられる青年は、伊藤清となん呼ばる、彼が竹馬の友であつて、子供の時代にはいつも打連れて遊び廻り、樂しい數年を過ごし居つたが、當時進は遠く京都の同志社に學び、清は家庭にあつて中學に通學し居るので、休暇の外相會ふ折もなかつたのである。

次に紹介せねばならぬのは第三の青年である。其自らバットを持たずに居る處から、其やせぎすな風采といひ、何處となく他の二人と性格を異にして居る様に思はれるであらう。恐らく三人の散歩せる姿を見た人であるならば、屹度彼を目して最も美はしい者とするに違ひない。彼は實際美男子であつて而も貴族的體質を備へて居る。されど少しく眼識ある者は直に彼の性

格の中何となく殘忍な相貌があつて、青年特有の優美な質素な所が無い事を見るであらう。彼の父といふのは札幌知名の有位者で、彼は其子爵の長男である。彼は氣の向く時には能く人と話の調子を合はせるけれど、其行爲には單純な自然な所がない。始めて會ふ人には男として尊る過ぎる程所謂禮儀を盡すけれど、少しく意ある者をして直に何處か清い親切な愛情の表現でなく、寧ろ其反對のものあるを覺らしめるとは口惜しい事である。其行爲は決して完全圓滿な自然的の養育が結んだ果實でなくして、寧ろ其優雅な自重的態度の間に、人爲的な作爲的な狐の尾が見えて居る。

若し三人が他の家庭に一日を過ごすとするならば、他の二人が物をも得言はず沈黙に興味なく過ごし居れる間、彼は直ぐ親しげに話し出して一座に興を持たせる様な技能はあるが、さても夕刻とならぬ前に、他の二人こそ單に外形に依つて事を判断せない人々の、愛信と尊敬とを受けける者となるのである。

然れど此夕には三人中最も樂しい境遇にあるかの如く、又よしや第三の親友として他の二人より愛敬されて居らないにしても、少くとも彼等の友情を引付け得たものと自信して居た。彼は先づ口を開いた。



「ア、實に愉快な日だったね。君！そして如何です此の夕景色は！ア、眞に美だね。彼の邊で少し休憩して行かうぢやないか？」

眞に美である。實に其近邊は喬木亭々と聳えて、綠翠滴るばかりに繁茂し、蔭は塙の圓りに巻き付かつて、野花は其下に笑顔を見せて居る。其上に涼しい風は薫はしい香りを傳へて袂をかすめ、幽かに聴こゆる鈴蟲の音や、埒に雛を慰むる小鳥の歌も響き渡り、傍へを流る小川の水は自然の音楽を奏て居るのである。

「甚麼して君は休みたいの藤原君？君はバットを持たないで勞れたといふの。」と伊藤清は微笑みながら、尋ねて見た。

「冷かし給ふな君、僕だつて若し君や森君の様に人に見て貰ひたい新らしいバットがあるなら自分で持つて来るさ、伊藤君のは幾度も見たが森君！君のバットを見せて呉れ給へ。」

言ひつゝ藤原忠は奮ふが如く進のバットを取りて、木の伐株に腰を卸しながら其バットに彫刻された銀字を讀んでゐた。

斯くて三人は共に餘念なく此日の成績を物語り、選手なる進を讃めてゐたが、折柄藤原家の家扶は忠のバットを擔いて歸つて來た。

進「ア、君もう何時になるだらう？彼の人に尋ねて見ませんか。三人共時計を持つて來なかつたのだね。僕は少し遅くなつたらうと思つて心配だ。」

忠「何？君は夕飯が遅くなると思ふの？まだ八時になりやしないよ。」

進「夕飯なんてそんな事ぢやない。ア、何ても宜しいが八時になつたら大變だ、僕は夕飯を食へられないばかりでなく其外に……」

進は何か言ひ難さうに中途で止めて仕舞つた。忠は直ぐ過ぎ去つた家扶を呼び返して時を尋ねる。家扶は振り返つて若様に向ひ丁寧に會釋をしながら今八時を五分過ぎた處であると答へた。それを聞いた進は深い迷惑と驚愕の様子して、

進「何です？八時五分ですつて？ア、其様に遅いとは思はなかつた。ぢや僕は直ぐ歸らねばならない失敬清さん！ぢや失敬します藤原君！」

他の二語もなく進は飛ぶが如く家路に馳せ向つた。

忠「何だらう何故彼様に急ぐのだらう？君ももう歸るの伊藤君？」

清「僕ももう歸らねばならんと思ふ。君は家が近いけれど僕の家は近道しても随分あるからね。そしてお腹も随分空いたからもう歸らう、さうなら。」



忠「ア、そう、歸らねばならぬのならさうなら！ 嗚呼つまらない。獨りて歩くのは嫌だから、馬車を此處迄寄越す様に命じてやるかな。」

清「何だつて君、馬車を？ 何てすか唯苗穂迄歩くのがいやなの？」

忠「勿論さ、オイ家扶！ 家へ歸つて此處まで馬車を寄越して呉れ」と大聲で彼方へ行く家扶に命令した。

清「ヤ、エライものだね！ ても僕なら其様な無駄な事はしないな、左様なら藤原君、楽しく馬車を驅り給へね。」

藤原忠は清の今の嘲笑の口調を聞いて怒つて仕舞つた。そして何とも返答せなかつた。其憤怨は家扶に向つて爆發して、殊更に再び嚴酷な命令を與へた。大至急にかへ行つて必ず粟毛の馬を鞭付けて來い。愚圖くして時を遅らすと承知しないというた。

家扶「ても若様御家即迄二十分ていらつしやる事が出來ますから、馬車の來るまでには御宅へ御歸りになれますが……」

此命令に驚いた家扶は其必要はありますまいといはぬばかりに云うたので、忠は一層嚴酷に

なつて、額に八字を寄せ乍ら嗚り出した。

忠「誰がお前に家迄何分かゝるかを尋ねた？ お前は命ぜられた通りにすればそれで宜しいのだ。何も抵抗する必要はない。多分僕は馬車が來る迄待つて居る積りだがそれより早く歸つて仕舞うかも知れない。兎に角お前は命令を實行する義務があるぢやないか。」

家扶「恐れ入りました若様！ 御氣に障りましたら御免遊ばせ、けれども……」

忠「けれども何だ、馬鹿！ 早く行け！ 其邊に愚圖つて居ると酷いぞ。若しお前が僕の命令を聽かぬのなら家扶として何の役に立つのだ。」

家扶は速歩を以て進み出した。彼の唇には輕き苦笑を浮べ、寧ろ怒らせるのが面白い様な様子も見えた。併し道の角を曲つてからは最早立止まつて振り返り、此方に背を向けて居る忠を見やつた時には、先の苦笑は變じて罵詈訛となつて憤怒の語氣を漏した。

「不遜な奴だな畜生奴！ 今こそ命令するだらうが何時かは御禮とする時があるのだ。其時にはグツの音も出ない様に責め付けて呉れるから。」

されど忠は腰掛けたまゝ、夏の夕暮の涼しい新鮮な空気を呼吸しながら、踵を切株に打付けて遊び居り、幸にも此事を知らなんだ。否此夕の此の一事が他日如何なる一身の災厄、然り人



忠「ア、そう、歸らねばならぬのならなうなら！ 嗚呼のまらなう。獨りて歩くのは嫌だから、馬車を此處迄寄越す様に命じてやるかな。」

清「何だつて君、馬車を？ 何てすか唯苗穂迄歩くのがいやなの？」

忠「勿論さ、オイ家扶！ 家へ歸つて此處まで馬車を寄越して呉れ」と大聲で彼方へ行く家扶に命令した。

清「ヤ、エライものだね！ ても僕なら其様な無駄な事はしないな、左様なら藤原君、楽しく馬車を驅り給へね。」

藤原忠は清の今の嘲笑の口調を聽いて怒つて仕舞つた。そして何とも返答せなかつた。其憤怨は家扶に向つて爆發して、殊更に再び嚴酷な命令を與へた。大至急に家へ行つて必ず粟毛の馬を軛付けて來い。愚圖くして時を遅らすと承知しないというた。

家扶「ても若様御家邸迄二十分ていらつしやる事が出來ますから、馬車の來るまでには御宅へ御歸りになれますが……」

此命令に驚いた家扶は其必要はありますまいといはぬばかりに云うたので、忠は一層嚴酷に

なつて、額に八字を寄せ乍ら吹鳴り出した。

忠「誰がお前に家迄何分かゝるかを尋ねた？ お前は命ぜられた通りにすればそれで宜しいのだ。何も抵抗する必要はない。多分僕は馬車が來る迄待つて居る積りだがそれより早く歸つて仕舞うかも知れない。兎に角お前は命令を實行する義務があるぢやないか。」

家扶「恐れ入りました若様！ 御氣に障りましたら御免遊ばせ、けれども……」

忠「けれども何だ、馬鹿！ 早く行け！ 其邊に愚圖つて居ると酷いぞ。若しお前が僕の命令を聽かぬのなら家扶として何の役に立つのだ。」

家扶は速歩を以て進み出した。彼の唇には輕き苦笑を浮べ、寧ろ怒らせるのが面白い様な様子も見えた。併し道の角を曲つてからは最早立止まつて振り返り、此方に背を向けて居る忠を見やつた時には、先の苦笑は變じて罵詈訾となつて憤怒の語氣を漏した。

「不遜な奴だな畜生奴！ 今こそ命令するだらうが何時かは御禮とする時があるのだ。其時にはグウの音も出ない様に責め付けて呉れるから。」

されど忠は腰掛けたまゝ、夏の夕暮の涼しい新鮮な空を呼吸しながら、踵を切株に打付けて遊び居り、幸にも此事を知らなんだ。否此夕の此の一事が他日如何なる一身の災厄、然り人



生に数々起り来る様な禍の種となつて、今後数年の間彼の生涯を彩色する出来事と関係し居らんとは、神ならぬ身の夢知る由もなかつた。

## 第二 伊藤家

外見美しくし樂しげな大構への家を見る時に、恐らく何人も直ぐ其心に思ひ浮べる事は、其住人が誰といふ人で其生活の狀態が如何で、其家庭の内部が幸であるか否かを知らたいといふ好奇心に驅られるであらう。今より著者は讀者諸君と共に遠慮なく、我三青年の家庭に入り込んで、其内部の狀態を研究する自由を得たのである。されど諸君！吾々の研究せんとする動機は唯單に好奇心に驅られてといふよりも、尙少し高尚な意味を持つたものでなければならぬ。著者は此點に就て少くとも常に快感を食らんとする者よりは、より高潔な目的を有する者と自信して居るのである。先づ吾々をして伊藤清の家迄其跡を追跡せしめよ。馳するが如く急歩して創成橋を渡り豊平川に沿うて其堤防を上り、右に拋物線の形をなせる石造の長き堤防を眺め乍ら豊平橋を打渡り、餘り美しからぬ其市街を過ぎて彼方の丘阜干城臺てふ兵營の遙かに見ゆる處、喇叭練習の聲が恰も雜鶯の初聲の様に、いぢらしく聴こゆる邊りに至れば、一見直

に富豪たるを信ぜしむるに足る西洋館がある。家の周囲は小さい而も美はしい公園の様に造られ、二階の廻廊からは、毛氈を敷き詰めた様な牧草の庭園を見下す事が出来る。其門札には伊藤清と記されてある。清は今其家に入った。

清が家に歸つた時に、家の者は皆手持不沙汰な顔をして居つた。弟と妹とは熱心に夏休み中の計畫を、丁度訪ねて來た従弟の一人と共に考へて居た、伊藤夫妻も其子供等の話に加はつて、共に樂しみつゝあつたものゝ清の歸りが斯く遅いので、氣が進まなかつたのだ。

「僕は君の來るのに居らなくつて済まなかつたね。」

と清は従弟に會釋をしたが、父清隆は少し嚴格な顔をして云はれた。

父「眞實にいけないね、家迄案内する爲に停車場へ迎へに出ると約束して置いて、ブラン／＼歩いて來た方が楽しいからと態々馬車を出させないで居りながら、歸つて來ない様な事をするのは誰だらう？」

清「オ、お父さん！怒つちやいやですよ、いやお父さんは怒る方ぢやない事を知つて居るからそんな風をしてもだめですよ、君失敬したが、も道は直ぐ解つたてせう？」

「いや一寸曲り角を違へたものだから……」



清の弟は金切聲で遮つた。

「僕解つた。君は彼の豊平川の處から水車の方へ曲つて林檎園の中に入り込んだものだから番人が何かと間違へて討たうとしたのだね。さうしてせうそれで番人の犬に噬まれさうに吠えられたのだ。」

「ヤ、ち氣の毒だつたね」と云うた清の顔色に全く悔恨の様あるを見た伊藤夫人は、「マア宜しいわ。濟んだ事ですから心配は要らないよ。そして従弟だもの宥して下さるわね」と我子を慰むる如くやさしく云うた。が併し父はまだ嚴格な態度を崩さない。

父「左様さ若し清が約束を履行しなかつた罪を自分で許す事が出来るなら……」

清は何か云はんとしたが、弟は其間に口を入れた。

弟「ア、今迄何方が勝つたか聞かなかつたね、僕は屹度兄さんの組が負けたらうと思ふ。」

清「何云ふんだ。小僧解らず屋だから困るな。數多の學校からの十一人の選手が、市の人位に負けると思ふのか？」と弟の耳を引ッ張つた。

母は父の一言に依り清が心中不安の思あるを察し、成るべく忘れさせやうと思つて、今日の勝負を初から委しく話す様清に勧めた。清は其勝敗に就て話し始めたが、話の進むにつれて熱

心が増して来て、其光景を物語るに殆んど我を忘れたかの如く遠慮もなく人の批評を始めた。

父「御止めなさい！清！お前は今婦人の前で話をして居るので運動場に居るのぢやない事を忘れてはいけません。」

其語氣は清隆自ら豫期したよりも、尙嚴格な調子であつた。されど殆んど熱して居た清は尙も聲を沈めて話を續けんとした時、再び靜かな而も重々しい父の聲がした。

父「清！」

清は此一聲に鈍つた心の眼を醒まされ、本心に立歸つて其可愛らしい顔に紅を散らし、前の批評を止めて、莊重な紳士らしい口調もて、其得點を話した。そして又如何にして彼等が殆んど危き迄に負けんとしたか、如何にして夕の七時半になつてから漸やく其悲運を挽回する事が出来たか、亦如何にして進が彼等の中の最優勝者であつたか杯を物語つた。

父「左様か、進さんはよくやつたな。それぢや清！お前が約束を破る様になつたのは、會食をして来た爲ぢやないのだね。其様に遅く迄勝負が付かなかつたのか？ぢや嘸も腹が空いたらう、モウお話を止して御飯をお上り。」

清「ハイ、でも皆様が其様に見て居られちや、動物園の獅子の様な氣がして、喰べられません。」



僕ね今直ぐに食事をして仕舞つて、次の週間も客様を如何して楽しませうか、考へますからね。

清は他の人々の其室を去つた後獨りあわたくしく食事を済ませ、食卓を離れて客間に行き、安樂椅子に掛けて書物を繕いて居た父の傍へに近より、憂愁の口調もて父に尋ねた。

清「お父さん！本實に私の事を怒つて在らつしやるのですか？」

父「否！今日の事は事情が其様だつたのなら別に咎める所はないのだ。お前知つての通り私は、時間と約束に就ては極く正確な事を望むのだが、併し今日のは若し私が自分で試合を見に行つて居たなら、矢張り終り迄お前が留つてやる事を望んだに違ひないから、お前の爲た事は正當だつたと思ふ。」

清「僕も恰度左様思つたのです、お父さん、僕決して約束を忘れたのぢやなかつたが、僕が歸つて仕舞つたら僕の組の人が非常に迷惑するので、知りつゝ遅くなつたのです。」

父「それぢや若しゲームが六時に終つて、それから來れば迎へに行くのに恰度善かつたとするなら勿論會食の爲に残る様な事はせんだらうね。」

清「それなら勿論歸つて來るのでした。僕は虚言は云ふまいと覺悟して居るのですもの、お父

さん何時か僕が虚言を云うた事を御存知ですか？」

父「否！まだ覺えてから一度もない。清！私が眞にお前を叱ることの出來ない理由は、お前が全く天真爛漫だからなのだ。いつまでも永く其性質を失はないで、何卒美はしい品性の人と成つて貰ひたい。さあ是れから皆と楽しく話して遊ばうぢやないか。」

清「陰は今は我息子の末頼母じさを思ひ、清の肩に手を掛けて、其眞實と愛情の深さと思つて感謝の念胸に満ち／＼共に庭園に下りて來た。蒼空の月と親子の胸は澄み渡り、閃めく星と其良心輝やくを感じながら、感恩の清き心其の名に背かぬ清隆と清との總身に溢れ來る。嗚呼天上の星と我胸裡の道德的規準！哲學者をして詩的の歎聲を洩さしめたものは是れ！清き親子と子を神に依りていや堅く結び付くるものは是れ！實にや人の親としては清隆よりも優つて高尚な親切な父は少なかるべく、又人の子としては清よりも勝つて愛らしい無邪氣な者は稀なるべし。」

### 第三 藤原家

今や吾々は愛と平和とが春日の如く温かに輝やいて居る伊藤家を離れて、莊嚴宏壯を極めた



藤原家に向ひ我等の歩を移すべき時とはなつた。彼の豊平河畔に沿うて下り往く事拾數町東橋の近傍に至るならば、前世の遺物なる喬木の、亭々として聳え居る間に、藤原の邸宅が位置を占めて居る。樹の間洩る月影に宏大な建築物が其姿を示し、鏡の面なす池は今や銀の光を反射して居る。

藤原家の祖先は代々海陸の大戦に武名を轟かした偉大な人傑が多い。又其子女等も數代の間秀才の聞え高く天才多く、其名の青史を飾り居る者も少くはない。現代の子爵忠篤も或一種の秀才には相違ない。されど其前半生は極めて放恣な性行を取てし、襲爵後と雖も習ひ得し慣例は容易に止める事も出来ない。尙肉的快乐が其畢生の目的であるかの如く見える。併し人は雖も正義の念がある。神の賜なる良心の聲は、よし幽かなりとも内に響き渡るものである。されば放逸な者の常として其酬は先づ不愉快な不満足な生活をなさねばならぬ事である。彼は花札を引く事に非常な興味を感じ、爲に多額の借財を一身に負ふ事となつた。此危険な遊興は遂に其結果を生んで、彼が襲爵を仰付けられた時には、今更ながら己が過去の罪を顧み、爲すあるの身を以て徒らに歲月を費やし、而も單に一身の不幸を産む爲にのみ費やし居つた事を悔いた。殊に其心に言ひ難き苦痛を感ぜしめた一事實は、藤原家の不動産の一部を抵當とせねばならぬ

に至つた事で、祖先以来の家名を汚辱する事であつた。

「見ればたゞ何の苦もなき水鳥の足にひまなき我想かな」とは嗚呼何人の詠歌ぞ。如何に榮耀の生活をなせばとて其人の心裡必ずしも慰安あるものではない。他目には羨やまるゝ程の家庭であつても、其の奥の間には何等か一種の喧嘩の聲がある。我藤原子爵も亦其一人である。世を擧つて彼の生活を羨望し、彼の勢力は四民を震盪せしめ、諸人は地位の爲にか名門の前にか兎に角尊敬を拂つて呉るゝ身であつても、彼の心裡は其榮譽ある家名を毀損せりてふ良心の苛責に悩むのであつた。更に夫れ以上に彼の心を痛ましむるものは、彼が唯一人の愛子忠なる者が、何となく自己の過去の行爲を繼がんと傾きつゝあるかの如く、何處となく自分の性癖の遺傳的素因を有するものゝ如く、種々の點より明かに認めねばならぬ事であつた。

藤原夫人は容姿も品性も共に稀有な美と徳とを兼ね備へた婦人であつたが、不幸忠が四歳の春を迎へし時に果敢なくも他界の人となつて仕舞つた。噫！彼女にして若し今に生きて居つたなら絶えず其良人にも美はしい感化を與へて其苦惱の年月の間、少なからぬ慰安を受けさせ得べかりしものを、突然彼女の身まかりし以來、忠篤は更に深く苦惱の淵に沈淪した。

忠は母の美貌を禀けて見る眼羨まるゝ程の美男子であつて、舉止進退も紳士らしく、才能も



人に勝れたる處あり、而も名家の嗣子、少なからぬ富を繼ぐべきものとすれば、誰か又彼の品性の人に優れ其内心の如何に幸福なるかを疑ふ者があらう、忠自身も亦然か思惟つたのである。彼は世界でふ廣き舞臺は唯自分一己の爲に造られあるかの如く感じた。貴族の子も平民の性も何の差別なく共に學び得べき等の學校に於てすら、彼の頓才と快活な行動と其美貌と名望とは、極めて多くの阿諛者を産ましめつ、彼の行く途は平坦にして而も絶景でもあるかの感となさしめて、遂に可惜自己中心の高慢な性癖を益々増長するに至つたのである。

母の死は忠が未だ何事をも感じ得ぬ幼少の時であつた。けれども尙彼の一身上多大の不幸といはねばならぬ。懈け者の父はいつも家を不在にして、幼兒の教育訓練に就ては、尋ねらるゝさへ寧ろ迷惑に感ずる程で、全く僕等の手に委任して置いた。よしや自ら無關係であつても、善良な家庭教師にても委せて置いたならば、尙少しく好結果を得たであらうに、惜むらくは父なる人が所謂私愛に溺れて、家婢等に向つても子供と思ふまゝ言ふまゝに服従する様申付けて置いた。これ連も亦母なき子であるといふ同情の然らしめた故であるとすれば無理ならぬ處なれど、所謂老婆育ちが三百安の所以て我愛子をして高慢な偏狭な手に合はぬ子となし終らしめたのだ。

他人は忠の美はしい紳士らしい態度から判断して、嚙々家庭の花であらうと想像するけれど、實際は全く其反對であつて、寧ろ家庭の悪魔であつた。學校に在る間は幾分か自制する所はあるが、さて家に歸れば、最早誰憚る者もなく、我儘の角を伸ばして、父を始めとし、下女下男は勿論忠の不在を喜ばぬ者はないやうになつた。

斯かる家庭教育の自然の結果として、父が其子の従順なると愛情深きとに無限の樂を感じるといふ様な事は、殆んど望む可らざる所、忠が食事の後など人に抱かれて父の居間に來り、阿諛ふ客に褒められ居つた様な幼少の時代には、父も亦無上の喜を感じて居つたのであるが、次第に生長すると共に、愈々自己の意志を現はして、父をして不斷迷惑と憂愁とに沈ましむる様になつて來た。

忠篤は曾て靜かに其子を訓戒するとか、或は道理を説き聞かせるとかといふ様な事をした例がない。畢竟するに自ら實行の徳がないから、たとひ教訓を述べたとて何の感化も及ぼし難い事を知つて居つたのであらう。倫理の學說や宗教上の教訓も忠の様な賢き子には、無用の長物であると思ひてか、忠篤の唯一の方法としては、非常に憤怒を裝うて、時には嚴罰を以て其子に臨むのみであつた。併し忠とても亦父に劣らぬ剛情者である、遂に極力其子の意志を碎く



事の外は、其思ふが儘に任せねばならぬので、恰度此父子の間柄は不断武装せる中、立の様なものであつた。

子の側には不断挑戦の態度あり、父の方には直に憤怒の應戦をなさんとする失望の念慮止む時なし、斯くして我藤原家の宏壯な建物の下には、悲哀と不愉快とのみ充ちて居る。實にや労働者の賤が伏屋は遙かに王侯の宮殿よりも多幸であり、小なき神の如く尊敬さるゝ忠の胸裡よりも、鋤鍬の傍へに口笛を吹き鳴らす百姓の悴のそれに、人生をして眞に爽快ならしむべき或物が潜んで居る。

恰もよし忠は父の愛馬の牽ける馬車を驅つて、今しも家の玄関に着いた、其時父も亦夕飯の爲に家に戻つて其門を入つた。て忠は父の面影を認むるや否や二階の階段を馳せ上つた。父は其後影を見て直に、馬より飛び下り手綱を下男に渡し乍ら呼んだ。

「待て！忠！待て！！」

「されど忠は聞かぬ振りする決心をして居たので其儘二階の己が室に隠れた。

子爵は憤怒の餘り馬車を驅り來つた御者を詰つた。

「何時汝は此粟毛を使役つたか？此の馬は使つてはいけなさと平素云つて置くのを忘れたのか

「私は家扶の命令を受けたのです。」

傍へに在つた家扶は直ちに口を出して、

「私は若様の御命令を受けましたのです。御前は何事でも若様に従はねばいかぬと何時も私共に仰しやりますから、悪るゝとは知り乍らも……」

「二度と其様事を聞いてはいかぬぞ二人とも宜しいか？」

と云ひ置いて忠篤は室に入つたが、心の裡には言ひ難き不満の念が満みて思はず呟やいた。

「困つた子供だな、如何したならよくなるのだらう！」

應て夕飯を報知らする鈴が鳴り響くと、忠は少しくさまり悪い感じもしたが徐ろくと食堂に降りて來た。此夕へには共に會食する客もなかつた。併し子爵は何時も徹つた暮しをし居るので、美しく飾られた食卓の前に今しも親子は對面した。二人の間には味氣なき數語の換はされしのみ、食事中子爵は絶えず破裂せんとする憤懣の情を、給仕の居るばかりに抑へて居た。然るに忠の方では態と冷靜な態度を裝うて、屹度父の唇より出づるであらうと豫期し居る思はしい言葉に向つて準備する爲か、シャンパンの氷に冷やせるものを飲み干した。素より酒を



飲む事には慣れ居つたもの、彼の眼は血走り彼の頬は毒々敷も疵を帯びて来た。扱食事も  
濟み葡萄酒などが食卓に並べられ、葡萄酒の盃が子爵の前に置かれ、斯くて給仕は食堂を去  
つた。残れる者は唯父と息子！忠は椅子に掛けたまゝもじ／＼して心の中には「今度こそか知  
らん」と思つた。併しそは其様に直ぐには來なかつた。暫らく互に沈黙し居つた其間に、父の  
足の振り様と、今盃に注ぐ其あわたゞしき態度とは、今や忠の不従順を責めんとして、之に  
要する憤怒の情を、一歩／＼と増さん爲殊更に勉め居るには非るかと思はれる。

吾々をして急いで之に續ぎ來つた光景より遠ざからしめよ。何故かなれば其結果は實に痛ま  
しい思はしいものであつたからである。忠篤は激昂して憤懣の情炎々たり、忠は冷然控へ居れ  
ども他迄不遜である。遂に二人の聲は父子の間にあり得可らざる程激烈な反駁に、愈々高調子  
となつて、父の忍耐は早や其袋を破り、忠の肩先を捕へて之を室外に突き出し、音高らかに其戸  
を閉ぢて仕舞つた。酔へる忠は磨ける床に這つて、ハタと打倒れ、同時に其前額を大理石の角に  
打付けて、血汐の雨は床の上に流れ初めた。怒つたまぎれに發せし高き聲と戸を打閉めた物音  
とは、端なくも家内の者を其處に呼び集め、忠の倒れ居る様を見た僕等は、今や其應急手當に  
忙はしかつた。戸外の此物騒ぎに忠篤も再び戸を排き見れば、集まれる群衆我子の蒼白な顔大

God in heaven.



「嗚呼餘り酷く負傷して居らなければよしが……」

と子爵は思はず叫んだので、看護し居つた忠の乳母は感むる様に靜かに答へた。

「否を唯額を少し打つたので氣絶なすつたのですから早く褥に御入れ申したらよくなりませ  
う。」

「何卒充分注意して出来る丈けの手當を盡して下さい、ね御婆さん！ 又要すれば直ぐに醫者を  
呼んで下さい。」

此出來事の原因に就ては何事も語らなかつたけれど、子爵は僕一人として忠が如何に不孝者  
で不従順であるかを知らぬ者はないと能く知つて居る。何時も其家内の忌はしい事が人に知ら  
れるのは、自ら肩巾の狭くなる心地せられ居るのであつて、忠篤は今溜息つき乍ら食堂に入り、  
椅子に腰打ちかけた時、嗚呼若し自分が何かの方法に依つて尙一層幸福な家庭と疚しからぬ心  
を購ひ得るならば、喜んで爵位も財産も悉く抛りたいと思つた。

此間に乳母は忠を褥の上に横たへさせ、傷を洗滌し之を繻帶して介抱に勉めたので、彼は間  
もなく昏睡の状態より復活した。



激しい頭痛のする外に別に落ちた爲の困難とてはないもの、彼が右額に於ける打傷の痕跡は、決して失すべくも非ず。たとひ開は彼的美貌を害ふ程のものには非りしと雖も、少くとも多年の後まで其不幸な夕を想起せしむる好記念となつたのである。

#### 第四 森家

吾々は前既に伊藤家及藤原家を訪問し其家庭の有様をも略ぼ窺つて来た。今より吾々は森進てふ競技會の優勝者にして且我物語の主人公の家を訪ねばならぬ。吾々は先に森進と博物館に忙はしく別れたのであつた。今進の家門前に立つて之を窺へば、家は全く森に包まれて居て、其丸窓の下には牧草滑らかに生え、自然の傾斜もて半ば常磐木に蔽はれた大きな池に溢る。池の邊りは石竹の花もて紅を飾ひ、小舟さへ其岸に漂うて見える。水は實に水晶の如く澄み渡つて、深き底の青草の間を、緩るゝと泳ぎ廻れる鯉の姿をも認められる。殆んど木々に閉ざされて、而も岸邊僅かに見ゆる邊り松葉牡丹の咲き亂れたる中島が、實に言外の幽景を添へる。彼處にも亦一つの小舟が浮び居つて、小さき東屋が木の間より其姿を見する。唯外部的觀察を施すならば、是れ亦實に幸福な家と思はれる。

これと進は門に來た時急ぎ入る氣色もない。位置の高燥や幽景の美や富貴の外見は、遂に以て一家をして幸福なる家庭となす所以に非ず。唯其内に棲む人の心こそ之を幸多からしむるなれ。若しも愛情が其間に行はれ、太陽の光熱が之を照らし、平和が之を支配するならば、賤が伏屋であつても家庭は極めて幸福である。若し不斷心碎きつゝ愛なき人のみ棲むならば、宮殿も亦野獸の住家の如く、厭ふべきものと謂はねばならぬ。

吾々は前既に進が此日の競技會の最優勝者であり、勝利は殆んど彼の熱練の結果に依つてのみ得られたので、彼は無敵の觀覽者に非常な喝采と賞讃とを受けた者である事を伊藤清より傳へられた。

斯かる夕普通の子であるならば、家に近づくに従ひ幾分か高慢の色を以て、門より直ぐに跳り込む筈であり、又大概の父は斯かる榮譽ある子を歓迎すべし筈である。これと進は父が我身の熱達を賞めて呉れぬのみならず、競技の結果に就て尋ねる事も敢てせない事を能く知つて居る。父信淳の趣味は全く異つた方面にあつて、不幸にも其長男進の運動に依り快樂を得んとする事に對しては、少しの同情をも持たなかつた。

進が今懼るゝ姿は這つてこそと家に入りし姿を見た者ありとせば、彼は直に其家庭に



何等か面白からぬ事のあるを想像するであらう。元は寧ろ當然である。實際面白からぬ事といふのは二人の子息中、一人は父の愛子であり他の一人は、無情に判断され却けられ忌み嫌はれる者であつて、此後こそ我不幸なる進其人なのである。

信淳は學識ある紳士であつた。併し彼は偏狭な學窓に於て學び、彼の學才も亦無味乾燥なものであつて、彼の智識にも品性にも少しも寛大な處がない。彼の學問は人間の智識を圓滿に發達せしめたのではなく、唯自負心を養成したに過ぎなかつた。考古學と歴史とに精通し居る處から數々斯道の反駁者と激論して容易に勝を制するので、如何なる事物に對しても、悉く自己の意を以て絶對に正當なりと自信するに至つた。學識ありてふ世評は遂に論者としては彼を尊大強情な者とならしめ、人としては苛酷な偏狭な者となした。傲慢なる自我は彼の全品性を支配して居る。斯かる人の習として悔ゆべき場合にすら寧ろ之に誇る様なるもので、時には自公してさへ羞かしく思ふ事なきにしもあらねど、不幸にも是れ却つて、自ら卑下し自ら戒むよりも寧ろ一層苛酷の性情を發達助長せしむるに與つて力ありとは、あゝ又何たる忌はしき事であらう。

素を正せば信淳は家極めて貧しき爲其法學校に在る間は、或將軍の家僕として勉め居つたの

であつた。天性沈鬱な彼が斯かる地位にあつて、決して圓滿快活な品性を發達せしめ得なかつたのは當然である。

然れど彼の天才は遂に著しき成功をもて報い來り、校費生に選拔され、斯くて卒業後判事となる事が出來た。後程經て舊主將軍の娘と互に情交密なるに至つたが、此方は赤貧洗ふが如く、先方は巨萬の富ある家柄として、貧富の墻壁に遮られて、結婚すべき術もなく、年毎に益々衰へ益々沈んで七年の長き年月を待ち詫びた。遂に漸やく結婚して多年の望は達せられたものゝ、鴛鴦の契蜜月の樂も亦暫時の夢、忽にして自己の地位の職業の不適當なるを知り、人生の行路難殊に若き新世帯の夫婦が、斯かる地位にあつて其生活を營むの如何にも重荷たるを感ずると同時に、其職務が限りなき重さをもて彼を壓迫して來る如く覺えた。

斯かる際に偶然にも父將軍と其嫡男の遠逝せる事は、此夫妻に巨萬の富を遺したので、彼は爾來職を抛ち、其富を樂しみつゝ再び又法政の事を顧みぬ様になつたのである。而して今は札幌桑園に安樂な日を送つて居る。

進と淳なん呼べる二人の男子ある事は、始めの程彼に取つて實に新しい興味を與へ、新しい生存の理由を發見した様に感ぜられ、熱心に其教育を始めた。併し其熱誠は己が神より授



かりし親の務を果たす爲め、其子等の未來の成達にのみ勵まされたといふのではなく、寧ろ自己の虚榮心と慾望とに其源を有し居つたのである。嗚呼親が子を養育するに方り、老後自ら其報酬を得んとする慾望の動機に出でずして、尙少しく高尚な理由であるならば、世の親と子との間は決して義理一片の關聯でなく、更に温き愛の鎖に連なるであらうものを、惜いかな未だ世の親たるもの、理想が此處に到達し居らぬ故、數々此親にして此子ありてふ當然の結果を見るのだ。

信淳は又自己の生涯が少しも満足のなき故をもて、其子等の未來の成達と顯榮とに自己の不滿を慰めんものと願つて居た。そして自己の教育は決して幸を齎らしたものではなかつたけれど、何事も自己以外に標準なき彼は、其子等をも尙自己同様の模倣中に養育せんと企てた。

進は天性敏活な壯快な者であつて、従つて少年時代の課業は父の苛責なければ勉めぬ程のものであつた。此一事は兒童の心理を解せない父の常に快しとせなかつた所である。弟の淳は之に反して體質は弱かつたが、學問には極めて忠實に益々思慮深き勉強家となつたので、偏狹な父信淳は弟にのみ總ての愛と稱養とを集中して、哀れな進に對しては、數々苛酷て又不斷冷

淡であつた。人は概して自己の缺點を忠告し、異る者とは嫉視する者である。又自己の過失と思ふ事をも蔽はんとする傾を持つて居る。信淳も進に對して過度の課業を賦へる事が他日は其子の生命にも關係し、少くとも永久に其才能を毀損する所以である事をば、可成忘却れんとした。進が十二歳の折に病んだ腦膜炎も素はといへば妻の熱愛からの願をも願みず、父は休日中にすら暗誦を要求したからであつた。此病床に在つた數十日、全く生死の巷に彷徨うて居つた間、進も母と弟とは實に言ひ難き親切をもて看護された。たとひ父との間柄が如何にもあれ、進は其母松子夫人と其弟淳とは、實に上なく愛されて居た。進の天性純潔な心榮は彼等の限りなき愛を引付け、且此愛は父の全く進に冷淡なる様を見知れる彼等により、一層深くなつて來たのであらう、我不幸な進がホームと感し得るものありとせば、并は彼等二人の愛情のみである。

是れ等の事情より推察するならば、父の命ぜし時間迄に歸宅する事の出來なかつた進が、野球試合より歸つて來て門に近づきながら、何故内へ入るのを躊躇し居つたのであるか略々解るであらう。彼は丸窓の下を通る事を避け、家を廻つて裏へ出て、其處の階段より登つて裏二階の自分と弟との書齋に入つた。其處に誰も見えなかつたので、彼は再び下り來り、池の邊りま



て草木に蔽はれた小路を馳せて、漸やく小舟の中に飛び移り、自ら櫂を採つて中島に着き、直ぐに東屋の處へ往つて見た。其東屋の窓の下に全く書物に吞まれし如く熱心に讀書して、進よりは慥かに三つ年下の愛らしい少年が居つた。彼は如何に熱心に読み居るにや進の近寄るをさへ知らなかつた。されど進の顔色から察して見ても二人が如何に相愛し居る者であるか明瞭である。

「オイ淳ちゃん！何をそんなに面白さうに読んで居るの？」

「ア、兄さんの？如何して其様に静かに來たの？僕は少しも知らなんだ、今ねマコーレーのクライブ傳を読んで居た所！」

進は態と微笑みながら、

「淳ちゃんは英學者だね、でも此様にもそく暮方の光て書物を読み居ると盲人になるよ、早く御出てね。」

「何？兄さんはまだ家へ入らないの？モウ八時過ぎてせう。」

兄が未だ運動褌衣のまゝ居るのを見て進は氣遣はしげに尋ねた。

「勿論八時過ぎよ、僕は遅くなるとは知つて居ただけだね淳ちゃん！甚麼しても歸られな

かつたのだもの仕様がな、御父さんは怒つて居るか？ア、別に聞く必要もなかつた。無論怒つて居るに相違ないのだから。」

「お父さんは七時迄に歸れつて云うたのでせう。」

「左様さそれも忘れやしなかつたが競技會で後の會食迄七時には済む筈だつたのに、競技で七時十五分迄掛つたのだもの、それから直ぐに會食に出ずに清君と忠さんと一緒に歸つて來たのだが、此様に遅くなつたのだ。お父さんは何か云うて居たか？」

「否を別に何も云はれなかつたが、多分怒つて居らつしやるだらうよ。母さんがネ、進は何か急用が出來て遅くなつたのだらうと仰しやつたら、ナーニというていやな顔をなすつたの。進は遂に悲しげに云うた。」

「實に酷いな、お父さんは僕の爲る事には何事でも機嫌が悪るいのだから……」

「可哀相だね兄さん！でも屹度善いだらうよ能く説明したらお父さんだつてそんなに怒りやすまいからね。」

「否や駄目よ若し僕でなく是れが淳ちゃんの事ならお父さんは屹度怒りやしないのだが……」  
「モウ其様な事云ふちやいや兄さん！餘り遅くならない内に早く家へ入りませうね。」



「其様ニ僕等直ぐ客間に行かうぢやないか淳ちゃん！屹度御母さんが居るだらう、御母さんと淳ちゃんの居る處では御父さんも僕に餘り酷い事をなさらないからね。」

## 第五 父と子息

進と淳とは先づ客間に入つた、嬉しくも其處には母が獨り坐つて居たが「讀みつゝあつた書物は今や其手より落ちて床の上に在り、消を行く夕暮の光輝を眺めながら、何か冥想に耽り居つた様子である。」

進が母の傍に進み寄つて其膝にもたれた時、母の面は嬉しげに輝いた。夫人は斯くて直ぐ其日の出来事を尋ね、そして我子の謙遜な勇らしい勝利の物語をば、寧ろ誇りげに聽き居つたが、其話の終らぬ先に憂の口調もて尋ねるやう。

「進さん！甚だして此様に遅くまで歸らなかつたのですか？御父さんは時間を守る事を大層嚴格に入らつしやるのを忘れはすまいがネ、だから會食前に歸ればよかつたのに……」  
「僕は御母さん會食前に歸つて來たのですよ、競技が七時半迄掛つたものですから會食なんかせずに歸つて來たのです。」

「ア、左様な、それぢや勿論之れより早くは歸れなかつたのね、でもね進さん！私御父さんが不機嫌で在らつしやるだらうと思つて心配よ、御腹が空いたてせう、サ早くお上りね。」

「御母さん！僕が喰へる間食堂に來て居て頂戴ね、いゝてせう。」

夫人は幾分淋しい微笑を浮べた。彼女は此願の動機を知つて居る、其やさしい心には、其愛子進がいつも怖るゝ家の中に居らねばならぬ事を思ふ毎に、實に耐へ難き苦を感じた。進も亦母と弟との愛に浴しつゝあるに係らず、常に浮雲が其顔を蔽うて居る。些細な事にも父の不快を購ひやせんかと恐るゝのである。嗚呼父信淳と進との間には、實に深き詮方なき誤解の密雲が遮つて居るものだ。父は書物と首引する者のみが他日成功するものであると信じ居り、進は書物と親しむよりも寧ろ遊戯を喜ぶ方であつて、遂に己れを學者たらしめんとする父の望に全力を込めて進まうとはせなかつた。進にしても、多少考へて如何なる程度迄遊んだなら其才能の養成に障害とならないかを知れば善かりしものを。何事でも父が己れに要求する事は全然己が成し得る範圍外のものと同じに思ひ定めて別に勉むる考を起さないのである。進は餘りに自己を欺き易く、父は全く同情に缺けて居るのであるから、二人共に不幸てふ天罰は免れ得ないのだ。



尙僅かの愛と忍耐とが二人の間にあつたならば、信淳とても性質は善良な人であり、進も實際正直な上品な子息であるから、萬事圓滿に行くのであるのを、惜いかな其缺乏の爲に禍の手掛が出来居るのだ。此様な考は今むら／＼と母の心に湧いて來た。て夫人は苦笑しながら返事をした。

「ア、行つて上げますよ。そして食べる間待つて居ませうね。」

食堂へ行く途中父の書齋の前を通らねばならぬ、子供等が斯くも拔足に歩む様を見れば、父は慥かに其中に居るのであらう。信淳は全く之を知らなんだ、そして進が今になつても未だ歸らないといふ考は、益々心中憤を燃やし始めたのである。野球は殊に其嫌な遊であつたからでもあらう。

信淳は其子が其命令に背いて、斯く遅刻し居る事に對し、何か其間に餘儀なき事情があるであらうとか、てなくとも少くとも幾分か進の此罪を軽減する理由がありやせんかと熟考するのには、最早怒り過ぎて仕舞つた。

此間に進は食事し乍ら、母と弟とに其日の競技の模様を話し続け、殆んど父と遇ふ時の怖ろしさをも忘れて居つた。併し突然父の書齋の方より激しい鈴の音が響き渡つたので、彼は不圖

氣が付いた、信淳は進の歸つた時には知らなかつたもの、其食堂に於ける樂しげな話と笑の聲を聴いて、尙一層憤怒の情を増し加へ、そして其事實を確むる爲に今僕を呼んだのだ。

其餘の音を聞いた時進の容貌の激變した様子を見る事は、實に苦痛の極である。天性大膽な子供であつたが父の憤怒に逢はん事は、地震雷電よりも尙深く怖れ居つた程であるから、今や喪心する様蒼白くなり、最早前の話を續ける勇氣はなかつた。

家僕が來て父の用向を告げた時森夫人は進を慰めて云ふやう、

「私行つて能くお父さんに今日の事を説明して上げるから、其様に怖はがらないで居らつしやい。私が今日遅れた理由を御話したら、御怒にはなりませんからね。」

「有難うお母さん！何卒御願致します。」

進は母の親切に依頼して一時安心はしたものの、母の行さし後父と話し居る聲を聞いて再び失望の雲に鎖された。

「貴郎進にあまり酷くなすつちや不可ませんよ、其様に咎める程の事もないのですから……」  
「私が進を教育するのに何もお前の干渉は要らぬ、進が全く其品性を傷けやうとするのに喜んで居るとはお前にも似合はないね。」



「私は少しも進が其様に品性に傷を付けて居るとは思ひませんよ。だつて貴郎、私には随分従順な子ですもの……」

「ハアお前には従順か？それなら何だね、進は私にばかり態度不愉快を感じさせやうとして勉めて居るといふ譯なのだね。宜しい、モウ確かに解つた。」

「否えそらいふ譯ちやありませんよ、實際彼が貴郎の命令をさかなかつた事は少ないですよ、唯貴郎がもう少し折々親切な言葉を掛けてやりなされるなら……」

「何だつて？其様な事を能う知つて居る。耳に鯛の入る程さいて居るぢやないか、どうせ私が異親の様に悪いので、進には少しも咎むべき點はないのだらう、私は壓制家て進は天使か、フン其天使がベニスボール、バットの外世界に何事も知らないとは恐れ入る。」

「けれども貴郎……」

「宜しい、一つの事をお前と進とに約束して置かう、進は二度と再び此暑中休暇に野球をやつてはならぬといふ事だ、これが最も適當な刑罰ぢやないか、私が何時も我子の野良坊犬の機になるのを防がうとするとお前は苛酷い〜といふけれど、此事だけは酷いと云ふ事は出来ぬ。」

「何ですかそれぢや、家の庭で忠さんや清さんなんかとするにも不可なりといふのですか？」

「勿論です、彼は私の命令に少しの注意もせないて全く私を馬鹿にして居るのだから、其罰のあるのは當然です。嗚呼私は又何の因果で彼の様な子を持つたのだらう？寧ろその事彼が……」

「オ、貴郎！モウ御止しなさい、其様に貴郎を苦勞させるなら私もモウ此話は止しますから。」

「苦勞させぬばかりでなく、意地を焼かせる事少しばかりぢやない。私が如何程進の悪い事を悲んで居るかお前が来たのでは進に解るまい。よくも進にそれを一寸も知らせまいと陰謀んだね。歸つて直ぐに進を此處へお寄越し、此様な時には自分で来て詫びるがよい。朱鐵な奴だ。」

夫人は怒の一語だに發す事なく、譴責の一瞥をも向くる事なく靜かに起つて歸りかけた。良人が今云はれた事は皆無思慮な不正當な事ばかりである。されど如何に過失多くあらうとも尙彼は我良人である。そして又互に相愛して居るのだ。

まつ子夫人は食堂に戻つて、堰き敢へぬ涙を抑へつゝ進の頬を接吻してさゝやいた。

「お父さんがお前に入らつしやいつて……薄ちやん！二人は客間へ行つて居ませう。」

進は激しく鼓動する心臓を抑へながら、澁々と父の書齋に入つた。そして墨を見詰めて、



父の前に佇立んだ。彼は自ら何の悪事をも爲したとは思はない。雖然彼の道徳的觀念は父の不  
斷の苛責に依つて混亂して仕舞つたのだ。それで時としては是は少し悪いとい知りながらもや  
つて仕舞ふ事さへある。されど出来るだけ百も承知の孝行てふ道に逆はない様勉めたのだが、  
却つて數々父の不機嫌を招いた。此日にも進は遅くなるから如何せんと伊藤清とも相談したの  
であつたが、二人共同様若し父が此處に居つたなら屹度終り迄やれと云ふてあらうからと差支  
あるまいと思つて留まる事に決議し、爲に歸宅が斯くも遅れたのであつた。  
父は默然として一語も出さない。坐れとも來たかとも云はれないので、進は靜かに父に尋ね  
た。

「お父さん！何か御用ですか？」

「御用かとは何事だ？私の命令とお前の約束とは其様に輕々しい事ではあるまい。然るにそれ  
も此れも皆背いて仕舞つて居りながら、其理由を聞かうと思つて呼べば御用かとは何事だ、  
良心があれば既に知つて居りさうなものだ。」

「お父さん、それは私が御約束の時間より遅くなつた事ですか？雖然實際は………」  
「實際はお前が約束などは會食に比べると些細な事の様に思つて居るからだ。」

「否、私は會食には出ませんでした。」

「それなら何處に何をして居たのだ。多分清さんを苛責めるか、てなければ彼の忠の奴と何か  
悪い事でもし居つたのだらう。」

「私何も悪い事なんかして來ません。」

進は「はら／＼と起り來る我憤の情を制せんと勉めたけれど、今は父の此不正の攻撃に依つ  
て幾分怒氣を帯びて斯く答へたのである。

「宜しい、不從順の理由なんかはお前が勝手に際な時説明するがよい。」

「僕今始めたのですか妨げるから君……否やお父さん………」

「妨げる！君！これが父に對する言葉、宜しい最早何も辯解を聞く必要はない、彼方へ歸り  
なさい君！雖然一つの事を能く記憶して居れ、それはお前は今日最後のヘイスボールをやつ  
たのだといふ事である。」

「オ、お父さん！」

「お前は何つと高尚な事には動かないが、ヘイスボールと聞くと直ぐに威嚇すると思えるな。  
ア、お父さんそれは御無理です。」



進は父の顔を見詰めながら叫んだが直ぐに又其顔を反向けた。彼は是れ迄斯くも激しい言葉をもて父に答へた事はなかつたが、唯激した紛れに口が滑つたのである。父も驚いたが、進自身も驚いた。進は最早子供ぢやない。従つて近頃の衝突は前のと少しく趣きが異つて来た。父は激怒の餘り唇震へて言葉も出なかつたが其間に進は何と答へやうかと沈思して居た。良久あつて父は極めて冷淡に口を開いた。

「無理か如何か私は知らん、唯お前は如何なる申譯があらうとも機會があらうとも、學校に歸る迄二度と野球をやつてはいけなさいといふ事を覚えて居れ。」

進は激情を打沈め静かに書齋を出て、客間に歸り、母と淳との傍らに坐つた。三人共何となく言葉が出ない。進は何か雑誌を讀む風をして居たが實は母の姿を見つめて居たのだ。恰度母は首を垂れて、ハ、ハ、と蒼白い頬を傳ふる其涙を拭ひ子等に見られない様勉めて居るのであつた。進は讀む風をし居つた手に在る雑誌が倒れてあつた事さへ氣附かなかつた。

一時間も経つて信淳が此室へ入り來た時矢張り此光景を認めた。そして進の傍を通りながら云うた。

「勿論小説だ、併しそれも文學の一部で直接ベースボールと何の關係もないから倒に見る位し

か興味が無いと見える。」

進は静かに雑誌を閉ぢ直ぐに弟を伴れて寢室へ行つた。室に入るや否や其日の競技會で優勝者たりし青年は双手に其顔を抑へつ泣き伏した。柳が、  
柳の傍らなる兄の前に坐りながら淳は静かに尋ぬるやう、

「お父さんは何と仰しやつたの？」

「最早休暇中決してベースボールをやつてはいけなやつて、だが淳ちゃん！僕の悲しいのはそれぢやなS。」

「酷いね兄さん！氣を揉みなさるなよね、僕も悲しくなる。」

「暑中休暇も直ぐ過つて仕舞ふ、さうすれば僕は學校に往つて楽しく暮せるから心配せんでも宜しS。」

尚も淳の悲しげな顔を見て、

「お前知つてる通り僕はお前とお母さんとに別れるのは悲しいけれど、家が甚だ僕にはホームの様には思はれないから……」

彼は静かに夢心地して斯く云ひかけたが、斯く云うたのを怖れてか、

佐々の



「お休み淳ちゃん！ベースボールなんか甚だでも宜しいからね、お前と僕とは何もそれをせんでも楽しく運動が出来る。」

云ひながら其弟を梅の上に抱へ上げて、

「マア軽い事ね、お前は運動せなけりやいけなないよ。僕が體操を教へて上げよう。明日から直ぐ初めようね。」

## 第六 誘惑の手

次の一週間は進に取つて實に寂寞の日のみであつた。森家では子息等の爲に馬も飼つてないので、進の唯一の遊びは野球であつたものを、之を禁制されてから彼は全く手持不沙汰となつて仕舞つた。て始めて弟の計畫に従つて遊び居つたもの、體質虚弱な淳は兄の好む様な活潑な遊戯には永く耐へなかつたので、進は日一日と父の禁制に迷惑を感じて來た。そして彼の日輕卒にも激した紛れに「お父さんそれは御無理です」といふ一言が今更の様に我胸を抑壓へて來た。

遂に彼は明瞭な疑問——我は單に父の禁制ある故野球をやらずに居るといふ必要があらうか

？——と自問自答した。

彼は天性從順な者であつた。又其の清き良心の道德的思想は高潔なものであつた。雖然父の不親切な言行は愈々以て彼の心を激動せしめ、如何に抑制しても此誘惑は遂に反抗し難き程強くなり増る様に感ぜられた。

森夫人は是等の事情を痛く悲しみ、淳と共に如何にもして父の惡感情を打消し、進の迷惑を取除かんものをと企てつゝあつた。併し夫人の經驗に依ると夫人が直接干渉すれば何時も良人の不機嫌を購ふのである。て最も父の愛し居る淳の無邪氣な口より外に此事を圓滿に處理する手段はない。て或日淳は何時よりも早く其日課を終りて父を充分喜ばせた後、恰度晝飯の時勇を鼓して父に尋ねた。

「御父さん僕の御願を聞いて下さいますか？」

「何でも聞いて上げるよ、勿論御前は私が拒む様な願はずまいからね。」

と父は傍へに坐り居つた進を尻目に掛けながら優しく返答した。

「けれど僕の御願は僕自分の事ぢやありませんよ、それは……あの……兄さんの事なの。」  
「兄さんには兄さん自分に願ひたい事を云はせなさい」と父は全く冷淡な口調である。



「でも兄さんは僕が今御願しやうとする事を少しも知らないのですよ、僕の考なんてすもの。僕はね是れからお父さんが兄さんのペースをやる事を許して上げて頂きたいの。」  
「否え、兄さんはあの様に私の命令に逆つたのだからまだ許される資格があるまい。」  
「お父さんー若しあの晩私に説明させて下さりさへすれば、決して逆つたと思ひなされる事ぢやないのてしたが………」

「説明といふ事は何時も辯解といふ事だ。辯解はお前の大好きな事だらうが、私はそれを奨励する事は出来なす。」

「雖然私のは單に辯解ぢやありません。また私いつも辯解ばかり勉めて居るとは思ひません。そして私生れてから虚言なんか云うた覚えはありませんもの。」  
「進は我胸中の悪感情を制せんとして今は顔面せざるを得なかつた。」

「まあ何でも宜しい。私は今お前と議論なんかして居る隙はない。伊藤さんに行かなければならんぢや。」

「ぢやお父さんー私に許して下さいませんか？」  
「勿論當分は許さなす。」

父は室を去らんとして淳の頭を撫てつゝ靜かに云うた。

「淳ちゃんー私お前を失望させるのは氣の毒だが、今暫らく其願だけは許して上げられないからね。」

出て行く父の後ろ姿を異様の光ある眼して眺め居つた進は獨り呟やいた。

「噫尤もだ、お父さんは淳ちゃんを失望させるのは辛いのだ。淳ちゃんの好きな事なら何でも禁じた事がない。けれど私を失望させる事は何とも思つて居らないのだ。」

淳は是れが兄に取つて如何に苦痛なるかを能く知つて居る。父が自分のみ愛して兄に殘酷な事は、自分が殆んど崇拜して居る兄の感情を害しやせんかと、常に恐れて居るのである。實際世の親たる者が一方の子を愛し一方を顧みないといふ偏愛は有り勝な事でありて、全く人間の一大缺點である。自分の氣に合つた子は理もなく可愛く思ひ、少し氣に入らない者は何處までも悪むいとして仕舞ふのは誠に人情の弱點である。信淳も唯單に兄よりも弟を愛したといふ丈けてあればまだしもなれど、何事に依らず兄に對しては冷淡で又時には無益に苛酷に當るのは實に禍である。

父の行爲としては全く二人の子の仲を悪くし、斯くて不幸な家庭を作らん爲にのみ勉め居



るやうなものだ。雖然幸にして母の温かき愛と進の寛大な思想と淳の無邪氣な言行とに依つて、調和は取れて居るのである。尋常普通の子等ならば必ず猜疑から不和が起るべき處であるが、此兄弟丈は斯くも六ヶ敷間に居りながら、戀人の愛よりも勝れる熱愛をもて結合し居つたのである。實に淳の兄に對する愛は寧ろ一種憧憬の念であつて、兄は實に淳の理想であり英傑であり保護者であり又親友であつたのだ。

「ア、淳ちゃん！今云うた事を氣に掛けてはいけないよ。一寸口が滑へつたのだからね。それから野球はね僕悪いとは知つて居るけれど……僕構はんでやる積りだ。」

「兄さん！それは悪い！若しお父さんに見付けられたら其時こそどれ程叱られるか知れないし、又兄さんも自分で悪いと思ふ事は爲ない方が宜しいぢやないの？」

進は何とも答へなかつた。恰度此時門前で口笛を吹く者があつたので、進は獨り走り出た。處が其は藤原忠と伊藤清であつて生籬に寄り掛つて話し居つた。見れば忠はバットを持ち又二人とも運動褌衣を着て居るのだ。

「おい進さん！君は近頃サツパリ出て来ないね、此前の試合の時から最早野球は止めたのか？今度ね、次の週間に大學生と試合をする積りだから是非君にやつて貰はねばならん。」

進「何？大學生と？左様か……僕は……やれるか如何かまだ解らない。」

忠「解らないツて？ナ、ニやり給へ。清君。君やる様に勧めて呉れ給へ。進さんは君の云ふ事なら何でもやる様だから……」

清「僕は進さん君には勧められないね。君のお父さんが先達禁じたさうだから……」

清は言葉半ばに進の顔の赤くなつたのを見て、これは忠に家内の面白からぬ事を知られるのが嫌なのだなといふ事に氣付いた。

進「僕は儘かにやると約束は出来ない、未だ決心しないから……でも……若し外に人がなければ、先づ……數に入れて置いて呉れ給へ。」

忠「宜しい、何だ君殿父なんか何云ふたつて宜いぢやないか、何も知つた事ぢやないやね。」

清「否や僕は知らんよ、若し僕の父が禁じたのなら、僕は無理にやらうとは思はないが……」

進「でも清さん！伊藤さんはそれを禁ずる様な方ぢやないものね、君の御父さんは御自分もやはりなるのだし、又君のやるのを見るのが快樂なんだらうから宜しいわ、ア、最早此様な事は止さう、兎に角都合がよかつたら僕やりませうよ。」

忠「ウ、マイ、君が入つて呉れば此度大學生に勝てる、清さんと僕は今迄練習して來たのだ」



が、如何だ君僕の處へ来てやりませんか？」

進「宜しい、恰度何も用がなくつて困つて居る處なんだから行かう。淳も一緒に伴れて行つてよからうね。」

忠「宜いともく、淳ちゃんは可愛い子だ。僕大好きさ、オイ早く來給へ淳ちゃん！僕と二人皆來ない先に往ませう。」

と忠は今家より出て來つた淳の腕を把つて馳せ出した。

清「其様に良い人間か知ら？君にして忠さんが好きだとは理由が解らんな」

進「何故？僕は別に惡い人だとも思はないから好きといふでもないけれどまあ友達だわね。君は何と思つて居るの？」

「僕等の内惡い者は唯一人さ、僕も忠君を嫌ひぢやないけれど決して尊敬は出來ない。面白い快活な人には違ひないけれど、機嫌を害ねると手に合はない様になるのだ。僕は決して忠君を中傷する積りぢやない、随分面前でも此位の事は度々云うたのだからね。」

「其様な？僕は君こそ忠さんの親友だと思つて居たのだが、さうぢやなかつたのかね。僕は少し虛榮心のあるばかり別に惡い者だとも思つて居らなかつたが如何したの？」

「僕は忠さんと同じ學校に居るのだから君よりはよく知つて居るよ、まあ淳ちゃんだの僕の弟なんかがあの人との眞似をされちや困ると思つて居る。」

「ぢや何か今淳に惡い事でも教へなけりやいゝがね。」

「否や其様な心配はない、淳ちゃんは直ぐに見習ふ様な事をする人ぢやないから、僕は眞實に淳ちゃんの様な伶俐な無邪氣な人を始めて見る位だよ。」

「それぢや僕なら直ぐ忠さんの悪い感化を受けると云ふの？それで先程から心配して僕に云うて居るのだね、清君！僕は實際君のさう思ふのが正當だかも知れないが……」

進は「若し僕だつて淳の様に親切に取扱はれるなら、罪なき良き青年となるのだ」と云ひたかつたのであつたが、それ丈けを呑み込んで仕舞つた。

清は話頭を轉じて、

「僕は實際君が次の週間に試合に出られるのなら嬉しいけれど……」

僕はやると斷言したのぢやない。やれるだらうというたのだ。」

如何してやれるだらうと思ふの？君の御尊父さんの許可なしにやるの？若し僕が君だつたら僕はやらない積りだな。」



「僕もやらない方が宜しいとは思ふのだけれど……」

「雖然何？」

進は何とも返事せずに俯向いて小石を跳飛ばして居た。

「雖然、それから何、君？」

「まあ今は如何でも宜しい、忠さんの處へ往かうぢやないか？」

清は益々熱心に眞面目に尋ねて止まぬ。

「でも君、僕と約束して置き給へ。若し御尊父さんが許さなければやらないだらうね。若し君がやる事を御尊父さんが知つたなら非常に怒るだらう。僕だつてね正直其心配ばかりしてやつた處で面白かないのだ。又よし知れないにしても悪い事と知りつゝやらなくても宜しいだらうね君！」

「僕は今約束する譯には行かぬ。多分やらない方が宜いたらう、でもまあ考へて見やうよ。」

「宜しい、よく良心に訴へて考へて呉れ給へね。」

清は今其愛犬ローバーの此方へ馳せ来るのを見て、

「何だローバー！今日は伴れて行かないから早く家へ歸れ」と叫ぶ。





犬は幾度も石を轉ばし或は噛みなどして、此命令を聞かなかつた。

「何だか變だな此犬は！今朝も棒だの藪なんか噬んで居たのだよ、今日に限つて僕の命令をきかないオイローバー早く家へ歸れ！何？歸らないのなら歸らせてやるぞ。」

清は石を拾うて追ふ振りをした。ローバーは之を見て牙を露はし唸りつゝ走り歸つた。

清「あんなに不従順だつたのは今日が始めてなんだよ、ローバーと君と同様に素の性質を失つちやいけないね、さあ忠さんの處へ行かう。」

### 第七 淳の遭難

進と清とが互に手を把つて語り合ひつゝ藤原の宅へ着いた時、忠と淳とは球など準備して待受け居つたので、是れより四人共殆んど勞れ果てる迄、或は打ち或は受けなどして此日の午後を過ごした。斯くして彼等が歸宅らうと思ひ出したのは早や夕刻であつた。恰度忠もバットの修繕を頼む爲に共に家を出て、進と二人先立つて歩いて行つた、て其遠く離れて誰も居らぬを幸ひ進は清に物語る機会を得た。

進「僕先刻から考へたが、君の忠告に従つて今度の試合はやるまいと思ふ。」



「それは善い事だ。僕もそれこそ君と親友たるの甲斐があるのだ。御尊父さんが許さなければ、やらない方が君の爲に善いに違ひないのだからね。」

「嗚呼清君！甚麽も僕も素より一部の罪を負ふべきものだらうが君！……君は僕の心中を能く知つて居るだらう！そして又僕が家に居て幸福の時の少ない事もよく知つて居るのだから……噫！最早僕は何も云ひたくない。休暇も早く過つて仕舞へば宜い。學校の方が餘程僕には面白いのだ、若し淳と一緒に學校に居るのなら日が長けりや長い程幸と思ふのだから……」

「何故淳ちゃんとは君と一緒に同志社へ行かないのだらう？」

「それは僕も變に思ふのだが、多分淳は弱いから勉強に耐へまいといふ心配と、父の膝下で充分勉強が出来ると、父も亦手放す事が出来ない程可愛がつて居るのだし、も一つには僕と一緒にやつて置いたら、僕が解けるの手本を見せるといふ心配からなのだらうと想像して居る。」

「でも君は解けるぢやないぢやないか？」

「否や、僕は決して解ける積はないのだが、兎に角父の考ては遊戯に熱心な者は解ける者だといふのだから仕様がないわね。」

實際進の感想も無理はない。非文明の思想は此父に於て現はれて居るのだ。能く遊ぶ者は又能く働らくといふ真理を知らない者程愚者はない。會社でも銀行でも學校でも官衙でも其部下を器械的に虐使せんよりは寧ろ充分浩然の氣を養はせて置いて、而して事毎に熱誠を傾注させるやう積極的方針に出づべき筈であるのだ。算盤を持てる人は他界より火を貰ひに來られたかと疑はれ、卒業證書を受領に出る學生は麻痺してよろめく足を踏占めつゝ歩むやうでは、如何にして健全な思想明晰な頭腦を以て活動する事が出来やうぞ？近來著しく進の父の如き人が減少したのは頗る喜ぶべき現象である。折しも恐ろしい叫聲が響いた、二人は何事かと其方を見やれば、忠と淳とが共に危難を叫びながら、此方へ逃げ來るのであつて、淳は忠よりも二町程後れ居つた。

最初事の原因は何であるか少しも解らなかつたが、忠が近く馳せ寄つた時彼は止まりもせて喘ぎながら叫んだ。

忠「逃げ給へ〜、一生懸命に逃げ給へ！」

進、清「何？何？何故なんか？」

忠「ローバーが追つて來る〜、氣狂ひになつたのだから大變だ〜。」



赤き舌を長々と出して、血走つた眼を光らせつゝ、近邊の何物でも喫んだり噛み砕いたり又時には自分の身をさへ噛みながら、三十間も隔てぬ處までやつて来たローバーを見た時明かに恐水病に罹つた事が解つた。其狂犬の二三間前にははれ淳は慄へながら時々石などに踏きつゝ蒼白くなつて走つて来る。忠は能く馳せられたが哀れ小さき淳は獨り後になつて今にも毒牙に觸れんとして居る。之を見た進は最早我弟は危害を免れ得ないと思つた。

健全な勇氣と純潔の氣概とある者は、斯かる危難に方つて能く泰然自若たるを得るものだ。進は一刻も猶豫あらせず殆んど直覺的に其取るべき正當な無二の方法を思ひ定めた。

進「止まれ忠君！止まれ！其バットを貸し給へ！バットを……」

忠は自己が危害を懼れて全く夢中に走りつゝ振り向きもせなかつた。進は今も一刻も躊躇すべき場合でない、直ぐに忠の後から追ひ付いて其バットを取り返し、大膽にも其弟を救はんとして戻り來つて其狂犬に向つた。此は實に死地に飛び込む様なものである。されど進が健氣にも双手に其バットを掲げて待てる態度は實に勇ましいものであつた。そして弟を戒しむる爲め朗らかな聲を揚げた。

進「曲れ！曲れ！曲れ！曲れ！」

哀れ淳は事の餘りに急激なるが爲兄の聲は確かに耳に鳴り響けども、其様に處する事が出来なんだ。そして唯忠の後を追うて真直に馳するのみであつた。狂犬は兎角する間に早や淳の踵に近づいた。彼は其怖ろしい喘息を聞いたのであらう、最早是れまでと覺悟してか、立止まつてよろめき倒れた。

彼はローバーの恐ろしい喘ぎの音も覺えて居る。其鋭い牙が己が足に觸れた事をも覺えて居る。又彼は驚くべき大殺しの打撲の音が響いた事をも覺えて居る。そして今や苦痛と疲勞とに夢中になり掛つた時、強い人に抱き上げられて何處へか運ばれる事迄知つて居たのである。

此出來事の記事は此く長く掛つたけれど、時間には實に一瞬の間であつた。清も亦進と同様敏活に勇敢に淳の救援に赴いた。そして清が淳を抱いた時は恰度犬が淳の足に噛み付いた時であつた。同時に進は其傍らに立つて兼て用意のバットを振り上げ、多日の練習に依つて球を打つ様に一打撃を加へたので、狂犬は全く頭骨を碎かれ即死して仕舞つたのであつた。清は淳を抱いたまゝ路傍の芝生の上に坐つて居た。進は斃れた犬の珍らしい神經痙攣を見るの暇さへなく清の傍らに馳せ寄つて、

進「清君！淳は大丈夫かね？僕が打つ前にローバーが淳の足に觸つた様だと思つたが……」



「ア、遅かつたなく。」

進は今や淳の霜降りノズボンに血の浸染んで居るのを発見したのである。て二人は直ぐにズボンを脱がせ、靴下を除いて踵の處に二つの牙の跡から血の流れ居る事を知つた。幸にも牙は二つの外血の出る程深くは通らなかつたのである。併し二人は是れが我弟我友の生命を危うする傷になりやせんかと少なからず恐懼の念に打たれた。

進「清君！急いで其邊の旅宿までつれて行くから手傳つて呉れ給へ。」

清「一寸待ち給へ、其前にする事がある。」

清は其ポケットから糸を出して淳の傷の上部をキリツと縛つた。そして後二人は大意に淳を擔つて路傍の旅籠屋につれ込んだ。此時淳は目を開いて怖る／＼尋ねるやう、

淳「僕は噬まれたの？」

進は殊更に快活な調子で、

「否や一寸丈だ、眞の一寸だ。今此宿屋に連れて来た處なんだから、暫らく静かに眠つてお出でね。清君！忠君は家迄逃げて歸つても直ぐ来て呉れるかてなければ、誰か救援の人を寄越して呉れるだらうと思ふが……。」

二人は淳を床の上に横たへた後主人に出来事を簡単に物語つた。そして進は更に爲すべき處置を考へた。

進「清君！君此處に淳に附いて居て呉れ給へ、醫者は五六町先にあるから僕一寸大意に走つて往つて来るからね。」

淳は夢心地しながら之を聴き付けて熱心に進を止める。

「ア、兄さん！僕と一緒に居て頂戴ね。ねえ兄さん！居て頂戴よ。」

「僕直ぐに歸つて来るよ、清君は僕の様に早く走れないから僕が行つた方が宜いのだ。」

併し淳は半ば身を起して兄に振り付き、甚だしても行かせまいと思つて居る。て進も無理に逆つて氣を揉ませる事は悪いと思つて、静かに清に頼んだのである。

「清君！一寸走つて往つて来て呉れ給へ。此様に云ふのだから僕は此處に弟の番をして居るかからね。」

答ふる暇もあらず、清は愛と恐懼との兩翼を擴げて此處を飛び出した。後に淳は兩腕にて兄の頭を抱き、自ら其首を兄の肩先を横たへたまゝ、静かにスヤ／＼と昏睡して仕舞つた。



## 第八 父の過失

美

清の行つた後進は其傍らに来て饒舌つて居る旅宿の主婦や女中を退去させ、静かに淳の梅の上に横たへて、堅く結び合せた其手を解き、手巾もて其傷口の血を拭ひ去つて其跡を吸はんと屈んだ時、淳は之を知つて力任せに押し退けた。

「ア、兄さん！傷口を吸つちやいけないよ、普通の毒と違つて若し舌に極小な毒でもあつたら直ぐに恐水病に罹りますよ、何卒兄さん！御願だから止して頂戴よ、若し無理にするなら僕を殺すのですよ。」

淳の頬には熱き涙の流があつた。

「でも如何すれば宜いの？淳ちゃん！多分醫者は家に居らないのだらう此様に遅いから、来る迄待つて居ると遅くなるもの……如何したら宜いだらうな？」  
唯單に兄を押し退けた丈けれども既に淳は勞れ切つて、再び昏睡に陥つた。て進も餘り激せざる事の悪い事を知つて其意を逆はうともせなかつた。稍あつて淳も漸やく勢付いて來たが靜かにさゝやくやう、

「兄さん！僕應急の方法を知つて居るの、それはね火箸か編棒の様な鐵を熱するの。」

進は直ぐに弟の意を解して主婦を呼び、火箸を赤熱にして持つて來るやう命じた。暫らくにして其赤熱になつた事を知らせ來た時、

「何程位熱すれば宜いの？淳ちゃん！」

「熱すれば熱する程疼痛が少ないから、白熱の方が宜しいの。」

主婦が一端に布切れを巻いて白熱した火箸を持つて來た時、進は蒼白くなつて震へた。

「ア、淳ちゃん！そりや酷く痛いだらう、僕には出來ない、如何しても出來ない。」

「淳は殆んど聞こえぬ様な小さき聲にてさゝやくやう、

「何卒兄さん！……僕の爲に痛くつても……死ぬ……よりかは……。」

淳の願に依つて進も始めて堅き決心をなし、健氣にも弟の足を捕へ再び其傷口を拭ひ、斯くて其白熱の火箸を一つの傷の中に犬の齒の入つた丈け深く挿入れた。そして又一つの淺い傷にも再び之を挿入れて、老主婦が恐怖と稱賛との沈黙の眺めを向け居る間に斯く全く其療治を終へた。

若し淳が此療治中痛みの爲に動きでもしたならば進は屹度決行の勇氣が阻喪したてあらう。



雖然兎に角者白くなつたまゝ耐へて居たので、事は済んで仕舞つたが、再び弟を抱いて其頭を弟の胸の上に乗せ掛けられた時、思はずも涙は其頬を傳つたのである。良久ありて淳は蚊の鳴く聲といふ程の低い調子で兄に話した。

「兄さん！僕の爲になら泣きなされるなね。僕は今兄さんのなすつた事で生命だけは援かつたと思ふから……」

「淳ちゃん！此様な事がお前の身の上に来るとは考へても怖ろしい、寧ろ僕にならよかつたのに……」

淳は其小さき手をもて兄の口を掩うた。

「僕大丈夫だと思ふの、何故かつて云へば、僕のズボンと靴下の上から噛んだのだから毒があつても入らなかつたらうと思ふし、又若し神様が僕に何かの爲に毒を下すつたのなら蛇度とれに耐ふる力を與へて下さるに違ひないから……」

「如何して清君は此様に遅いのか知ら、醫者が居らなかつたと見えるな、早く来て呉れると宜しうがな。」

「眞實に早く来て呉れると宜いね。兄さん戸外に出て見て呉れないの？」

進は答ふる間もあらず直に戸外に出て、道の彼方を見やつたが、少しも来る様子が無い。今迄は小さな室に閉ぢ籠つて何となく恐ろしさに打たれ、胸は荒波の如く動揺めいて居たが、外へ出て杖を掠むる夕への軟風に幾分か氣も落着いた。落着いて眺めても未だ靴の音も足の音も更に聞こえないのである。て進は一寸馳せて先に犬を殺せし場所へ行き、棄て置いたバットを忠に返却す爲拾つて旅屋の前に再び戻つたが、家へ入る前其心は靜かに神に接せんとし、佇立んで瞑目したまゝ殊勝にも手を合せて、

「オ、神よ、此怖ろしい禍より我弟を救ひ給へ、今其上に來らんとする死の運命より彼を救ひ給へ。」

と祈つたのである。恰度此時冷淡な嚴格な口調で道路の彼方から進ッと呼んで信淳が其傍へ近づいて來たのであつたが、進は祈の爲に其聲を聞き落した。

父「進ッ、私二度もお前を呼んだがお前聞えないのか？それとも聞かぬ振りをして居るのか？」  
進「御免なさいお父さん！私は一寸も知りませんでした。」

「あゝ左様だらうとも、若し知つて居るなら此意な茶屋の前で私を待つて居らう筈もないからな。見れば此茶屋とも随分懸意らしいが能く來て居ると見えるな。先達私がお前の墮落の



事を云ふたら大層怒つた様だつたが、お前は此處で全體何をし居つたのか？酒でも飲んで居たのだらう……」

「否、私何も飲んでなんか居りません、生れてから茶屋なんかに入つた覚えはありませんが」

進の胸中には如何にして父の愛する淳一身上の出来事を、其父に知らせたならばよからうかといふ一種の苦悶が起つて居るのだ。て怒るよりか寧ろ悲しい感かして、斯く父に應へたのである。然るに父は進の手にし居つたバットを見付けて最早怖ろしい口調をもて叱咤り出した。「それぢやお前は私の禁じたにも不拘野球をやつて居つたのぢやな。」

進「否。」

答ふる間にも進の顔色に何となく不安の相貌があるので、何事をも知らぬ父には、全く我を騙かんとして居るのであらうと邪推さるゝのみであつた。

「お前は酒に酔うて私に虚言をいうて居るに相違ない、お前の面にあり／＼と書いてあるぢやないか、そして若し野球をやらなかつたのなら其バットは何の爲に持つて居るのだ？豈夫杖の代りに擔ぎ廻る人もあるまいからな、其様に私の命令に背いてもそれで私が黙つて居ると」

思ふのか？」

「お父さん！まゝ待つて下さい、それは少し違ひます、そして可哀想に淳ちゃんにも聴こえますから。」

「何？淳も此處に？それぢやお前は淳迄も悪い方に誘つて居るのだな、進ッ！何處にても行つて仕舞へ！貴様は何處迄も私の面汚した。」

嗷鳴りながら其手にせる草の鞭にて進の肩先を叩いた。暫らくは進も全く麻酔せるかの如く突き立つて居たが、聽て其眼のさらめくと共に怒聲を發して父の鞭を奪ひ、羅の彼方に投げ棄てた。折しも茶屋の窓より、

「ア、お父さん〜。」

と呼ぶ幽かな聲が聞こえたので、信淳は更に進の今の所爲を咎める暇もなく、戸を排いて入り込んだ。

淳は戸外の物音を聴き同時に父の聲もする様思つたので、直ぐに父が又何か誤解をしたのであらうと想像した。て兄に對して誠に氣の毒ではあると思つて居たものゝ、何分頭を掻けて話すさへ困難に感じ居つた。併し今父が嗷鳴つたので不圖眼をみはつて父を呼んだのである。



れど是れ等の心配をした爲か一層疲勞を覺えて、父の中へ入り來つた時には、全く勞れ果て、其顔は益々蒼白くなり一見死人の横はつて居るやうであつた。

此時伊藏清隆と其子清とは醫者と共に入つて來て、醫者は直ぐに療治に着手した。

醫「誰が此齒の痕跡に灼爛術を施しましたか？」

主婦の外に見て居た者はない、て彼女は答ふるやう、

主婦「さあ其灼爛術とか何とか私には解りませんが、どうも充分知りませんから御話は出来ません、能く知らないのに御話したら虚言になりませうからね。」

醫「少し簡單に話して下さいな、誰か熱い鐵で傷口を焼いたてせう、それは誰ですか？」

主婦「でも私は申付かつた事だけ致しましたので、私は自分の手を出した譯ぢや御座いませぬよ。」

醫者の一寸閉口した時に下婢は主婦よりも少しく快活に話した。

下婢「それは兄さんの方が爲すつたのです。」

醫「ア左様ですか、そして犬を殺したのも其兄さんだね、健氣な青年だ、誰でも恐らく此様な處置は出来まいよ、此傷にも能く施術したものだ、私自身此處に居つた處て是れより善くは

やれまいと思ふ程に能くやつた。」

醫者は傷口を繃帯しながら斯く頻りに賞め居つた。

清隆「進さんは何處へ行つたらう？今入口の處へ立つて居た様だつたが……」

聲に應じて皆其邊りを見廻したが進の姿の見えないので、清は外へ探しに出掛けたが、恰度道の彼方に歩みつゝ其後姿を認めた。

父と別れてより進の胸は實に張り劈けんばかり燃え上つたが、二三分其處に立つて居た間に次第次第に沈静まつて來て、最早清は充分看護されるが、次には母が此怖ろしい出來事を極めて静かに、氣絶てもせない様に話されねばならぬと思ひ、自分より他に之に適した者のない事を考へるまに、愛情と憐愍の情とが其心に満ち渡り、未だ我身を愛する母のある事を思ふ

と私かに感謝の外はなかつた。そして漸次家に近づくに従ひ最早前に父と衝突した事などは全く打忘れて繰返し、「神様何卒此恐ろしい運命から弟の身を救ひ給へ」と祈るのであつた。

醫者と清隆との進を稱賛する事は、下婢の物語の事毎に其度を増し加へて、

醫「此様な場合に斯くも能く沈着して處置し得る青年は恐らく一萬人に一人もありませんよ。」

と云へば、清隆も亦信厚の顔を見やりながら、



清隆「左様ですな實に感服です、だから彼の子は今一層親切な相當な取扱を受くべき権利がありますよ。」

と叫んだ、二人共急いで此家へ入る時に其入口に信淳と進一が何事か不興の態度に在つた事を目撃したのである。併し今信淳は唯黙然として居つた。彼の頭には淳の弱い消え入るやうな呼吸を氣遣ふより他に何の考もない様子であつた。雖然今の話を全く聽かない譯ではあるまいと思はれる。恰度淳が眼を開いて其邊りを見廻はした時に父は靜かに問ふのであつた。

父「如何したね淳ちゃん！」

淳「最早少し善くなつた様です、唯一寸驚いた丈けて何でもないのですから……兄さんは何處へ行つたてせう？お父さんが叱つて居るのを聞いて僕喫驚して仕舞つたのですよ。」

清「進さんはね、家の方へ行つた様だつたから、屹度も母さんに話しに行つたのでせう。」

淳「左様？そりや嬉しい、お母さんの失望しない様に話すのは兄さんでなければ出來ない。屹度も母さんも驚かないでせうよ、そして實際僕は最早大丈夫だからね、勿論焼いたから少し痛むけれど……そして清さん！僕眞實に御禮を云ひますよ。自分の危険も構はずに援けて下さつたのもね、生きて居る限りは生命の親だと思ひます。又兄さんは僕如何して愛

したら宜しいでせう？僕が最早怖はくつて半死に掛つた時に兄さんが大膽に冷靜かに立つて居たのも覺えて居るが、今は其姿が全く畫を見る様に目に散らつて居るのです。兄さんは僕を援けに天から降つた天の使の様に思はれたもの……」

醫「可愛い兄弟ですな、あなた善い見だから餘り最早御話なすつちやいけませんよ。今一番大切な事は靜かに休むばかりですからね、て森さん！貴君直ぐ馬車でも用意させなすつて御宅迄お伴いなさい、そして可及的心配なさらぬ様に注意しておやりなさい。淳さん！最早此事を考へてはいけませんよ。又決して怖がらなくも宜しいです。最早大丈夫ですからね。犬はズボンの上から噛んだのですから幸でした。又若しそれで毒が全く拭はれなかつたにしても、兄さんの施術で以て全く消毒が済んで居ますから安心です。」

淳「有難う御醫者さん！僕最早少しも怖がりませんよ、神様は僕を援けて下さると思つて居ますから安心して居ます。可及的皆忘れる様に致しませう、と申しましても清さんと兄さんとに御禮をする事だけは忘れませんよ。皆さん有難う御座いました。」

醫「神様は屹度恵んで下さるに違ひありません。それに又私明日御宅へ伺ひます。否や別にあなたの御病氣が變化するのを心配するからぢやありませんが唯御見舞がてら上つて、お兄さ



んに能く施術をなすつたと一言賞めて上げたいからですよ。」

醫者は丁寧な信淳などへ會釋して此家を去つた。同時に森家の馬車が折よくも此家まで迎へに來た。否實は進が家へ歸つて母に出來事を話す前、先づ別當に斯く命じたのだ。

淳は皆の手で馬車まで抱き上げられ、信淳が會計などを済まし居る間に、清は淳の枕などを整頓し居つた。

清隆は信淳と別るゝに臨んで冷靜に語り出た。

清隆「左様なら森さん！私實に此遭難に對して御同情を申します、併し貴君は子様に就ては御幸福な方ですな。淳ちゃんの様は恰好な愛らしい子は私見た事がない位。何時も私淳ちゃんを見る度に思ひ出すのですが、彼のウラトツウウラヌの一句、

「逢ひし誰もが愛てし幼兒！」

てせう、それに進さんは私自分の子と同様に可愛く思つて居るのですよ。だから清と親友なのは實に嬉しいです。」

信淳は如何にも悲しげな口調に清隆の云ひし一句を繰返し、

信淳「逢ひし誰もが愛てし幼兒！」……でも伊藤さん！其前の一句をも御存知ならば、何故

貴君はそれと尙一層私を惱ませるのでですかと。

「惠の神は取り去りぬ。逢ひし誰もが愛てし幼兒！」ぢやありませんか？雖然伊藤さん！今分ては先づ援かりそうですが……如何も御世話になりました……」

尙も云はんとして其言を呑みつゝ清隆と握手したが、良久ありて語を續けた。

「若し進ばかり殘される様な事になるならば……」

「何です？何を云ひなさるか？何も淳ちゃんの怪我は左程御心配にはなりませんもの、そして若しや萬一の事があつたにしても、進さんは親として肩身の廣い程善良な子ぢやありませんか。失禮ですが今夕私共が此家へ入つて來た時に何か御不興の様に見受けましたが、あれは

……」

「否え、あれは一寸の間違でした。併し私何も家庭の事を他人様に話するぢやありませんが、どうも進は其惡い方面のみを私に見せやうと勉めて居るのだから困りますよ。」

清隆は黙したまゝ再び會釋して清を伴ひ家路に向つた。其心には「お父さんの方に色々悪い事があるのだ」と計らずも思ひ浮んだのである。

親子は犬の死體が横はつて既に蠅のブン／＼と集まりたかつて居る傍を通りながら、其前日



からローバーの症候があつた事やら進の勇敢であつた事などを物語り、清隆は又己が愛子の能く友の爲死生を顧みずして救援に赴いた徳を賛め、清と進とに好むまゝの褒美を與へやうと約束された。又忠には何か上げやうかと清に尋ねられた時、清の返答は案外であつた。

清「ホ、一番先きに逃げて仕舞つたからですか？……、全體忠さんが淳ちゃんを授けるべき筈だつたのですが、夢中になつて逃げて仕舞つて、行つたら最後援の人を寄越すでもなければ、僕等が如何したか見にも来て呉れないとは随分ですね。」

實際忠は其場を遁れたから道路を行くのは危険と思つてか、畑中を遠廻りして家に歸り、全く疲勞と恐怖とに負けて再び出る勇氣はなかつた。元來彼は臆病者ではない。雖然友誼を考の左まで深くない彼は、自然己が身の安全さへ守れば、最早他を顧みるの暇さへなくなつたのだ。家に歸つて何を爲せしかと尋ねれば、早速彼は家扶を呼んで酒を無理に持來させ、思ふ存分辯さ晴しをやつたのであつた。嗚呼彼の家に斯かる不信仰の家扶が居り、父は更に其子の行爲を監督する事が出来ず、又寧ろ無頓着で居り、尙更に最大不幸ともいふべきは、忠の望むがまゝに何にても得らるゝ不自由なき富裕の境遇であつて、是は遂に此一家此愛子を禍するに至るのである。

### 第九 好時機の逸走

信淳は伊藤父子と別れて馬車に乗り淳の傍へは腰を卸した。今しも二人の胸には種々な感慨が發々と起つて居る。されど淳は勞れ果て、全く沈まりかへつて居り、父も亦一言だに云はず馬車を驅つたが、良久あつて淳の小さき體態なく手は父の大きな堅き手を握り、斯くて怖る怖る父に尋ね掛けるのであつた。

「お父さん！何卒兄さんに親切にして上げて頂戴ね、宜いてせう！」

此一語而も殆んど聽き取れぬ程の幽かな此一語は痛く信淳の心を刺した。何處に行つても何を考へても又誰を語らうても皆己が進に苛酷過ぐるのを咎める様に感ずる。先には態と注意せず居つたものに彼の醫者も憐かに左様云うたのだ。伊藤氏も明かに自分を責問されたのであつたが、今又淳迄が同じ感情を其心に懷いて斯く問ふのであるかと思つた時、流石の信淳も我良心の苛責に耐へぬ想がする。淳は實に優しく愛らしく願つたので尙更父を感動したのであらう。雖然此様な願に對して曾て優しく答へることの出来ない父は、返事をする前矢づ躊躇した。が淳の手が益々震へて來た時に漸やく答へたのは實に此様な事であつた。



「私は子供等に對して其様に不親切なの？」

「否、私には決して左様ぢやありませんが……」

後の言葉は出なかつた。

「そして又進に對しても不親切といふのぢやないのだ、だが淳ちゃん！ お前は未だ小さいから必要な訓練と不親切といふ事の區別が解らないのだ。だから最早決して此事に就ては何も關係してはいけません！」

淳は此一言に最早何をも云ひ得なかつた。唯長い太息を吐いて馬車の中に横たはつて居たのであるが、靜かに身動きもせて考へ込むと、更に重い／＼荷が其心の上に落ち掛つて來たやうに感ぜられた。

間もなく馬車は家に着いて信淳は種々と下婢に命令して居つたが、淳は其足を引摺りながら、客間へ入つて往つた。其處に母と進とが其歸宅を待ち居つたのである。まつ子夫人は淳の姿を見るよりいち早く入口に飛び出て、双手に其子を抱き上げ、數限りなき接吻もて我子を慰勞する間に、愛と憐れみとの温かさ涙は其子の顔を洗つたのである。

實に愛溢るゝ母は其情を制する事が出来なかつたのであつたが、其悲しげな様子が淳に心配

を掛けてはならぬと氣付いては、可及的樂しげな風をした。

淳「お母さん！ 今日の記事は皆能く御存知でせうね。」

「え、皆能う知つて居ますよ。其様な事を心配しちやいけません。兄さんは私が一寸も驚かない様に話して呉れましたから、少しも心配しては居らなかつたの。」

「お母さん！ 若し兄さんが私を撥けて下すつた様子に御覽だつたら、乾度自慢なすつたでせうよ。」

進「否や、何唯淳ちゃんが僕にして呉れる位の事をしただけなのさ。」

淳「否や、全く彼の犬の頭を球のやうに甘く打つた處は實に夢のやうだつた。」

淳は如何にも誇りがに樂しげに兄の顔を見上げながら共に窓の傍へに坐つた。恰度夕べのそよ吹く風に草花の薫りを傳へ來る處、實に得も言はれぬ氣持がして、淳は永く此夕べを樂しむたいと思つた。

「お母さん！ 皆で中島に行つてお茶でも飲みませんか！」

「淳ちゃんはお父さんを忘れたね、お父さんは其様な事を御好まにならないもの、でも一寸御待ち、私行つて伺つて見ませう！」



松子夫人は其良人が今客間に見えぬのを少しも異とは思はなかつた。何故かなれば聰明な夫人は良人が今把持つて居る感情を人の前に發表するのが嫌ひであらうといふ事を能く察して居るからである。併し夫人も自分獨りの處なら必ず思ふ儘を話すであらうと思つたて、良人の書齋に行つて見たが、恰度信淳は机の前に頰杖ついたまゝ首倒れて居た。そして今夫人の入ら来たのを見た時言つた事は極めて簡單なものである。

良人「まづ子！ 淳は實に九死に一生を拾つたのだ、全く神の救ひなんだね。」

夫人「眞實にあなた、不幸中の幸てしたね。そしてまあ當分は思ふまゝにさせて神經を沈めさせなければいけませんね。」

夫人は良人の次の言葉を待ち居つた。進に對しての一言を待望して居たのである。雖然良人は何時までも無言で居る。嗚呼實に此夫妻の間でさへ進に關する事は斯く取扱に困難して居るのだ。今信淳も半ばは進を賞めたくも思つた。雖然前から數々進に苛酷であり、又其する事なす事皆輕蔑し居つたので、彼の高慢心は今唇まで出掛つた言葉までも齒に噛み占めて仕舞つたのだ。

夫人は暫らくして口を開いた。

「それで可愛想にあなた！ 進を賞めて上げないのですか？」

「言つて見たもの、實は後悔した。嗚呼言ふのぢやなかつたものと思つた。良人の顔には一種の雲が掛つてきた。

彼の心裡の動機は明かに「何だ進！ 進つて！ 進の事の外に聞いた事がありやしない」といふべき程であつたが、併し此日の出來事を聞いてからの我妻の心も讀めるので、極めて冷静に斯く答へた。

「左様だね、進は先づ正當な事をしたね。」

と云ひしもの、後から口走つた一言で全く打消されて仕舞つたやうなものである。後からの一言とは何？」

「不思議にも能く正當な事をやつた。」

嗚呼不思議にも正當な事をした。さらば常には何をなすつゝあるのであらうか？ 夫人の唇は少しく震へざるを得なかつた。雖然無理に抑へて靜かに云ふ。

「あなた、私何も進の事で其様にあなたに意地を燒かせる爲に來たのぢやありません。唯子供等が望みますから御一緒に中島へ往つて御茶でも召上がりませんかとお尋ねに參つたのです。」



「否や、私は往きますまい。無論私が往かずとも皆樂しいのだし、私は今晚非常に忙しい調  
べ物があるから、まあ私は此處へ持つて來て貰ひませうよ。」  
「は、さ。」

夫人は今良人の室を去らんとして入口に出て往いて、戸の引手に手を掛けたまゝ暫しが程は  
躊躇した。若しやも少し温かな笑顔でもされて、此冷やかな話を解かすやうな優しさでも見  
られるかと思つて良人の顔を覗き居つたのであつた。併し良人は既に調べ物に着手して其方に  
心を奪はれつ夫人の立ち居るをさへ知らぬらしい様子である。

如何に頑迷な心をもてる人であつても、父たる者が此間多少の感想なき筈はない。併し信  
は天性感情を外部に表現す事を好まぬ所謂臆汁質の人である。成程或場合には男として饒舌の  
不徳たる事が多い。されど「口開いて心腹見するさくろかな」とは家庭の内部殊に何隔てなき  
夫妻の間などに適用すべき文句ではあるまい。夫人もさすが太息を吐かざるを得なかつた。が  
併し可及的快活な風をして子供等の傍へ歸つた。

「私茶道具を中島へ持たせてやりましたからね。淳ちゃん！さあ行きませう、父さんは今

晩大層忙しいのでつてさ、淳ちゃん！ちや私につかまつて歩さね。眞實は前今晚  
なんか休んで居た方が宜しいのだが………

「否えー御母さん！何卒連れて行つて頂戴よ、私最早大丈夫ですから。」

中島では既に茶の準備がなされて居る。進は今や母と弟とを載せた小船をば、月の姿を寫し  
て居る小さな鏡の池の面に操縦るのであつた。櫂をかへせば滴る水が月の光に輝やいて數限り  
ない夜光の玉を現出する。進は肌衣になつて小舟を操縦り、夫人は輕き肩掛をかけて船に坐り、  
其腕に淳を抱いてゐる。淳は又夫人の肩に倚たれて居たのである。嗚呼此の夢に遊べる樂園の  
やうな夕べの得ならぬ樂しさは如何に長く彼等の心に肥めらるゝ事であらうか？三人の感情が  
いろ／＼と移り變つて居る間に舟は又そろ／＼と進んで今や漸やく島の岸邊に近づいて來た。  
其岸邊には忘れな草の愛溢れる小花が限りなく微笑みつ、石竹の眞紅の唇と相語つて、鏡  
の水に寫る己が姿を伏目勝になつて望んで居る。

此様な幽景の中に包まれると人の言葉は自然と内情に沈み込むものである。三人は其周圍を  
見廻しつ、靜かに黙して互に見返れば何となく氣は益々打沈んで來る。尤も進は三人中で沈み  
かへつた一人である。此日の出來事が今や大なる反動を齎らして、何故か自分にさへ解らねど



此幽景の美に沐浴しながらも、彼の心裡には沈鬱の暗路より更に深い常闇に迎り入らんとする薄暮のやうな或物がある。如何しても自分で之を振り捨てる事が出来ない。来るべき悪運の前徴でもあるまいが、死の影の谷より立ち昇る濃霧の様なものが、彼の心胸を蔽ふたのである。漸次に彼の黒い眼は曇り初め、首も次第に首低れて来、其片手は力なげに小舟の傍へなる石竹の花弁に觸れ居つた。

「此様な美はしい夕べに、進さん！其様に鬱ぎ込んだらやいけませんよ。」

彼は斯く云ふさへ早や憂鬱の種となりて居るのだ。夫人は種々な話に其元氣を快復させんと企てたが、如何しても話が生きても来ない。其間に進は岸邊の忘れな草を心なげに摘み取つて母の膝上へ一束を積んだ。て夫人は二人の子等に其中の大きな花を選ばせて、此日と此日に起つた事との記念にと、標本にした上聖書の間に挿んで生涯保存すると約束した。

月も追々と其歩を進めつ、星もますます輝き出たので、津が夜露に打たれぬ内にと三人は家に歸つて客間に集まり、夫人は今や其麗明な聲をもて子等の好む快活な歌を歌ひ聴かせて居た。此時にも進の考は數々夫の疑問に立到るのであつた。

「父は僕が今日爲した事に就て何とか思つて呉れたらうか？後に聴いたら全く誤解であつて、前は善い働をしたと賞めては呉れまいか？否や僕は決して賞めたいのぢやないが、父は兎に角今日僕を打つた事が悪かつたと云ふて呉れるであらうか？否少くとも不當に僕を疑つたのであつた事を自認して居らるゝであらうか？」

斯く考ふるは實に自然であらう！せめて親切な一言でも賞めるといふ姿態でも又は愛の籠れる握手でもされるなら、進も實に感極つて嬉し涙と共に父に飛び付いて、是より父の望に添ふ爲には有らん限りの力を揮ふ事になるのであるが……これが實に結べる氷の解けやらぬ情けなき處である。一言！一句！それで最早充分に子の心中より湧き出でんとする愛の泉を噴出させる事が出来るものを……進も亦淳に劣らぬ優しい情を備へて居るのだ、然なり！實に家庭の愛を渴望せる優雅な情を把持つて居るのだ。

信淳は縦ひ忙はしい業務があつたにした處で、此夕べ其心には不問同し問題が蟻つて居たのであらう！人格の偉大なる所以は何か過失のあつた時に誠に謙讓に淡泊に己が過を認める處に存する。過ちて改むるに憚る勿れである。彼も一時は其様考へたのであつたが、併し年來自ら養成し來つた誤れる自尊の念は、決して之と兩立するものではない。て彼の心に起つた疑問は



實に普通の考にあるまじき所であつた。

大

「自分は子供の前に頭を下げる様な不見識な事が出来やうか！如何して進のやうな自分の望に背き計畫を無視して居るやうな者の前に、誠に悪かつたと首を下げられやうぞ？勿論鞭で打つたのは悪かつたに違ひない、でも實際誰にした所で彼の様な場合に何だか變な素振りをする子供を見たなら自分と同じ判断をするだらう。それに彼の子供の癖に鞭を取り返して棄てた時の容貌などは如何しても子が親に對する處置ぢやない。又進は最早今日の事に就ては皆から充分に賞められて居る。尙一層自分から賞めたら却つて其爲にならない。自分が折子の教育をやると思つて皆自分を苛酷い」と云ふけれど、少しも子供の過ある事を思はない。勿論進が偏屈やうに唯一人苛責られると思はせるのは善くないであらう。先づ何れにしても最も善い方法は可及的今日の事を忘れて仕舞ふに越した事はなし。」

斯かる思想が不斷此夕へ信淳の心を支配して居つた。が併し豈夫是れが正當な考であると思つる事も出来なかつたが、出て客間の家族の間へ行つた時にも、何と云ふべきやに苦しんで見えた。が斯かる場合には誰しも有勝の事なれど殊に信淳は其顯著い人て一時の激情に依つて己が不見識を蔽ふに至つたのである。と云ふのは恰度信淳が客間へ行つた時、三人は暮色の

中窓近く長椅子を引寄せ月と星との輝ける美はしい天井の下に静かに眠れる花園と芝生とを眺め居つたのであつた。淳が母の膝に其頭を乗せて休んで居る間、進は其傍へに坐つて空の星を數へつゝ絶えず母の歌に耳を傾けて居た。とする間に母の歌が突然中止されたので三人共ハタと静まりかへつて仕舞つた。今しも信淳の入り來つた一刹那であるのだ。此有機は信淳に取つて何となく物足らぬ感じがした。自分が先に家族の請求を容れずに團樂を拒んだ事は早や忘れて、何となく三人が自分を他所くしく取扱ひ、家庭の中に在つても無くて差支なき者の様に思はれ居ると偏屈な考を起した。

父「ハ、ア、前達三人共私をつまらない人間で入つて來たのさへ氣に留める價值はないと思つて居るのだな。」

三人共何か云はんとして其言葉の未だ發せぬ先に父の言分は既に此通りである。て云ふべき事もなかつた夫人は取り止めもなく申すやう、

「淳ちゃんは大層疲勞れて居るのですよ貴郎！」

「へん勿論左様でせう！今になつても未だ褥に臥させないといふのは理由が解らん。だが何か闇暗の中に坐つて居らねばならぬ理由があるのか？」



夫人進さん！ランプを持って来させて頂戴ね。」

「そして長椅子を此様な處に置かないで貰ひたいね、家具の整頓して居ない事は不締に見え又いつも私の眼障りて耐らない！」

進、動くなく、淳ちゃん！僕今その儘其椅子を此方へ持つて来るからね。」

此間信淳は暗い中に立つて居た。そしてランプを持つて来られた時、此午後宿屋の前に迷ふてから後始めて進と顔を合せた。

心ある者ならば先づ幾分か耻かしくも感ぜねばならぬ場合である。殊に今此處へ入つて来てから云ふたのは皆冷淡な同情のない厭味のある事ばかりである。麗明に歌ふ松蟲の音を悪戯兒童の紡げるやうに楽しい家庭の團樂の歌を紡げたのであると感ずべき場合である。が併し彼の心理には自分が来た事に依つて家内の者が樂しさを失ふといふのは甚だ怪しからぬ事であると思ふたので、忽ち憤怒の状を燃やして、いやが上に怒ろしき容貌となつた。進は若しか慈愛の面影が現はれずやと父の顔を仰ぎ視たが、其は全く無益の業であつた、て進の顔は悲しくとも尙厳格な相貌を現はしたのである。何故かなれば今若し父が許すならば互の間の誤解の雲は忽ち消く拂はるゝものであるのに、尙も深く我を親も見給ふにやとの考が凄々と起り來つた

からである。不圖二人の視線が交又するや父は進の此相貌を以て我を輕蔑したものと思ひてか半ば嘲けり半ば憤つて、此場を立退いて仕舞つた。

嗚呼互の親近を來すべき好機會は斯くして遂に逸失され、又と容易に恢復されぬこと悲しき極みなれ！信淳は冷淡な「お休み」の一言を家族に發して去つた時、以後進に對しては一層嚴格に絶對の服従を要求せんと決心したのである。

進も亦渴迎し居つた父親の愛情を此度こそと思ふ場合にさへ見る事が出来なかつたので、今は全く失望して仕舞ひ、充分自制し居つたものも、褥の傍へに脆いて感謝の祈りを捧げた時、涙の其頬を傳へ居つたものが淳によつて認められた。

哀れ進の夢は終夜悲哀の嵐に破られ居つた。此嵐こそ實に港灣も掩ひ能はぬ嵐なれ、此悲哀こそ實に虹さへも架かり能はぬ暗夜なれ、此夕べの此事以來彼の心理には常に父の排斥を受け居るてよ忌はしき記念を印したのである。

## 第十 大切な鞭

次の數日は先づ穩かに事無く過ぎ去つた。淳も益々快方に向つたのである。進は此間不次第



を慰めて居た。兄弟は一時も離れずに朝より晩迄共に遊び居つて、進の居る處へ可及的遠ざかつて居る父とは會見しなかつた。伊藤清は左なくば毎日訪ね來るのであるが、親類を訪ねる爲に數日不在にしたとの事である。進は其後試合の事も聞かず又當然訪ねて來るべき藤原忠が弟の見舞にさへも來ないので少し變に思つて居た。併し忠は彼の日臆病者らしく逃げて仕舞つた事を耻ぢて面出しをせなかつたのである。彼は進が屹度試合に出場するものと信じ居つたから別に試合の事を話しに來る事もせなかつた。

試合は愈々水曜日に行行さるゝ事となつたので、月曜日になつて忠は念の爲進の出場を確めんと森家を訪問したのである。恰度進は何時ものながら能く讀書に耽り居る淳を中島に置いて、獨り小舟を漕ぎ廻して居た時忠の影を認めためたので、直ぐに舟を岸邊に寄せて之を迎へた。進「オ、忠君！淳が怪我してから五六日見えなかつたね。」

忠「其爲に僕を輕蔑し給ふな君！君は僕が見舞にも來なかつたといふのなら、でも僕は醫者に逢ふ度に容態を聽いて居たのだよ、そして何時も漸次よくなるときいて喜んで居たのだ。」

「それは如何も有り難う。」

「いや、そんなに厭味を云ひ給ふな、其様に冷淡にされたくないものだね。君は僕が彼の日述

げたから臆病者と思つて居る事を知つて居る。併し僕は其様な臆病者ぢやないのだ。が彼の日丈けは餘り突然で驚いたものだからね、でも家へ歸つたら、君の援助を誰か上げやうと思つて走つたのだけれど途中畑の中で道を失つて仕舞つたものだから……」

此の辯解には其中に作り事の意味もあるかなれど、忠の書きつた口から述べられる時には全く自然らしく聞こえた。進は元來忠に對しては清に對する程愛敬の念を持つて居らない。併し兎に角交際の上手な忠には、常に喜んで友とし交り居つたのである。美しい衣服を身に纏ふたやうな此忠の外飾的の性質は、例へば僅少の友達であつても其眼識外見より深く入る事の出來ない人々の間には持つて囃されて居た。

「進さん！君は僕を許して呉れたらうね、淳ちゃんは無縁一緒に逃げたのだから許して呉れる筈だ、今日は如何です？」

「今や友の顔色が漸次微笑に變じ行くと見て取つた忠はすかさず尋ねるのであつた。」

「ア、最早非常に能くなつた。呼ばうか？今中島に居るのだから……」

「併し、待ち給へ其前に一寸僕水曜の試合の事を君と相談して置きたいから。僕の家の公園でやる様になつた事は知つて居るね君！僕は大きな天幕と家から非常な御馳走を出す事に極め



た。父はね僕の好きの様にやれといふのだもの……。」

「まあ！親切なる御尊父さんだね。」

「あ、親切だ、それに一つは興し易いのだよ。先づ何でも虚飾な事が好きなんだらう。そして近所の人に賞められたいのだからやり易いのだ。それに又僕はね、父の大意の事が機嫌の悪い時に尋ねるものだから、五月蠅がつて「宜しい」と云ふて仕舞ふんだよ。」

「それで大學生は如何な連中なの？」

「第一の選手だつてさ、其内二人は早稻田ともやつて来たさうて、新聞にも面白さうだつて載せて居たよ。」

「やあ、それぢや君等嚙々愉快だらうね。」

「君等だつて？何故？僕等ぢやないの？勿論君もやつて呉れるのだね。」

「否や、僕はやれないだらうと思ふ。」

「それはいかん、君の名は新聞にも最早廣告したし、又先方にも番組に載せてやつて仕舞つた。」  
「でも構はないさ、清さんが親類に行つたから、僕の代りにやる様に従弟の人を連れて来るだらうからね。」

「その人は全體君の代理が出来るとか知ら？君が居なけりや望がないね、君は今週の新新聞に君の事を日本に少ない選手だとかいてあつたのを讀んだかね。」

進は今斯かる賞讃の言をきいて、嬉しうもあり耻かしくもなつた。てやりたいと思ふ考が潜んで居る處から默然として俯向いたまゝ石を蹴飛ばしてゐる。

「君は御尊父さんを恐わがつて居るのだね、それなら心配はないよ、決して見付かりやせんから、恰度水曜日だね、區會があるので皆行く筈なんだ。僕の父も君の處の御尊父さんと共に出席するのだと云ふて居た。だから試合の仕舞ふ迄歸りやしない大丈夫だよ。若し何だつたら少し早く歸つたら屹度見付かりやせんもの。」

誘惑の口は最と滑かに物語つた。併し進は唯單に見付からないからといふ丈けて、それを承知して仕舞ふといふ程に道念の薄弱な者ではない。

「僕は罰せられるのが怖わいといふのぢやない。若し僕が行つてやるとすれば逃げたり隠れたりして行く積りはない。併し僕は善くない事はやりたくないからね。」

「ピュー」と忠は口笛をもて答へたが其後には「恐ろしい孝行者だな」とさへやいた。今は流石の忠も一寸云はんとする言辭に窮したが、稍々あつて寧ろ高慢げに憤りの口調をもて云ふので



あつた。

「それは君少し勝手ぢやないか、先達君はやると約束したから其積りにして準備したのに、若し君が其約束を履行しないなら、興味を殺すばかりでなく、吾々の側が勝つ見込が立ちやせんぢやないか？」

「否や、僕は確かに約束した積りはなかつた。彼の時何と云ふたかは忘れたが、眞實に確かに約束迄したのぢやない事丈けを覚えて居る。君僕が如何程やりたいか察して呉れ給へ。雖然……」

進の聲は恰も此時幽霊が澁柿を喰ふた様な澁い／＼面をして此方へ来る父を見るより忽ち中止となつた。信淳は今日の新聞を讀んで居る内其中に淳の遭難の事が掲載されるのを見た。それには筆を盡して進の行爲を讃めてあるが、信淳彼自身に對しては反對に個人とせしのみならず、序ながら政治上の意見に就てまでも、よき攻撃の折を得たかの如く痛罵の筆を弄された。そして其一部には又次の様な事が記されてゐる。

「斯かる勇敢な賞むべき行動をなせる青年が、其家庭に在つては實に非常なる苛酷の制裁を受けねばならぬといふ事を聞き、又何時もながら寛大な藤原子が其公園に於て催させるといふ

来る水曜の野球試合にも出ることを禁ぜられたといふ風説を聞く、此の青年は先達博物館での試合に好成绩を得た第一流の選手であるから吾人の聞きし處が皆無根の説であるならば極めて幸である。既に番組の表にも加入されてあるから其禁ぜられ居るといふ事丈けは虚構の説であるかも知れぬ」と。

信淳は讀み出すより早く既に此は彼の醫者が誰にか之を話したに相違ないと妙なからず不快を感じた。併し彼は一行／＼と讀み進むにつれて、其情愈々激して來て、讀み終つた時には其新聞を寸裂して机の下に投げ捨て、仕舞ふ程激怒したのだ。

彼は此激情を今や進に向つて晴さんと考へたのである。何事に依らず不愉快を感じれば直ぐに之を進の禍となさずしては氣が済まぬといふ事は、誠に奇怪千萬の性癖といふべしであり、他人が皆進の性質の中に認め居る温雅な従順な寛大な處を此父に限り見ることの出来ぬとは奇異な現象ではあるまいか？

此時信淳は更に／＼絶対の服従を進に向つて要求せんと覺悟した。併し今度の試合には如何に進と雖も、我意志に背き我許可なくやる様の事はあるまいと信じ居つたので、之れは新聞の記事や廣告の誤であるものと思つて居た。で別に之に就て進に質問する迄の必要もないが、



兎に角一寸如何に服従の決心を持つて居るか試験してみやうとの考が起つて来た。今進と忠との何事かを語り合ひ居る傍へ来た時、

信淳「忠さん今日は……時に進！」

進「はい、何ですか？お父さん！」

「お前私の鞭を持つて来て欲しいね。」

「はい、家に在る中孰れでも宜しいのですか？」

「否や、私が何時も使つて居た鞭を持つて来て貰ひたい、一寸考へたらそれが何處にあるか考へ付くだらう！」

其語調は實に嘲笑的であつた。何等の理由もなき時で、變に感得せらるゝ程であるのに、況んや之れが進の先日の行爲を責めんとする厭味を含んで居るからには、進に取つては實に情けなく感ずべき事である。て父は其一言に更に加へて「直ぐに取つて御出で」といひ様行つて仕舞つた。

進は無言の儘其後姿を見やつて居た。其小さく胸中は、全力を傾注しても尙制し難い激しい情がせめぎつゝあつたのである。辛うじて彼は其憤怒の情に勝つたが、其顔色は蒼褪めて仕舞

つて、忠を顧みて云ふた時には最早沈痛の口調となり居つた。

「忠さん！僕は今迄試合をやるまいと思つて居たが今其決心を變更へた。屹度水曜日によりませぬ。前に約束しなかつたとしても今更めて約束して置かう。僕はね今から父のその「大切な鞭」を拾ひに行かねばならんから其邊迄一緒に行きませう。」

是より進は其態度全く激變して急に憂鬱になつて仕舞つて、無言の儘歩いて居る。快活な忠の慰藉も遂に此日其効を奏する事が出来なかつた。

### 第十一 進の罪過

伊藤清は火曜日に田舎の親戚から歸つた。そして水曜の朝早く、若し進が父の許可を受け居つたなら共に試合に出掛けんとして、森家へ訪ね来た。彼は先づ淳が樹陰に讀書し居つたのを見て、怒ろに其後の経過を尋ねた後、己が訪問の理由を告げた。淳は試合の事を聞いて驚いたのである。進は心配させるのを好まない處から、今迄少しも其ある事をさへ知らせずに、既に此朝早くより不在にして仕舞つたからである。

「清、お尊父さんは進さんに試合に出ても宜しいと仰しやつたかね？」



「否や、屹度許されせんよ。許されたのなら兄さんは行く前に必ず僕に話しなされる筈です。嗚呼如何しやう？可哀想に兄さんは何時も誘惑に遇つて窮するやうになつて仕舞ふのです。でも清さん！兄さんは實際善い人なんですわね」

「左様よ、眞實に善い兄さんなんですよ、君の知つて居る通り僕は誰よりも一番進さんが好きなの、さあ困つたね、今から止めさせやうとするのには最早遅いかも知れないが、僕急いで行つて見るからね、兄さんがやるとすれば僕少しも面白くないよ、何時もお尊父さんが来て進さんを叱るだらうといふ心配があるものね。」

「嗚呼其様な事が起らなければ宜しいがね、清さん早く行つて若し御父さんが見えて何か云ふても、如何かして兄さんの怒らないやうにして下さいね、兄さんは容易に怒る人ぢやないけれど、怒ると酷い事をするやうになるからね。」

「え、僕出来る丈けやるから、まあ僕に任せて置いて呉れ給へ。左様なら清ちゃん？決して心配なさるなね。」

左も快活に淳をなだめたもの、清の心中には實に不安の念慮が滿ち／＼て來た。不幸にも若し森信淳が其試合場に見える事でもあつたなら、進が激し易い性質だとすれば其父は之れに百

倍も怒り易い人であるから、其時には如何なるであらう？清は實に今始めての事ではないが、之れ迄にも、自分の家庭の幸福な事に引き比べて、此親友の常に家庭に在つて苦しみ居る事を幾度咄つたか知れない程である。

恰度此水曜日には好天氣であつた。藤原家の公園の中河畔の繁つた並木の間に見物客は三々五々詰めかけて來た。其傍へが競技場と選定されたのである。人々は皆懇ろに進を歓迎した。彼は其仲間の勝利に就て重望を擔つて居り且又先日弟の保護に依つて其名聲廣く傳はり居つたからである。併し清の進に逢ふた時、清は直ぐに其親友の心中平和なくして何處となく憂鬱をして居るやう認められた。餘り話はせなかつたけれども、試合の始まる迄、進は清の傍を離れなかつた。彼は清の父清隆が二人の爲に褒美としてバットを注文し呉れたと聞いて大に喜んだが、清の來る途中、森家を訪ねて來たと聞いて、不安の雲が忽ち其胸を密閉した。

進は氣遣はしげに問ひ掛けた。

「君は僕の父を見たかね？」

「否や、御尊父さんは會議に行つたつて、でも淳ちゃんに逢ふて來た。」

「左様！あゝ君は僕が何處へ行つたか弟に話して呉れやすまいね。」





「勿論始めから君が薄ちやんには話さなかつた事を知つて居つたら云はなかつたのだけれども、僕は直接若しか兄さんが僕と一緒に出来るか如何か尋ねに来たのだと云ふたので、薄ちやんは最早直ぐに君が此處へ来たものと想像して仕舞つた。」

「嗚呼困つたな……薄が終日悲んで居るだらう！」

「僕は出来るだけ慰めて来たが、兎に角君が正しい事をして貰ひたかつたね、忠君が君を又誘つたのだらう！」

「否や、左様ぢやない。僕は殆んど拒絶し居つたのであつたが、或事から不圖激してやる様に極めて仕舞つたのだ。實際後で悪いとは思つたが、一度堅く約束して置いたものだから今更止める譯にも行かなくなつて来たのだ！」

「ぢや、最早仕様がなにかね。」

「左様さ、最早今になつては止められまいよ、でも眞實に來なけりやよかつたね、來ちや悪いと知つて居りながら、全く自分から不幸を招くやうなものかも知れないな。」

「忠進君、早く来てやつて呉れ給へ、皆待つて居るよ。」

是より試合が開始されて相互の競技は愈々佳境に入つて来た。て正午になつても未だ少しも

決定らないのであつたが、此時藤原子始め伊藤森の三人は會議が豫定よりも早く終へたので、乗馬の散歩を試みつゝ、川の對岸をやつて来た。そして今や試合の盛況になつたのを眺めて、馬を其並木に繋ぎ置き河岸に立つて此方を望み居つた。

藤原嗚呼今日は悴も賑々満足したてせう、最早先達から此試合の外に何の考もなかつたのでした。時に森君先日新聞に君は進さんやらせないかも知れないといふやうな事が一寸書いてありましたが眞實なのですか？」

森「さうです、野球は當分先づやらせない事に致しました。」

伊藤「當分やらせないのですつて？何故ですか？森君！如何して其様に進さんに殘酷になさるのです？若し君が一箇月間書物を繕いちやいけなないと禁ぜられたら如何します？」

森「君も僕が僕の悴に對して教育上最良法と信ずる事を適用するだけは許して呉れなければなりません。」

伊藤「いや何も君を憤らせる譯ぢやないが、併し義務の觀念といふても餘り嚴格な要求ぢやありませんか？」

森「それは左様かも知れませんが、併し僕は其様な心配は致しません。僕は家庭に於てはいつも



主人を以て任じて居ますから、倅等に對しても絶対の服従をするやう幼少い時から教育して居るのです。」

藤原子「それは森君！教育上望ましい方法ですな、如何して其要求が満たされますか？」  
彼は丁寧な反語をもて森を冷やかすのであつた。

森「何でも少しも悪い事をした時にはソロモンの箴言に従つて酷しく責めるのです。倅も其習慣に依り近頃は十分従順になつて參りました。」

然し「鞭を加へざる者は其子を憎むなり」とは確かに半面の眞理である。それと信淳は鞭を要せぬ場合に數々之を適用して居るのではあるまいか？」

此信淳の一言を何か自分が忠に對して甘過ぎるといふ諷刺の如く感じた藤原子は、進の後姿を指しながら信淳に云ふやう、

藤原「僕は君の令息も今日だけは君の命令に従順だとは思はれない。若し僕の眼が誤てなければ彼處に進さんが立つて居るやうだ。」

信淳は其指さす方を見やつて、  
森「左様云へば何が進に似て居りますね。」

伊藤「能く似て居る。他に彼の様な立派な體格の者はありませんから。」

森「併し伊藤君！彼れを進でないと思はねばなりません、何故かなれば僕は今日やる事を嚴禁して置いたのだから背く筈はありませんもの。」

此時恰度進に似たりてふ其姿はバットを持つてベースに立つた。そして一盤球を天空に飛ばして、見る間に各ベースを一週して仕舞つたので、今や喝采實に湧くが如くに起つた。そして又其喝采の聲裡に三人の區會議員が明かに「甘くやつた森君！森君萬歳！」と呼ぶ聲が聞かされた。

二人は意味あり氣に信淳の面を覗いた。併し其激怒の容顔を見て困つた事をしたと思ふたのである。其眼は輝き、其額には青筋が現はれた。て伊藤清隆は靜かに其手を信淳の肩に横たへて云ふた。

伊藤「君！進さんの事を怒つちやいけませんよ。何も命令に背く考はないに違ひないのだが、誘惑が餘りに強かつたのでせう、それ丈です、君の禁じたのが寧ろ苛酷いのですよ、今度丈は御許しなさい。先達弟さんを援けた働に對して許して上げて下さいね、僕からも又能く申上げて置かせうから……。」



森「否、僕が自分で處置します。彼は公然の禁制を破つたのですから、僕今から直ぐ往つて、家へ歸らせませう。懲戒の爲に公衆の前で一つ辱かしてやりませう！」

信淳は静かな嚴格な口調もて答へた。

伊藤「何卒其様な事は御止しなさい、あの澤山な人が居るのぢやありませんか？皆何事か起つたと思ふて見るてせう、勿論進さんは罰せらるべき罪はありますが「餘り高尚な正義は却つて大なる害を醸す」事を忘れてはいけませんよ」

森「なあに其位の事は彼も覺悟してやつたのでせうもの。」

藤原「僕にも一言云はせて下さい、僕の性も決して絶対に服従しては居りません、併し如何なる場合でも公衆の前で辱かしめるといふやうな事は断じて爲へざるものではないと思つて居ります。」

森「如何も御氣の毒ですが、御兩君の御説に従ふ譯には参りません、僕は我性等を教育する上に就ては、何人と雖も干渉する事を許しません。御免下さい僕は直ぐに乗つて彼方へ参りますから……」

信淳は丁寧二人へ會釋して走り去つた。併し途中色々な障害に出逢ふたので益々激して來

た。第一に牛の群が緩々と狭い道を歩き居るので、馬を走らせる事が出来なかつた事と、次に其橋の處の公園の入口は何日も通行人がないので番人は人並に競技見物にと出掛け往き、留守居の婆さんが聳てあつて、其人を呼んで開けて貰ふまでには頗る永い時を費やした。て信淳の心はいやが上に憤の焰を燃やしたのである。

### 第十二 會場の光景

信淳が會場へ乗り込んで來るや、衆目一時に彼が一身に聚つた。觀覽人は皆先日の新聞を讀み居るものと見え、彼が如何なる目的をもて來たのであるかを、直ぐに其外貌で察して仕舞つたのであらう。

彼は下馬して手綱を他人に頼み、公衆が皆自分の舉動に注目し居る事さへ氣付かずに、未だ父の來た事を知らずに立ち居つた進の方へグラウンドの中央を通過して往つた。

統監は驚いて聲を限りに叫んだ。

「何卒傍へ避けて下さい、何卒避けて下さい、邪魔になりますよ。」

併し彼は全く無頓着であつた。今や進は更に代理としてベースに立ち一擊球を飛ばしたので



會場は拍手を以て鳴り渡つた。が此時進は呆然獨り身動きもせず突立つて居る。

一寸振り向いた時に彼の機敏な眼は、怒をもて殆んど黒ずんだ父の顔を認めて、今は早や急に石像に化して仕舞つたのである。忠と數人の友とは進の此様を見て「早く走れ」と絶叫した、て進も聲に應じて走り出てたが忽ち父の一喝に遇ふた。

信淳「止まれ！」

進は再び立止つた。此時會場一般に信淳に對する批難の聲が喧すし。

信淳「今直ぐに止めて私と一緒に家へ歸れ！」

言ふ可らざる耻辱であるといふ思想が進の胸を刺した。同時に其耻かしさは憤怒の焰となつて炎々と燃え初めた。で此瞬間の激情に驅られた進は其至情から響き出てた聲をもて云ふやう。

「私は今は止めません。直ぐに家へ歸るのは不好です。」

「後悔するな、能く考へろ！全く不好か？」

「不好です。」

「それなら宜しい、如何しても歸らせてやる。」

云ひざま今は全く自己制する事の出来なくなつた信淳は飛び行いて進の運動褌衣の襟を捉へ

た。て進は憤恚の一叫びと共に父の手を押し退けて飛び離れたのである。此時恰度清は先に淳と約束せる事や己が友に對する義務を忘れずに、公衆皆驚き眺め居る間を馳せ來つて、今や父に向ひ何をか云はんとし何をか爲さんとした進を抱き止め、其腕をば靜かに友愛の腕に抱きながら、忙はしくも健氣に斯く囁やいた。

清「進さん！皆が見て居るよ、何卒自分を忘れ給ふな。先づ僕と天幕の所へ行つて呉れ給へ」

何時も友愛に満てる清の言葉は殊に此場合進に取つて如何に大なる慰めなりしかよ。進は直ちに其本性に立歸つた。彼の胸に閃めきし怒の焰は忽ちに消え失せて仕舞つた。嗚呼此一瞬間の前迄は其胸中實に炎々たる焰が燃え上つて來て果ては盲目となつた激情は、如何なる大罪を犯さしむるやうなつたか未だ知る可からざりし程であつたが、幸にも彼は今や自製の意志を尊ぶ神の恵に依つて其罪を免れたのである。其反動は稍やく其心に湧き出て、深い、悲哀の情が今や其身を捕へた如くに感じた。斯かる感情の激變に耐へ難くてや彼は幼兒の様に從順に首低れたまゝ清に伴はれて天幕へ入つた。

信淳は斯く迄も激して其地位名望さへも顧みるの暇なく、誠に下劣な手段を採つたのだ。そして今尙其憤怒の情は靜まない。先程我子は絶對の服従をなし居ると人に誇つた其舌の根の乾



さもやらぬ矢先に斯く明かに進の背き居つた事と、公衆が彼の動作を目して何となく輕蔑の態度を現はした事とは、尙更に彼の憤を増發させる原因となつた。先に進が「不好です」といふた一言は、激した折に思はず口走つたのであつて、云ふより早く後悔したのであるけれど、父の耳には今も尙鳴り響いて居る。て彼はツカ／＼と會場の真中を再び通つて清等の入つた天幕へ追ひ行き、清の居る前をも憚らず、今は悔いて首低れて居る進に對して、無慈悲に殘忍な苛責を瀧ぎ掛けた。若し進が何とか口返答でもしたらんには彼は屹度手を下して打つたであらう。されど幸に無言で居たため、彼の怒も自づと沈まつて來た。そして直ぐに家へ歸れといふ命令と共に、

「此様にもう一度背いたら必ず鞭たすには置かないから覺悟をして居れ。進！屹度打つてやるから背くなら背いて見ろ。」

の一語を残して天幕を去つた。天幕を出るや否や何となく嗚呼馬鹿な騒ぎをしたものかなと氣が付かぬでもなかつたが、併し元來自分の過失を認める事の出來ない性癖のある人として、其儘再び乗馬して黙然たれども變な輕蔑の眼を向け居る公衆の前を静々と家路へ向つた。

進は尙も天幕の中に清の傍へ坐つて居る。唯胸に行き交ふものは激した粉れに爲すまじし

事をして仕舞つたといふ後悔の念で、父の斯く迄激した處置も自分に對して寧ろ適當であると思ふやうになつて來た。彼れを思ひ之を考へ、其胸は忽ち一杯になつて、涙は潸然と其頬を傳ふのであつた。清の友愛籠つた慰藉すらも此場合直様其効力がなす。

清進さん！僕と一緒に來て呉れ給へ、僕の父が彼方へ馬で歸つて往くから、兎に角僕の家へ往つて相談しやうね、試合は僕が歸つても從弟が代理をして呉れるから差支あるまいよ、君の代理も誰かやるから構はない。」

二人は可及的人々を避けて此會場を去つた。そして清隆に逢ふた時、彼は馬より下りて丁寧に進を勞はり、二人を伴つて家に歸つた。先づ暫らく信淳と進とが互に此午後靜思するのが適當であらうと思ふ處より、進を態々己が家へ伴れ住いたのである。

此悲しき出來事の後會場は何となく間が抜けて假令忠が獨り熱心に斡旋の勞を取つても、他の人々は彼の選手を失つた事に依り落膽して試合は遂に興味を削がれて仕舞つた。て終つて後天幕の中で兼て用意された非常な御馳走をなし、藤原子自らも此處へ出席されて種々の待遇があつたけれど、人々皆意氣阻喪して豫期せしよりも早く仕舞つて歸つたのであつた。



第十三 進の懺悔

「進さん！君が御父さんの命令に背いて試合に出たといふ事は悪かつたですな。君は其様な事をなさる人ぢやなかつたから、私は變に思つて居たのです。」

と今進を其家に送る途中で、伊藤清隆は語り出た。  
清「今進さんを責めちやいけませんよ。悪るかした事を知つて懺悔して居る處なんですもの。」  
清隆「否や何も責める譯ぢやない。進さんは私が同情を持つて居る事を能く知つて居る筈ですな。」

進「能く知つて居ります、伊藤さん僕は實に悪い事を致しました。何卒御見捨てなく御世話を願ひます。僕はもう決して此様な事は致しません。今度もやる様に決心した時は全く一時激した粉れに極めたのでした。」

「私は決して見捨てません。雖然親しい友として君に注告せんけりやならない事は、親に従順な事が子としての第一の義務であるといふだけですよ。」

「僕は今迄何時でも従順にせうと勉めて居たのですが……」

進は云ひ終る代りに若しや我言はんとする事を察して呉れるか、思ひ清隆の顔を仰ぎ見た。

「あゝ能く知つて居ます。君は父さんが事毎に苛酷いと云ふのでせう、儲かに子供身になつて考へて呉れないから君の務は一層六ヶ敷なるのです。併し進さん！それは義務を果敢なくとも宜しいといふ理由にはなりませんからね。」

更に彼は進の肩に其手を掛けて、

「私は實際君を我子の次ぎに可愛く思つて居るから今日の事の爲に私が見捨て、仕舞ふだらうといふやうな心配をしてはいけません。併し進さん！君は君の義務が重荷であるからとそれを通れやうとしてはいけませんよ。務が困難なれば困難なる程之を遂行する力を與へられ、

又其を爲した時に一層の幸福を感じ得るといふ事を記憶して在てなす。」

進は全く無言であつた。併し其謙遜な容貌と涙ぐんだ眼とは明かに此注告の決して無益でなかつた事が解る。されど森家に近づくに従ひ進の心は益々沈み行、乃て伊藤父子は實に同情の涙を灑がざるを得なかつたのである。

清「進さん！君其様に考へ込んぢやいけなね、眞實に可愛さうだな。僕君の爲に何かして上げたい、今少し元氣のつく迄其邊で休んで行きませんか？」







るものなり爾の傭人の一人の如く我を爲し給へと。」

清隆「それです、君は今其通りになさらねばならんてせう！」

彼は赤鉛筆を取り出し更に他の處にも線を引いて之を進に渡された。

「進さん！此書物は昔から私の親友となつて居ました。併し今之を君に差上げます、何卒之れが私に親友であつた様に君にも親しくなつて貰ひたい、そして今爰に赤線を引いた處は今も後も私が君に對する最上の忠告なんです。左様なら進さん！神様は君を恵み給ふてせう！」

清「左様なら！進さん！僕明日朝早く、又来るからね」進は伊藤父子に禮を述べて其消え行く後姿を見送り、さて獨り其聖書を排いて清隆の印した一節を讀んだ。

「イエス彼等(父母)と共に下りナザレに歸りて彼等に順ひ居れり。」

彼は幼少の時から父母より宗教的の訓育を受け居るので、直に能く之を理解する事が出来た。彼が時には一時激した紛れに悪しき事を行ひても、直に愛らしい後悔の念を起して自ら省みる事は、確かに此訓育の賜である、て何となく家へ入り兼ねて池の邊りを彼方此方と散歩し居る間、折々今の一節を繰返し居つたが、一度は一度と更に彼の心に光明を興へた。彼は此時真に天上の榮華を棄て、三十年の永の年月羅馬の屬國なる猶太の中、而も思ひ練はる、ガリラ

ヤの僻村に、大工ヨセフの伴として平民的生涯を送られた基督の貧窮や陰徳や謙讓の諸教訓を今更の如くに感じた。斯く考へ来れば心氣稍やく爽かになり、自分か剛情で不従順であつたの

であるから、一も二もなく自分が悪るかつたといふ考えを以て、謙遜だつて父の前に出て、如何なる刑罰でも甘んじて受ける他はないと決心したのである、斯く心定めて家に入り運動靴衣を着替へて客間へ行つた。恰度薄は勞れ果て、長椅子に横たはり母は其傍へに讀書して居た。

進「薄ちやん！大層悪るさうだね。又悲しうな顔をして居るね、して又お母さんも……如何したのですか？」

母「進さん！御前聞くまでもないてせう、如何して御前は御父さんの命令をきかなかつたのですか？御父さんが何の位怒つて在らつしやるか知れやしないよ。」

進「それはお父さんの怒りなされるのは別に珍らしい事ぢやありません。お父さんは僕の爲る事には何でも怒るのですもの、何でも僕は家の者の不幸福の源なんだから家に居らない方が乾度皆んなの爲になるのだが……」

進「思はずも太息を吐いた。」

母「ア、兄さん！何を云ひなさるの？お母さん！兄さん眞實にそう思つて居るのぢやないのて



すよ。」

母は何とも答へなかつた。が併し其髪に下つた髪の毛を後ろへ撫て返した時其手は少しく振へるのであつた。

進「お父さんがすつかり話しましたか？」

母「え話してよ、そして怒つて御前を苛責めるといふて居るのですもの。進さん御前何故渾ちやんか私に相談して行かなかつたのですか？」

「相談すれば御母さんは屹度止めてせう。でも私約束して置いたから是非行かねばならなかつたのですもの。」

「御前は又如何して其様な約束をしたのですか？それに悪い事なら其約束も破つた方がよかつたぢやないの？」

「私先達一寸激した紛れに約束したのです、でも悪るかつたから今晚許して下さるやうに父さんに願ひます。」

渥「お父さんは、でも非常に怒つて居るから……何と云ふか知れないよ、兄さん！」

「左様だね、何と云ふか……」

渥「先刻學校を退學させて仕舞ふといふて居たよ。」

「何だつて？直ぐに退學させて仕舞ふのだつて？それは餘り酷い。友達なんか皆放校でもされなかつたかと思ふだらう。」

母「私多分お父さんを説伏せてモウ一學期だけ行くやうに出来やうと思ふが、其後は如何なるか解らないね。お父さんは御前が學校へ行つても遊んでばかり居て、何も善い事を覚えて来ない」と云ふて在らつしやるのだから。」

進「お母さんもう思つて居るのですか？」

「御前は私が決して其様な事を思つて居ない事を知つて居りそうなものだね、私は眞實に御前を愛して信じて居るのですよ。」

御茶時になつても信渥は客間へ出て來なかつた。そして齊齋迄茶を持って來るやうに命じた。進は父が何か不興の事のある時には誰とも而會するのを避ける癖があるのを知り居るので、尙も父が其怒の心を變へないと推察する事が出来た、又進は打委れた母と弟とを勵まさんと勉め自分も亦我と我身を勵まして居た。暫らくして母の申出に依り進と渥とは母のピアノに合せて讚美を始めたのである。



花よりも愛てにし我子よ……  
此歌が父の耳朶を打つた時、其處には果して如何なる感想を起させたであらう？ 子を思ふ親の心、然り罪を犯せる子の行術を憫ぶ親の心は實に天つ大神の聖旨なる。情ある者は優しき心を喚起すらん。涙ある者は子の罪を許さんとの寛容の度を増すならん。人は憤怒の雲吹き去られて慈愛の光其胸に輝やくべき此時に、我信淳の砂漠の如き心には全く別種の反響を見たのだ。我子進の無神経なる斯く迄も罪を犯し乍ら尙も恬として耻づる處なく、呑氣にも歌ひ居るとは何事ぞと其心に鳴り響いた。そして更に自分は主人で居りながら何となく家庭の者より遠ざけらるゝ心地して、之れも原因は進にあると思ひ定めたのであつた。

嗚呼彼の生涯は自ら播いた種を收穫時になつて始めて驚き悲しむやうなものだ。元來彼は嚴正な道徳と名譽とを守らんとせる者である。雖然其思想の根柢が宗教的觀念に基いたものではない。て神に依つて得べき平和は理論に遙か勝るといふ事も唯口にのみ知つて居たのだ。唯道徳で冷たい月の光に歩まんとする者は必ずしも墮落せないと限らない。信淳は幸なる家族に圍まれ居りながら、自ら好んで常に悲しい不安の生涯を選みつゝあるのだ。て此時も態々自ら骨を折つて自分は撥斥されるのであると我心を説伏せつゝ、會場に於ける進の舉動などを回想

し、時と共に益々進に對する憤怒の情を醸さんと勉め居るものゝ如くてあつた。

家内の常習に依ると信淳が書齋に閉籠つて居る時には、家族の者の「御休みなさい」といふ挨拶さへも受けぬ例になつて居る。然るに此夕べ其書齋の戸を叩く者があるのて、信淳は少しく變に感じた。そして入り來つた者が進であつたので、彼は更に噴驚した。

進が今父の書齋に入つたのは實に眞面目な考があつたのである。何時もの高慢心は全く打碎かれて、己が禍失を懺悔し父に謝し、其許すといふ一言か、せめては親切な一言棄ても掛けて呉れたなら、直に其足下に飛び行きて、未だ會て味つた事のない父親の愛情に浴せんとする愛らしい望を持つて入り來つたのである。嗚呼此愛らしい希望！此は實に進が其家庭に於ける終局の願望なのである。進は今此願望に對して果して何の報酬を得るであらうか？

進の入るや否や父は顔を上げて其姿を見られた。頭より足先まで凝視めて、而も云はれた事は實に之れてある。

「此處へ何しに入つて來たか？ 今日彼の動作をして置きながら、豈夫阿容く來る譯には行くまいと思つて居たが……」  
此亂暴な質問に依つて進の神經は少しく振ふた。そして支へながら答へるやう、



「私ば……一寸……」

自分も斯く思ふが、  
信淳は進の言ふを止めて仕舞つた。怒る時には何時も此人の癖であるが人の説を聞き居る事が出来な。自分は全く其相手の思想を知り居るものと獨断して、一も二もなく排斥して云はせないのだ。であるから斯かる時に終迄聴いて貰はんとするには大なる決心を以て掛らなければ六ヶ敷い。他人との交際に於ても亦其様である。もう少し此性癖がなかつたならば、幸福な生涯を送り得べきものを、之あるが爲にツイ優しき人をも怒らせ、忍耐深い人をも激させて、自ら其天地を狭めて不幸の道に入るのだ。

信淳「何の爲に來たのでも宜しい、直ぐに歸れ！そしてお前自ら她と悪事を働らいたのだから今になつて如何様に謝まつても、私が與へんとする罰は免れる事が出来ないと覺悟して居れ！」  
嗚呼是は何たる殘酷な宣言であらう？進の胸には一寸怒の電光が閃めいた。が直ぐに先の清隆より受けし金言「彼等に順ひ居れり」を回想して之を打沈めたのである。  
○「父さん！私一寸御願があつて上がつたのですが……」  
「勿論罰を免して呉れだらう。それは御互の爲にならん、早く歸れ！」

ねえ、お前ね  
嗚呼、怒れ  
せう、お前は  
このあつたらう

斯かる方法に依つて信淳に詫び信淳の心を和らげんとした處で、それは全然無効である。進は心崩折れて父の前を退いた。雖然最後に入口の戸に手をかけた時、若しや憐みの容貌にても淨ばすやと父の顔を顧みだが、別に少しも變りなく飽迄嚴格なので、もう一度父に向つて叫んだ。

「あ、お父さん！唯少し私に言はせて下さるな。」

「進！御前は何時迄もく不従順で私に意地を燒かせやうとするのか！歸れと言うたら何をして居る。？是れて三度ぢやないか？私の手で追ひ出さなければ歸れないと見えるな。」

「否へ、其様な必要はありませぬ！」  
進は今全く絶望の太息を漏しつゝ振り向きもせず戸を閉ぢ重い／＼頭を下げて客間へ歸つて來た。此時淳は早や二階の寢室へ行つて母のみ獨り進を待ち設けて居たのである。進は敢て此の思はしい會見の事を其母には話さなかつた。雖然今歸つて來て重々しげに其頭を卓の上

に横たへた時、母は略ぼ斯くと察することができた。  
「お休みなさい進さん！決して落膽しちやいけませんよ。考に餘るなら天に在らつしやる神様にお祈なさい。神様は公平にお前を愛して下さるからね。」



母は其寢室に入る前其子に此一言と暖かい愛の接吻とを與へた。

「はい、其様ませう、僕でも寝る前もう一度能く考へます。」

母の去つてから後進は何思ひけん、紙片を取り出して記し始めた。

「お父さん！私唯今御許もなく、御室へ入つて済みませんでした、唯私は今日私が犯した罪を許して頂きたい爲に御願に上つたのです。お父さん！私眞實に悪るい事を致しました。心から後悔して居ります。何卒御許しなすつて下さい。何と申して御詫をしようか私は知らないのです。二度と此様な事はよう致しませんから何卒不幸な子を愛して下さいませんか？……進より。」

進は洋燈を消して寢室へ行く途中父の書齋の入口の戸板に其紙片を挿んだ。信淳は室内に在つて斯くと知つたのである。て進の足音が消えてから靜かに起つてそれを取り上げ、急ぎ讀み下した。

忽然慈悲の涙が其眼に浮んだ。子の真心籠めた無邪氣な簡單な手紙は流石は父の美はしい天性の琴線に觸れたのであらうか？痛く感動したる父の最初の衝動は、直ぐ進の跡を追ふて二階に行き、明かに其罪を許すと公言せようといふことであつたが……嗚呼人は往々最初に

本能的衝動

來る本能的衝動に直に従ふ事をせずして、徒らに己れの智に尋ね爲に失敗する事が多い！信淳も不圖考へて見れば感情に負けて父の威嚴を損してはいけぬといふ氣も付いて來た。て一時は憐愍の情に依つて追ひ出された先の感情と習慣とは再び徐々と彼の胸臆に舞ひ戻り、無決斷にも進の手紙を手にする儘躊躇して居ると、疑惑と高慢心とが高尚な優雅な精神と交代して、所謂惡鬼は更に七ツの惡鬼を伴ひて其家に歸り、可惜正しき道を取るべき好機會を失つて仕舞つた。

母の御許へ

「何だ、お母さんが教へたのだらう！左様だ！能く解つた。彼女が學校を止めさせるといふ事を話したので、進も詫びる氣になつたのだ。如何して母の附智恵でもなければ彼の高慢な奴が自分で此様な事をするものか、何だつまらない！」  
彼は其紙片を千々に引裂いて紙屑籠に捨て、仕舞つた。是れて折角の美はしい親子の情も再び濃密な叢雲の裡に蔽ひ去られたといふべきである。  
進は悄然として二階の寢室へ行つた。淳は未だ眠らずに待ち居つたので、進の眼が泣いた爲に赤く脹れ塞がつて居る事を認めた。何でも容易の事ではないと思ふてか彼は父と兄との間に何事がありしかを尋ねて止まぬ。



不可也 父の徳に  
不承 弟の徳に

もう聞かなくても宜しいぢやないか淳ちゃん。僕は悪るかつたと言ひやうとしても少しも話せないのである。……淳ちゃん、僕位不幸な者はないね。  
淳は遂に泣き出して仕舞つた。て進は静かに其頬を傳ふて流るゝ涙を拭ひやりつゝ、弟の泣き入に眠る迄其褥の傍を離れなかつた。それから弟の額に接吻して自ら衣服を着替へた後、神に祈らんとて其褥の傍へに脆いた。祈りし間に平和は其心に滿ち來り、「例令肉體の父は我を惡み我を許さずとも、少くとも天の父は我を愛し我を許し給ふを信じて、穩やかな樂しき夢路に迎り入つたのである。」

### 第十四 進と忠との退學

進は其父が我手紙を見て如何に思ひしかを私かに考へて居た。そして少くとも「許す」といふ簡單な言葉位は、斯くまで自分が自己意志を制した報酬としても與へらるゝてあらうと豫期してゐた。翌朝食事の時二階から降りてきた一恰度父は新聞を讀み居つた。そして此方を振向さませぬので進も亦別に挨拶をして妨げるやうな事もせなかつた。總て食事となつて一家皆一の食卓を圍んで居たものゝ何となく未だ朝露の晴れやらぬ様子であつた。

食事の済むや否や父は冷淡にも其子等の爲すべき事を命じたまゝ奮發へ行つて仕舞つた。斯くて家庭は依然變調のまゝ日の過ぎ行くに任せ居たるが、月日の進み流水の聲に洩れず早や休日も程々なくなつた。数日の後進が母より聽いた處に依れば、父も直ちに退學させる事だけは思止つたが、併し聖誕祭まで尙一學期遣つて後は必らず退學させる覺悟で居るといふ事である。て進は數週間の後には、我一生の進路に大なる蹉跌を來さねばならぬ事と思ひ心快々として樂しまず、唯一學期を終る爲に歸校する事となつた。

學校に於ける進は全く他の學友と同様來るべき運命すら打忘れたるものゝ如く爽快な日を送つて居た。教師等も亦進に對し彼は別に天才といふべき程の者にもあらねど、性格の廉直にして男らしい處を稱賛するのであつた。更に最も頼母しい事には彼は其同級生中の名望家である。善良な感化を他に及ぼし居つた事である。恐らくは斯かる鞏固な意志と高潔な性格との源は、小さな時代より其家庭にあつて萬事意に任せぬ處から、不絶 悲の時に教と慰めとを神に求める必要に通され、又能く其を行つた修養の結果であらう。

斯かる幸福な學校生活の間にも彼は全然家を忘れたのではない。其故郷には母と弟とが居るのだ。そして二人こそは實に彼が此世に於ける最愛の者である。父より手紙の來る事は極めて



稀であつて、又來る時には必ず冷淡な諷刺的の短かい手紙のみであるが、母と淳とよりは毎週必ず一通の音信があつて、彼も亦學校で一週中に見た事聞いた事爲した事と必ず一回知らせる事にして居つた。

松子夫人は我良人が屢々進をば價値なき不孝者として話すのを聴いたが、近來決して之が辯解の勞を取らぬ。何故がなれば若し辯駁すればする程却つて頑迷な説に執着する良人の性癖を能く知り居るからである。雖然もう少し我良人が親切で考へ深くあつて、疑念と輕蔑との代りに愛と同情と信用とを以て其子に接したなら、必ずや太陽が無形の絲もて遊星を操つる様に、進の胸に秘める愛の光を發揮させ得る筈であるといふ自説だけは今尙其心に満ちて居るのだ。

進は此學期間も數々伊藤清と文通した。そして互に其學校の長所を述べて自分の學窓を稱揚する事を無上の樂として居つた。が聖誕祭の近づける某日清より來た一通の手紙は非常に進の胸を打つたのである。其手紙は極めて長文であるが要は藤原忠が放校の處分を受けたといふ事であつて、其の文面は實に次の如きものであつた。

「親愛なる進君—僕は我等とさ學校に對たる君の批難に對して敢て何とも答へまい。勿論反駁

する積なら機關砲の亂發で容易く君を沈黙させる事が出来る。」

僕は此手紙を唯雜談の爲に書くのではない。君に知らせる要件があるのだ。君は夏休み中某日僕と共に忠君の事に就て話したのを覚えて居られるだらう。彼の淳さんが狂犬に噛まれた日であつた。そして君は健氣にも……オ、ト、君の處へ君を賞めて書くのぢやなかつた……

彼の日に僕が言うた様に忠君の惡習慣は益々募つて來て、今日は遂に放校といふ恥かしい處分を受けたのだ。此事は僕に取つて實に悲しい。僕は實際尊敬の價值ある他の學友よりも忠君と親しくして居た。そして何時でも僕の處へ來て共に快談し共に散步などしたのである。僕は彼が彌々墮落するのを知つては、怕ぢず臆せず不遠慮に彼を責め彼に忠告を試みて、何故君は不評判の墮落書生と交つて惡い道に尊とい身を抛つのであるかと言つた。間もなく忠君も亦極めて不評判になつて來た。僕の學友等も僕が時々忠君と歩くのを見て、僕まで餘り善く云はれないやうになつた。て僕は成夕べも人の居ない處で靜かに話した。處が彼も大に感ずる處あつたらしく見えたから、必ずや果斷をもて損友と絶交し、新生涯に向うてあらうと豫期して居た。が暫時経過すると又元の通りて更に斷行の勇氣がなかつた。僕は今彼が爲せる惡業の半分も君に書く事は出來ない。彼は一學期中に六度も處罰された。



彼は受持教員の他總ての人に亡狀を極めて居た。其受持教員丈は尊敬し居つたもの、少しも感恩の情はなかつた。彼は校則を破るのが一つの樂であるかの如くにして居たので。其上彼は借金か山の様に出來た。それは父の名を以て商人から取つたといふ事である。教師等も僕の見受けた處では出來る丈け彼を矯正せんと企て居たのだ。受持教員は彼の過失多きにも不拘、寧ろ彼を愛して有らゆる方法に依り彼を正道に立歸らせんと勉めて居た。が併しそれも全く無効であつた。或夕べ明かに酩酊し居つたのを認められて、教師會議は遂に放校の外仕様がなにと一決したといふ事である。僕は實に之に就て自ら迷惑し又自ら責めて居る。雖然進君！彼がもう充分に注告を受けた事は神様も知つて居られると思ふ。僕は數々今後悔せぬいなら必ず處分さるゝからと云ふたのであつたが、彼は何時も冷笑に附し去つて仕舞つたのだ。でも是れより後彼が如何するかといふ事が一つの問題である。彼は軍人になりたいと云ふが放校されてからは六ヶ敷からう、藤原子爵の責任も重いが併し子爵が若し其儘家に置いたなら益々速く大の様にして始舞ふだらうと思はれる。幼少の時代に汚された精神の傷は其身體と共に大らくなつて來て、今は早や其父も始末に困るやうになつたのだ。其上君も知つて居る通り見るさへ嫌氣のさす彼の家扶が居る。彼は何につけても忠君の墮落を獎勵し居

るのだ。餘り長くなるから止めるが、もう君二週間で冬休みになるのだ。又君と逢ふ事が出来る。其間に楽しい聖誕祭も来る。あゝ其時には素人芝居をやる約束だつたね。想像するだに愉快で耐らない。

進君

清一

進は此報知に接して非常に悲しんだ。從來進と忠は餘り昵近となる機會もなかつたが、忠は常に其光明の方面のみを見せ居つたから、斯かる事を聽いては實に驚嘆せざるを得なかつた。斯く迄も忠が圓滿ならぬ家庭教育に依つて宗教或は道徳上有力な制裁をも知らぬ低賈うた青年であつた事を今始めて知つたりである。夏木み中草が犬に蹴ました其日清が塗り皮を潰めよかつた理由を解する事が出來た。同時に彼は自己一身上に就て深く考ふべき必要に逼られて來た。學期試験の準備に多忙なのと書物や衣類などを行李に入れる事などの爲、頗る忙はしく感じ居つたので、幸にも此度の歸郷は即ち我愛する學窓の見をさめてあるといふやうな悲しい考を起す隙はなかつたが、併し此日は獨り沈思して萬感交々三寸の胸臆に行きかふ事を感じた。嗚呼是は單に學校と別れるのみならず、聽て我少壯時代の快樂と永久に告別する所以であらうと感ぜられた。



彼は今や多数の同輩に惜まれつゝ此校門を去る事となつた。教師等は進の事情を聞いて如何にもして其父の心を翻へさせ度ものと種々心を勞せられたが、他人の忠告に従はぬ事を以て自慢として居る者に對しては全く無益の業であつた。て要は可及的進の悲哀と苦痛とを慰むるにありとて、學友は皆同情を寄せて色々な饒別を贈られた。同僚の者は最終の會食に際し愛情の言葉を彫刻した銀の皿一箇を贈つた。是等の親切に進は深く感動して大に慰められたが、來らんとする聖誕祭を思ふとき友に取つては限りなき樂の日であるのに、進自身には何となく甲斐なく悔と悲しと豫想とのかゝる時であるかの如く思はれる。

進は家に歸る時其最愛の母と淳とに逢ふ事を思ひ浮へ無上の快樂を感じた。併し其樂も一と度父の嚴格な冷淡な顔が眼に映る時何となく妨げられて仕舞ふ。雖然家へ歸つた最初の一晚は實に幸であつた。て色々な事を弟に話しながら、學校で受けた同情の印などを見せて居た時自分ながら何となく光明を認められた様な心地がした。ても未だ向後の方針は定められてない。又父母より之に關する遠廻しの話だにも聞かないのである。彼の目的は海軍將校になる事であつた。併し今退學させるからには多分家庭教師の下に教育されて、何か父の豫期する一方へ向ふ事が出来るであらうと想像して居た。雖然それが果して父の考へにあるか、若しあるとして

も何處から其家庭教師の招聘さるゝか其邊の事は母や淳さへも知る事が出来なかつた。

進は家に歸つてから一見直ちに父の容貌動作より未だ彼の古き疵が癒され居らぬ事を認めた。彼は成し得る限り父を喜ばせ其命に従はんと勉めたけれど、尙不信用と不愉快との冷たい影は依然として其跡を収めない。夫人と淳とは其少さい銀の皿を見て非常に喜んだが、偶然父が其を取り上げて其彫刻を讀んだ時、冷笑の面影稍や現はれて、進の室へ置けと命ぜられた。

進は折節清と遊びに出掛ける事もあつたが、何時も確實に働らいて居た。て淳は其間唯一の友であつたのである。勿論此兄弟程互に愛し互に樂しんで居るものは少ないであらう。雖然學校生活に慣れた社交的の快活な青年に取つては、自分よりも小さい弟を唯一人の友となし居る間、何となく物足らぬ感じのあるのも理りである。故に決して藤原の子息と交際してはならぬといふ父の禁制は進に取つて辛い事であつた。忠は何等進に對して迷惑を掛けた事もなく、又其家に在る間最早放校された當時の様な不規則な事もないので、進は父がもう少し彼を信用する、やう望んで居た。が併し此禁制は全く理由のある事なれば、進も之に服従せんと決心して居た。て或時日の間進は都合よくも忠に逢ふ事なく過ごし得た。忠は斯くと露知らず、唯自ら放校後進に逢ふも何となく氣の進まぬ處より、或時清に何故進が訪ね來て呉れぬのであら



うかを訴へたのであつた。

伊藤清隆は其子清が忠と交際するを禁ずるやうな事はせなかつた。彼は全く清を信じ其品性に害を受くる事なく必ず忠に良き感化を及ぼし得るであらうと思つて居たのである。且又藤原子爵は其子の不名譽に激怒し、が今は清隆に頼んで可及的清と交際させて貰ひ居つたのであつた。勿論之に依つて忠の心の奥底に蔽ひ隠されてある良心の光を發揮させ得べき望を以て依頼されたが、开は決して無益な考てはあらず。

### 第十五 忠の心痛

信淳が若し當時忠の墮落した有様を知悉して居たならば、當に現今の禁制を是認するのみならず、更に彼が得意の強制的服従を要求する上に就て、よき方便となす事であらう。貴族の家に生れ来て、身に天稟の美を備へ剩へ秀才であつて、座作進退極めて優雅で、身軀又其だ壯健であるから、何一つとして不自由な事を感ぜた事のない忠は、全く運命の寵兒を以て自認し、人生は之れ一の樂園であると思ひ居つたのだ。彼が自分の對象は唯二つであつた。即ち快樂と自贊とのみである。彼は特權には必ず義務の

伴ふべきものである事を曾て知らなかつた。自分に取つては、學問や智識に對する熱心な研究などは全然不必要のものと思つて居たのである。彼の自説に依れば其爲すべき事は一紳士として世に處するのみであるといふ。雖然其紳士てふ一名辭は全く近頃の一般不健全な思想を以て解釋され又通用される様に、其眞意を誤られつ、古へのチローダーが所謂、「活眼を開いて常に高徳なる人を視よ。」

其やさしき行爲をもて彼を偉大なる紳士とせよ。と下された定義に背き居る事を知らない。忠は年十五にして既に怠慢の習慣を得たのであつて、節制よりも寧ろ遊蕩の方が安樂である事を知つた。て未だ學校生活の終らぬ前に早や既に倦怠の習慣は彼の全身を支配するに至つたのである。時としては其友なる清が如何にも無邪氣に幸福な様を見ては、我も亦彼の如く無垢の人とならまほしなど思ひ出づる事さへあつたかなれど、斯かる考も決して宗教的の動機か或は良心の刺激に依つて來たのではなく、唯單に不満足なるより湧き出たものなれば、恰も砂の上に建てられた家の如くに、石地に落ちし種の如くに、稍あつて倒れ朽ち果つるものであつた。忠も清の熱心なる愛情より出づる忠告には、一々其肺腑を衝かるゝ思ひして、溜息吐きながら



三六  
傾聴し居つたが、扱て之に従はんとするには我胸裡實に慘憺たる義戦を要する事であつて、彼は遂に其勇を喚起する事が出来なかつた。登り道は降り坂よりも常に困難である。

「窄き門より入れよ沈淪に至る路は潤く其門は大なり是より入る者多し、命に至る路は窄くその門は小さし是より入る者少なり」とは、實に此の謂ならずや。忠は斯くて自ら其罪を覺りつゝも、既に泥沼に身を投ぜし今は、あがげあがけ程いや深く沈み行き、半ば悔悟の念に纏られつゝも、可憐いよ、奈落の淵に沈淪するに至つたのである。

彼は後に氣が付いた。其爲すべきの時を空費して仕舞つた事に。彼は其後放校の處分を受け、實に悲哀の極を味ひ、爰に始めて眞の悔悟の念を起したのである。其裏に居りし受持教師の前には極めて謙遜に眞誠の懺悔をなした。清は其禍の時に忠を訪ねて、之を慰め之を勵ましたが、彼の眼に涙の閃めくものあるを認めたのは實に案外であつた。若し彼が人なき密室に於て心から悔悟の涙に咽んだ事を知つたならば、清は更に案外に思ふてあらう。忠の穢された性行の下には今尙其母より譲られた、やさしき感情が深く、涙の泉となつて存して居る。

忠は父の怒を蒙る時何時もながら自分に幾分の過誤ある事を自認したが、此度こそは必ず父の激怒に觸るゝ事と覺悟した。て之を和げん爲には唯絶対に服従するより他に其途なき事を考へ、彼は其家にある間一種異様の感想があつた。事の原因を能く知つて居る家内の者共も、其主家に落ち來つた不名誉と、常に意氣揚々として居るべき若殿の沈み返つて歸き込んだ容貌を思つて、誠に氣の毒に耐へなかつた事であらう。恰度忠が放校された日には、父は夕刻遊獵から歸られたが、多數の來客があつた爲、忠に對しては未だ一言も云はれなかつた。併し其鋭い眼光と憂鬱な容貌とは何事をか言ひ居るやうに思はれた。斯くて次の日朝飯の時迄父子對面の機會はなかつた。

此間清は心私かに充分優さしき服従の美を現はさんとする決心より、更に進んで我は實に美德を行ふ者となつたてよ高慢な心迄起し居つたが、昨夜客の前に於ける父の容貌を見てから、折角の決心も幾分緩んで來た。そして何か自分に取つて都合のよき辯解の辭を考へつゝ父と對面せる時には早や既に自衛の方策を其心中に定め居つた。

若し父忠篤が憤怒の情よりも寧ろ悲哀の情、嘲笑よりも寧ろ憐愍の容貌を表彰したならば、必ずや其子の衷心に消えざる印象を與へた事であらう。雖然好機會は常に逸失されて終生又補ふ可らざる疵を受くるものは人生の常習である。

朝飯は沈黙の間に済まされたが、父は起つて室に歸る時、嚴格に我室へ來るやう其子に命じ



た。其口調が如何にも鋭く冷淡であつたので、忠は直に其頑強な持病を起し、無言のまま父の後に従うて行つた。父が安樂椅子に腰を卸した時、忠も次て其傍らの椅子に掛けた。

「何ですや父さん！何の御用があるのですか？」

不愉快な口調をもて出た冷たい此質問は、懸て鬱勃たる父の胸中の憤怒を炎々たる煙の舌の爆發に到らしむる導火線となつた。

「何の用だつて？怪しからん。一生取かへしの附かぬ耻さらしをして學校から放逐されて居りながら、丸て何か名譽でも得た様に満足して居る調子で以て尋ねるとは甚だ理由が解らんぢやないか？怪しからん奴ぢやな。」

「なかに私は其様な……夫れ程の悪い事は爲なかつたのです。」

「何？それでも未だ悪いと思はないのか？酩酊したり放校されたり、軍人になるといふ志願も水の泡となつて仕舞つた上に、まだ年も行かぬに此様な借金を作つて置いて、それでも未だ悪いと思はないのか！」

父は云ひつゝ今朝受取つた商人の期定書を抛げ付けた。

「オヤ、私は私の名で來た郵便物を開封する人があらうとは思はなかつた！」

「フン、其様な事を言うて貰ひ度ないものだ。お前の手紙は其處にある。もう持つて行つて仕舞へ！」

數通の手紙は言と共に卓上に撒き散らされた。

忠は呼鈴に手を掛けながら口返答して言ふやう、

「拾ひ集めて持つて來るやう命じてやります。」

「何も呼ぶ必要はない。自分でそれを拾つて行け！それは學校友達から來たのだらう。忠！お前はもう從來私にあつた信用を今全く棄てたのだから其積りて居れ。そして以後決してお前の好きな友達と文通してはならん。又來た手紙も一々見た後でなければ渡さない。今迄は我儘にして置いたが、是れからはもう決して甘い事をさせなから覺悟して居れ！そして早く行け！見るさへ胸が悪くなるつて來る。」

忠は溢々と其手紙を拾ひ纏めて室の入口に行つた。其時父は又呼び止めて云ふやう、

「忠！お前は放校されて永い休暇でも貰つたやうな浮いた考で居ちやいかんぞ。向後のお前の教育方針に就てはまだ何も考へて居らないか。でも平氣で馬なんかに乗る廻す事は嚴禁する。」



「オ、これは酷い事を仰しやる。此様な處つて遊獵に馬でも出掛けなけりや唯居られるものぢやありやしません。」

「黙れ！もういゝ加減に私に意地を焼かせたらいゝぢやないか。親不孝奴！早速行け！お前は又此書を出しを私が拂ふだらうと思つて居るかも知れないが、それは飛んでもない了簡違ひだぞ。」

忠は逡巡して入口の處へ立つて居る。父の最後の一言は實に彼の耳底に雷の如く鳴り響いたのである。今迄虚飾に用ふる化粧品や贅澤品など皆父の名を以て取つて置いたので、今更全く困り果てたのだ。て前と丸て變はつたやさしい調子で、

「オ、父さん！何卒拂つて下ささ。」

「否や、一文も拂つてやらん。」

「でもお父さん！私はあなたの名で取りましたよ。」

「何だ？私の名を使つたつて？ぢやお前は商人共に私が命じたやうに云ふたのか？」

忠は極めて低い調子で「左様です」と答へた。

「それぢやお前は僞稱したのだな。此墮落書生奴！どうして其様に惡い人間になつたのだ。」

「情けない奴ぢやないか……」

父は起ち上り忠に背を向けて窓の方へ行つて仕舞つた。て忠は靜かに思ひ廻らし、全く耻入りていつもの高慢な風采は何處へか消え去り、恐るゝ父の立てる傍らに進み行き靜かに其手を握つた。併し父の憤怒の情は今是れ式の事て直ぐに癒さるゝものではない。彼は忠の手を振り放つて云ふやう。

「藤原家の嫡子で居りながら、僞稱罪を犯した者！嗚呼私はもうお前の影を見るのも嫌だ。あちらへ往け！」

暫時前に其心を支配した耻と悲との感情は今や父の此一語の下に忠の胸を引拂つて、直ちに入口の方へつか／＼歩み行く其様は、全く其本性を表はした處である。て彼は寧ろ冷淡に高慢に再び念を押した。

「ぢやお前拂つて下さるのですねお父さん！いゝてせう。」

「僞稱者！虚言吐き！何だまだ其邊にぶら付いて居るのか？サッサと行け！そして當分私に顔を見せて呉れるな。」

忠は特更に強くバチリと戸を閉めて己が室に歸つた。其處で獨り坐つて回想したが、考へれ



ば考へる程益々自己の地位が危ぶまれる。彼の借金の如きは屹度父が拂つて呉れるに相違ないとして、それは別に心に掛ける必要もないと思ひ定めたが、其他に未だ一重荷のある事を父にも今尙隠して居るのだ。前の事丈けならば彼自ら省みて左程悪事を働らいたとも感ぜないのであるが、彼が遊蕩の書生仲間へ頼る重寶がられて、遣はされた少なからぬ金員は所謂信用借となつて居るのである。て此名譽ある(信用借に對しては、忠自身如何にしてよきやを知らず、父の斯く怒り居る間に如何とも處理すべき術を見出し得ぬのである。

此借金は不幸にも曾て清の見るさへ胸の悪くなる程嫌ひ居つた彼の藤原家の家扶に關係して居るのだ。いや實際忠が斯く迄も虚飾を好み遊蕩無頼の仲間入をしたのも、實は此藤原家を我掌中に左右し隠然自ら主人公の實權を握らんとする彼の奸誘な家扶の陰謀であつて、即ち先づ忠の興し易きを幸ひ之を其術中に陥れたのである。

父との此會見の後數日は流石忠も外出せしに閉籠つて考へて居た。某日獨り自室に小説を讀みながら折々自己が不愉快な境遇を想ひ出しては、呆然として居つた、其時突然入口の戸を叩くと思ふ間に彼の家扶の面が見えた。

忠「何の用があるのだ？」

家扶「一寸御話致したい事が御座いますして……」

「何？我輩と話をしたいつて？宜しいかういふ話がある。」

と云ひざま彼は其讀み居つた小説本を家扶の頭に叩き付けた。家扶は身を反らして其本を取り上げ、暫らくは再び投げ返さんず勢であつたが、思ひ止まつて唯叫んだ。

御止なさい！若様、其様な事をなさると勢ひも相手せねばならぬやうになりますから……

「何だ？も相手せんけりやならんとは失敬な奴ぢやないか？如何して貴様の分際としてそんな無禮な言を吐くのだ。」

家扶は答へもせず明かに冷笑を漏しつ、傍への椅子に腰打掛けた。て忠は其顔を睨みながら憤怒の極全く其顔色を失つた。此時家扶は其ポケットから證文の一束を取り出したが、其多くは忠が既に忘れて仕舞つたものと又會て書いた覺えのないものである。併し家扶は左も大切氣に一枚一其紙を延ばしては一々叩きながら卓の上に重ね居つた。

「扱て若様！是非此金を拂つて下さい。私も自分の金ばかりぢやありません。他から都合したのもありますから誠に困つて居ります。」

「拂つてやる。屹度何時か拂つてやるから心配するな。馬鹿奴！我輩が獨立の人間になる迄も



そんなに長い間ぢやあるまい。其の間勝手に取りたい丈け利子を付けて置け。拂つてやるとも、造作ありやしない、それが解らないのか此野郎！」

「そんなに悪口を吐いて頂きますまい。静かになさい。てなけりや私があなたの口を塞いで上げませう、早速五百圓をお出しなさい。私もう待つて居れません。」

「何？五百圓？何だ其半分も借りた覚えはないが……」

家扶は其前にある證文の二重ねを指差した。て忠が之を手に取り上げて見やうとした、時彼は巧にそれを奪ひ返して、

「否々何卒其様な真似は御免を蒙りたい。」

「何の真似だつて？此盗人奴！」

忠は真紅になつて叫んだが、家扶は悠々然と其證文を態々一枚づつ疊んで紙入に收めて仕舞つた。

「まあ一寸御聞きなさい若様！私は此家を出ると申渡されましたから、是れから何か事業を見付けねばなりませんので、先づ満洲へ参る積りです。ですから是非共此御金が要るので私拂つて頂く迄は、誰が何と言つても此家を動く事は出来ません。愈々あなが拂つて下さらな

けりや私無據子爵様にお話致します。若様の爲にはありませんか、之れも如何も致方ありませんからな。あなたと私の他に誰知らぬ秘密も不得已父君に漏すやうなりませんが……如何てせうか？」

此の威嚇と冷笑との言葉を殘して、あはれ失望せる忠を其儘に、彼は此室を去らんとしたが、再び入口の處に顔を差伸べて、

「一箇月中にすよ、宜しいですか。若し間違つてら唯今申上げた通り、能く覺えて入らつしやSo。」

嗚呼忠は今や獨り黙想すべく殘された。是れ實に大なる問題である。放校の如きは之に比べるならば極めて些細な問題に過ぎない。今や父は半ば嚴格な半ば嘲笑的の態度を以て彼を遇する。友は皆可及的彼を避けんと勉めて居る。否或者は明かに忌嫌の言を洩した。乗馬も遊獵も出れない。剩へ人知れず我胸を抑ふる此一大難題がある。嗚呼彼は眞に苦勞の極頂に置かれたのだ。

今は父より金を貰ふ必要はないにしても、此信用借文だけは支拂はねばならず。縦令延期するにしても必ず新たな非常な要求が起つて来るに相違ない。左すれば必ずや重い罪を重ね、許す



可らざる不義を行ひ、根底より己が品性を傷け全然父の愛情より我身を切り離すやうになるらしく思はるゝのであつた。

忠は斯かる考をもて深く昏迷の巷に彷徨うて居た。ても未だ此困難を通るべき良方法とは思ひ當らない。手にせる書物も最早讀む事は出来なくなつた。早や唯泣く一事あるのみ。て彼は頭痛と心痛とに得耐へて椅子に靠れたまゝ泣いて居た。

あはれ他所眼には何不自由なき幸運兒！曾ては此の人生を、一の樂園と觀じた青年の心理！何等の變轉ぞ？何等の矛盾ぞ？今は又とあるまじき絶望の砂漠に彷徨ひ、苦惱の荒野に泣き、其身を罪惡の淵に沈めて、光明と暗黒との中間に進退維れ谷まらんとは……。

### 第十六

### 忠の墮落

此き子一コ、ハタニ死スモ可

藤原忠の相談相手となる者は今の處伊藤清一人である。忠も元來己が秘密を他人に打明けける事を好まず、爲に親戚の者や他の朋友にも、死してや教父なる伊藤清隆へも斯かる事を話す勇氣は起らない。て思案に餘つて唯一人の尊信し居る友清の下へ、必ず同情と慰めとを受け得るものと思ひつゝ、詳細事情を手紙に記して送つたのであつたが、其返事は豫期せし如く、凡て

の秘密を其父に打明けて、赤裸々になつて謝罪するより他に途はあるまいといふ忠告であつた。忠は如何にもして清の此の忠告に従はんものと勉めたが、父の現在の態度を見ると如何にもそれが六ヶ敷い。幾分かなりとも其嚴酷な處が和らげらるゝや、或は憐れみか愛の一言でも聞く事が出来れば、直ぐに其機會に乗じて我過去の罪業を懺悔する事も叶ふなれど、忠篤の心には從來の教育方針が誤り居つた爲に斯かる失態を來したといふ深い後悔の念があるの

て、愈々嚴格に冷酷に其子に對する必要があると信ぜられて居る。されば忠の如く性來自尊の念に勝ち居る青年が、如何にして絶對の服従をするやう其高慢の鼻を折る事が出来やうぞ？蓋し駱駝の針の孔を通る程困難であらう！

餘りに大切にされて育てられた子供が、其親に對して親切に能く其意に服従するやう生長する事は、否少くとも其恩愛の親を敬愛する人たるの常倫を備へて其親を安ぜしむるやうになる事は、極めて稀なものである。人格の尊貴を認めて餘りに其子を尊重にする宗教家や、子の愛に引かされて其思ふ儘に任する富豪の子弟に比較的放蕩無頼の者の生産するものは、それ或は爰に其原因を有するのであらうか？

雖然忠に取つては此場合全く其罪を白狀して赦免を願ふより他に其途とはない。て彼は其



何れど、罪より脱却すべき機会は必ずしも人の望む時に與へらるゝものではない。又神は往々新たななる誘惑と悪を働かせる能ふ境遇とを與へ給うて、吾人の過去の罪を罰し給ふ事がある。戦慄く手を握り占めて、忠は今や父の室の戸を叩いた。併し返事がない。開けんとして始めて其鍵のかゝつて居る事を知つた。て忠は何心なく其鍵の孔を通して窺いた時、父は乗馬で彼方へ出掛け行く處であつた。彼は折角の決心も其勢の挫け来るを感じつゝ、自己が部屋へ歸つて来た。途中僕に逢うて何時父が歸るか尋ねた處が、何か區會に要務があつて行かれたので數時間は歸られまいといふ事であつた。左様か、之れはせい」と忠は手を拍つと同時に圓らすも口走つた。

生ひし角を自ら挫折して過去の所業を告白し、心より之を懺悔して父の同情と教とに倚頼せんと企てつゝ、勇を鼓して父の室に訪問れた。嗚呼此時！是れ實に人生の最も價値ある時である。罪の泥足を洗つて清き良心の堂宇に入るか、或は自暴自棄更に罪惡の巷を活歩するに至るか、二つに一つの依つて岐るゝ貴重な時である。

嗚呼如何なる考が其胸に浮んだのであらうか？ 彼は其廊下に立止まつた。今や部屋へ歸る處を戻り來つて内庭へ出た。直ぐに又父の室の處へやつて來てキョロ、と狡猾な眼を光らせつ

つ其四周を見廻した。

誰も居らぬ。柱時計の時を刻む音の外、蟲の音だに聞こえない。彼は暫時佇立んだ。何故か今は毛の根まで耻の想で赤くなつた。更に其邊りを拔足に歩いた。孔雀の一羽庭を逍遙し居るもの、他眼に映つる動物の影もない。然り知らざる處なり神の外は誰知る者もない。

忠は知つて居る。父が其室を去る時には、何時も入口の戸の鍵をかけるけれど、内庭の窓と室内の書類や金銭は其儘に爲し置く習慣のある事。此日は殊に突然出掛けたのであるから、勿論其窓の硝子戸をさへ閉められず、箱に入れた金銭や貴重な書類も別に安全の用意はせられなかつた。

忠は拔足に歩るゝ廻るうち、不圖其窓の半ば開かれ居るに氣付いた。て恐るゝ躊躇しながら、四邊を見廻しつゝ近づいて、靜かに尙廣く之を開らさ、輕くも身を躍らせて其室へと入り込んで仕舞つた。入つて見れば或罪の考は次第に其心を奪ひ、一分毎に益々強く大胆になつて來た。嗚呼彼の落着かざる態度や燃ゆる如く激動せる如き容貌は果して何を意味し居るのであらうか？ 數日前なりせば屹度驚いて刎ね付けたに相違ない一種の誘惑に、今や脆くも捕はれんとして居るのだ。



Wonderful expressions  
marvellous days

5)

多年積み来たつた結果を試験すべき危機は此時であつた。長い間放縱の習慣と不絶罪を犯す事に依つて弱められた彼の道徳思想が、一發の爆弾に脆くも其牆壁を破らるゝといふやうな危機は此時であつた。頑強な誘惑の魔軍に襲撃されて遂に其軍門に降る所以のものは、嘗に一時の出来心の罪に非ずして、多くは永の年月其心根にあつた罪の想の結實つたものである。罪も亦結核菌と同じく幾分潜伏の時期を経て後明かに發現するものであらう。

「大なる罪業は一つの行為に凝固められたる不正の想である」とは實にも真なるかな。此の眞理を知つたなら誰しも平素我良心の本能を發揮させるやう勉むべき筈である。一と度墮落するならば、

「其處に悲の霧とさし涙の雨降り來り、生涯遂に元の如くなり難し。」

如何なる罪人であつても、若し彼が向ふ一箇年間に犯す罪惡を今豫告するならば、必ずや恐懼れ戦慄さ總身の毛もよだつてあらうと思はれる。雖然誘惑の危機一と度猛虎の飛ぶが如く落ち來る時、身に何の準備もなく何の武装もなく遂に可惜其餌食となつて仕舞ふのである。人々は斯かる罪人の行為を讀んで、我は決して斯かる愚を演ぜぬと斷言するであらう。雖然自ら同様の恐ろしい事をせん爲に其日を過ぎし居る事に氣付かぬ場合が多い。

110

讀者諸君！互に大に戒心すべし事ではあるまいか？諸君は各々此種の經驗を持つて居らるゝであらう。勿論之と同じ形式に於てとは云はない。何故かなれば一人の身に來る誘惑は他の者に來る事と異つて居り、惡魔の顔は敵手の態度に依つて如何様にも變つて來るからである。嗚呼如何なれば物事は斯くも志と齟齬するのであらうか？誰か誘惑の外に毅然として起つて安全な者があらうか？古聖ダビデ王や彼得の如き人てさへ尙幾度か惡魔の軍門に降つたてはないか？誘惑に入らぬやう目を醒まし且つ耐れとは誠に恩愛の聖語である。さらば自ら立てりと思ふ者はたゞれざるやう慎むべきに非ずや。

見れば紙幣の入つた箱は其儘卓の上に置かれてある。されど忠は夫れを取る氣色もない。否取らんとする考てさへ最早そら恐ろしくなつて耐らないのだ。て今忠の胸に囁やく惡魔の誘惑は、斯く迄下劣な直接なものではなかつて或他の方法がよりやさしく、より高尚に(?)思はれた。

銀行手形が他の箱に入れて鍵かけずに机の上に置かれてある。忠はこれを見て考へた。父の収入は極めて多額であり又其性質として餘り些細な金勘定をした事がないから、暫時自分が必要なだけを取つて置いて、直ぐに發覺するやうな事はあるまい。又少し時日を経れば他に如

111



何様にか償ふ方法もあるであらう。追々は自分のものとなるべき金なれば、暫らく黙つて借りて置いたとて、左まで悪む事ではあるまいといふのが今忠の手を長からしむる理由となつたのだ。

嗚呼誘惑の調手は何時も斯く滑かである。悪魔の口車程樂しげな尤もらしいものはない。スヒンクススヒンクスの如く美はしき顔して人を喰ひ、笑中劍を藏すといふ事は其唯一の贖略である。忠の正道を踏み外すのも何時もながら此口車に乗るのである。恐る／＼も彼は積重なつて居る手形の一枚を抜き抜いて、之に父の名を記し、硯箱の彼方に投げ出され居つた父の印を捺して、さして手形箱を元ありし如く置き直し、斯くて此大罪を敢て犯して仕舞つたのは實に一分間の仕事であつた。

忠の手跡は能く父の書體に似て居つて、父さへも時に區別の難來ぬ程であつたから、手形に記した文字は誰か之を疑ふ者があらうぞ。彼は之を安全と信じて居た。て再びキヨロ／＼と見廻したか未だ誰も居らぬ。誰も見えぬ。全家極めて沈靜である。唯孔雀が眺め居るのと其鳴く聲が響くのみだ。併し壁に耳あり障子に眼あり。忠に取つては十萬人が見て居つて、百萬人が彼の耻を囁やさ居るやうに感ぜられた。誰あつて一目も見た者は確かにあるまいが、併し地球

が丸て鏡であつて我を寫し居るやうに思はれ、何一つ音とでも聞こえなかつたもの、柱時計のカタ／＼する音と、逼つて来る自己が鼻息とは折々其膽を奪つた。そして振子の振動は何か意味ありげて、自己が呼吸は他人のそれの如くに感ぜられた。折しも時計が、ガラ／＼と鳴つたので彼は喫驚して飛び上つた、が間もなく時計は十一時を報ずるのであつた。彼が先に其室に入つた時恰度十一時に十分前であつた事を覚えて居るが、嗚呼此僅か十分間！之は實に彼の生涯に耻の歴史と永久の悲とを刻んだのである。此十分間に多年の間培養され居つた罪と毒が今や紅の花を咲かしたためである。一時の禍失は實に生涯の苦痛で、彼は今重／＼罪の荷を負うて再び窓より飛び出だし、靜かに自己が部屋へ戻つた。

嗚呼罪惡は斯くて爲し遂げられた。て忠は終日部屋に籠つて我と或心を沈めんと勉めて居た。併し然か勉むれば勉むる程冷汗は其腋下に滴々として流れる。何も發覺を恐れる譯ではない。夫れは充分安全であると確信して居る。雖然其確信は未だ我心の動悸を押し沈める事が出来な。如何に煩悶して見ても依然として死の陰の谷を歩み居るやうな感想を取り去る事が出来なかつた。そして今は早や自慢の念慮は全く消え去つて自ら自己が真相を見る事が出来たのである。



永の年月悲哀の生涯を送つた人々は、時に鏡に對して自己が容貌の憔悴た事を嘆つものである。か今忠の心の前には随かに其鏡が掛けられたのである。會て人々が口毎に阿諛した自己が天性の美は、今は早や霧と消え失せて下劣な動物的な者となり、罪の爲に平和もなく自ら好んで善と絶交せる我となつて仕舞つた事を自覺せざるを得なかつた。て彼が今朝か心を慰め得る所以のものは先づ彼の家扶の窮迫を免れ得るといふ考であるが、是とも譬へば黒地にされた刺繡のやうなものであつて、表面は美しく飾られやうが、心の奥底には黒い恐ろしい罪の蟻窟もあるを如何にせんか。

忠は一日も早く自己が罪の印なる彼の家扶の手にある證書を取戻すやう望んで居た。て早く彼との手を切つて自由な身になりたいと思つたが、此日には遂に渡す事が出来なかつた。かくて次の朝まで延ばして置いたが、初朝になつても眞に其勇氣を喚起す迄には少なからず隙が取れた。家扶を呼んで先づ何と言うたらよろしからうか？彼に我罪を發されるやうな事があつては大變だ。甚麽な容貌をして甚麽な態度で彼に接したらよからうか？など、先づ種々其稽古に時を移した。遂に意を決して家扶を呼ぶ爲に呼鈴を鳴らした。そして此方へ近づいて来る其足音を聞いた時、最早其胸は何となく動搖めいて、前からの折角の用意も無益になつて來た。して

彼の顔を見た時には豫ねて云はんとした事も口籠つて仕舞ひ、平然と冷靜に構へ居らんとした事も打忘れて仕舞ひ、唯直ぐに銀行手形をポケットより取り出して、他所を見ながら家扶に云ふのであつた。

「さ前直ぐ彼の證文を返せ、爰に是れだけ渡すから……」  
 家扶は驚きながらも態とらしく沈黙して是を受取り、其紙面と若殿の面貌とを見比べた。そして彼の狡猾な眼は早くも忠の顔の急激な變化を認めて、何か其間に悪事の潜み居るものあるを見て取つたのである。て彼はいつ迄も沈黙のまゝ何か甘い仕事が此間に出來るであらうと考へつゝ、殊更に無言で依然忠の顔と手形とを見比べて居る。  
 忠は再び何氣ない風を装うて言つた。

「何だ？何を考へて居るのか？お父さんが下すつたのだから善いぢやないか、早く持つて行け？愚圖くして居て後悔するな。」

「ハ、ハ、ア！若様只今行きますか、併し何だか變ぢやありませんか？え？さうぢやありませんか？」

彼は入口の方へ歩みながら繰返して云ふた。



「何だか……ハッ……怪しいわさ。」

「待て！お前は證文を返さないぢやないか？」

「ハッ、ア？今直ぐに取らうと思ふのは御了簡違ひですよ。」

家扶は其儘忠の部屋を去つた。併し尙廊下で手形をしたま、詳しく検査し居つたが、暫らくして再び忠の部屋の戸を排いて首丈け覗き込んだ。折しも忠は恐ろしさと恨めしさとに得耐へず、雙手もて其顔を掩ひつゝ机の上に泣き伏して居た。て家扶は全く自己が疑念の根據ある事を確かめ得たのを喜んだ。雖然恐らく忠の悔悟の有様と其絶望の悲哀に沈める容貌を見て流石は幾分同情の念でも起したのであらう、別に何を云はずに再び戸を閉ぢて歸り掛けた。併し其途中彼は尙五六日間出来る丈け視覚聽覺を働かせて忠の行動を觀察し、可及的此疑念を自己が利になるやう解決せねばならぬと決心した。

忠の罪は何の役にも立たぬ無益なものとなつた。否無益よりも尙悪るかつた。彼の魂を繋ぎ居つた鐵の帯に更に之を丈夫にする爲鐵錘を打つたやうなものである。元の借金は済まされず、而も新しい怖ろしい責任が湧いて來た。彼は實に自ら亡びんが爲に誘惑に負け、斯くて罪を犯せる者の常として、我身を零落に賣り渡したと感付いたが、其時は早や既に遅かつたのである。

### 第十七 既に遅し

少しく意を用ゐて忠の近來の態度を觀察した時は、彼の狡黠な家扶は明かに手形問題に就て子爵と令息との間何等の相談もなかつた事を覺つた。

忠はいつもにたく靜かに沈黙して能く服従し居つたが、併し父は未だ何處迄も嚴格である。て家扶は數々立聞して此の状態では到底子爵が其悻の行爲を知らぬのみならず、手形を與へる如き事は有り得可らざるものと斷定する事が出來た。其此くと知り得た家扶の喜は實に限りない。彼は今や彼の手形と未だ償還されない證書とを持つて居るのだ。而も彼は此双方共彼の財産とする積りである。今や彼は忠に對し無限の權力をもて臨む事が出来る。若し此事が發覺するゝとも罪は忠になるのであつて、自己は責任を免れて獨り利を收め得るのみならず、其堅固な楯の後ろに過ぎし日の幾多の罪跡をも暗ませる事が出来るやうになつたのである。併し實際之を物にせんとする迄は充分の注意を以て能く機宜に處せねばならぬと知つた彼は、忍耐して尙も機敏な觀察の眼を働かし、其真相を詳細知悉する迄待つて居た。



子爵は近來忠の蒼糲めたやつれた愛顔を見るに付け、流石は親の身の何となく憐愍に感じて來た。何時もならば忠の天性として多數貴賤の間などに如才なく斡旋するのが得意であつて是は父の常に誇とせる處であつたが、此頃は若し獵よりの歸るさ共に夕食でもする客があつても、忠は言葉を掛くるさへ厭はしき様子を示し、明かに失望煩悶の極點に達して沈黙し居る事が認めらるゝやうなつたのである。殊に或夕への如きは實に著しく認められた折であつて、忠の最も敬慕し居る、伊藤清隆さへも彼の憂悶を氷解させる力はなかつた。そして全く其舊來の性質を滅却し居るのを知つたので、清隆は藤原家を辭するに方り靜かに子爵に耳語するのであつた。

清隆「あなた餘り忠さんに嚴格になさらない方が良いぢやありませんかと、何時ものやうに遊獵や乗馬位は許しなさいまし。貴君の御不機嫌を氣にして非常に心配して居られる様子がすが、貴君の從來の方針が激變した爲に或は取り返しが付かない失望の底に押し沈めて仕舞ふ様な處はありますまいか？」

忠篤「嗚呼どうも子供といふものはまあ困つたものですな、僕は父としては極めて親切な者であつた積りだが、忠は彼の通り不名譽を負ひ又放校までされて仕舞ふし、森君は父としては最も嚴格な人だつたが、いつも進さんの懈怠る事と不従順な事とを嘆して居る。伊藤さん！君のやうな幸福の親になつて見たいものですか」

「いや何も失望なさるには及びません。忠さんは勿論少し過失をなすつたものゝ心の奥底には美はしい天性を持つて御座る。又森の進さんの如きは、僕會て彼の様に天性善良な子を見た事がない程に思ひますし、悴の清などは全く兄弟の様に親しくして居ります。」

「何でも御氣付の事があつたら僕に忠告なすつて下さい。君には何か良い御考がありませうか？」

先づ忠さんを御許しなさい。そして従前の通り愛してやりなさい。唯嚴格にする時には何處迄も嚴格にして所謂愛に溺れる事のないやうに御注意なさいまし、誠に出過ぎたやうですが僕は貴君の舊友とし御一家の爲を思うて失禮をも顧みず申上げる次第です。」

藤原子は清隆に多謝して支關に別れ、可及的其忠告に従はんものと決心した。そして客間へ歸つて見ると今や忠は力なげに寫眞帖を繰返し居つたが、其容貌は飽迄やつれ返つて顔は何處までも蒼白いので、之を見た父の心は痛く感動せざるを得なかつた。忠も不問眼を上げて父を見たが再び力なげに俯向いて仕舞つた。此時忠篤は傍らの書物を手にして長椅子に掛けた。雖

大の帽の目録



然彼は書物を見る代りに熱心我子を見守りて居るのである。見れば見る程同情と憐憫との情湧き出て、會て彼を愛した同じ愛情は油然として迸出し來つた。

忠のスラリとした體格、其黒目勝の眼、其貴族的の容貌に加へて、氣品ある情に満てる面持は實に一見尊敬の念慮を起さしむる所以である。而も此缺點のない玉に似たる容姿に唯一の疵となり居るものは、忠篤の記憶より去る事の出來難き方法に依つて印せられた其額にある打疵である。

此數日間の苦闘に依つて忠の顔色に於ける高慢氣な風貌は今や全く其影を止めず殆ど恐怖に近き尊敬と服従とを以て父に接するので、忠篤も内心大に喜ばしく感じ來り、其獨子に對する愛憐と同情との念は更に一倍の反動を加へて彼の心に湧き出た。

忠篤は思ひ起せし如く起ち上つて忠の傍らへ行き懐かしげに其手をもて我子の頭を撫てた。此時忠は寫眞帖の中にある殆んど見覚えのない亡き母の美はしい面影をば、深い／＼感想にて眺めつゝあつた、が今父の我頭を撫てられた事に喫驚して首を擡げ、聽て涙の露を宿せる其眼を父へ向けた。

「此方 來て、忠！私の傍にお坐り、少し話したい事があるから……」

最初忠は良心の刺激を受けてか、其心臓は激動し其手は震へた。そして若しか父が我罪業を發覺したのではあるまいかと驚いたのであつたが、併し父の言葉も動作もどうしても斯く疑ふ事の出來ぬまで親切にも思はれた。其手もて頭を撫てられ又長椅子の方へ手を取つて伴れ行かると間に如何にしても其様な疑念の容るべき餘地なき事を覺つた。實際此様な事は暫らく振つてあつて、若し父が我罪の總てを知つたなら如何しても斯く迄親切にし呉る／＼筈のない事を感じたのである。斯く感ずれば尙更彼の手は震へる。彼は確かに斯くと知つて更に感動せざるを得なかつた。今や彼は自ら省みて父の斯かる待遇をどうして受くべき價値あるかと感ぜざるを得ない。又放校處分を受けて後或夜父と大衝突をやつてから以來子として思ふまじき復讐的の感情を起した事が幾度あらうかなど回顧した。尙又我身故に家名を汚し親戚よりも見放さるべき充分の罪業は我身に依つて演ぜられた事にも思ひ到り、或は父をして死ぬるまで不名誉と悲哀とに過ごさせるやうなりしかなどと思ひ浮んだ。是等の考は瞬時に急流の如く彼の心に波打たせ、寧ろ父の案外な程に、兩手をもて父の腕に縋り付き俯向いて潸然と泣くのであつた。「忠！忠！まあ其様に悲んで私まで泣かせてはいけない。若しお前が其様に放校された事を悲しく思つて居たのなら私は彼様に怒つたり何かしなかつたのだつた。だが彼の當時お前は少



しも何とも思つて居らない様子だつたからお前の將來を思つて怒らずには居られなかつたのだ。併し忠！今からもうお前の前の事を許して上げやう。ねえ忠！許すと云つたら何も悲む必要はない。是れからの教育方針を定めるまではさあ何時もの休暇のやうに楽しく遊んで居りなさいね。」

雖然忠は尙頭へへ掻き得ぬ。更に父はやさしい親切な事を言うたが、尙も其歎り啼泣を止めない。後彼は切れ／＼に涙を呑みつゝ言ふのであつた。

お父さん！私は……もうお父さんの……御親切を受ける価値がありません……私もう少し善い者になればよかつたが……最早遅くなつて仕舞つたのです……」

忠は父の手を握り占めては聲を立てつゝ、「私は墮落して仕舞つたのです／＼」と泣き叫ぶのであつた。

「否、否、忠！お前は未だ若いから今迄は悪るかつたが、経験に依つて色々學ぶ事が出来る。」

「嗚呼お父さんは未だ悉皆御存じがないからです、若し此様な時に御母さんでも生らして在らしたなら打明けてお話が出来たらうに。」

「あ、左様だらう、多分私は皆知つては居るまい、が併し忠！心配するナ。もう私は過去の事

Too late!  
~~too late!~~

てお前を責めるやうな事をしない。彼の書出しは私が皆拂つて上る。其代りお前も私と今も後も心を合せて勉強して御呉れね。忠！お前は一人しかない此親に親しくせなければいけないぢやないか。今もう悉皆打明けて私に話して御仕舞ひよ。」

打明けて話すといふ事は今は既に六ヶ敷い事である。嗚呼若し子爵が尙數日前に斯かる親切を以て忠を迎へ呉れたなら、夫れは極めて容易い事であつたが、今は既に其後種々の事柄が起つて居るのだ。故に忠も自ら「今は早や既に遅し」と感したのである。

罪が罪の報酬として來る時には……彌らざる罪惡に陥る事が多年秘め置かれた罪の罰として神より與へらるゝ時には……其眼が奈落と不名譽とを明かに見得た其時には「早や既に遅し」の感想を得るのが人の世の常である。是は實に古ヘアダムとエバとの眼が開けて己が裸體なるを發見し倉皇木の葉を纏んで身に纏ひ、或はエデンの樹影に其姿を隠したといふ以來常に人生の習となつて居るのだ。

されど懺悔は嘔り啼に依つて數々言葉も出なくなるやうに悔恨と謙遜と救済との爲にせられる。忠は飾りもなく見えもなく全く心より父に告げた。如何に我身が墮落しつゝありしか如何に我身が大なる罪を犯せしかを告げた。が併し出最後の惡事……實は之れが忠の冒せし罪の中



最大のものであるが：是れ丈けは話し出すの勇氣がなかつた。

父は話の進むにつれて益々嚴格になり不興になつて聞いて居た。嗚呼是れ昔罪と無思慮との話である。之を聞くに付けても忠篤の心には、若し自分、がも少し美德を備へ居つて斯かる場合に熱心、戒める事が出来たなら、斯く迄も我子を墮落の淵に沈めずともよかりしものと、痛恨の念に打たれた。實際彼は忠に對して數々戒諭を加た事もあつたのだが、併し彼の訓戒は單に威嚴を以て臨むより他に方法がなく、宗教的に懇切な勸告をする様な事は出来なかつた。始めて今に及んで單に親の權威を以て訓戒する自己の如き者と熱愛溢れて共に泣く基督教徒の戒との間に非常な逕庭のある事を覺つた。今迄も彼は斯くすれば善いとは知り乍らもそれに従ふ事の出来ない習慣がある。雖然彼は天性親切な人である。自分の壯年時代からの遊蕩を今更羞恥と共に思ひ出して、全く忠の罪を許すと覺悟して居る。心から許すと思つて居るが其間にも我心に通り来るものは、父の嗣は往々にして遺傳するもので、親の誇いた種は子に到つて始めて結實するものであるといふ教訓であつた。

「嗚呼忠！私は勿論それを聞いては面白くない。非常に遺憾に思ふ。雖然お前は是れから善良い方に進んで行つて呉れるだらう。お前の意志は之れ迄餘り弱過ぎたのだ。お前の行爲は爲に悉く悪るかつた。併し私は今お前を許して上げる。全く過去の罪は咎めない。私が口に出して云ふからには、もう全く其様な事は打忘れて仕舞つて、お前が今晚から新しい生涯に入るやう望むのだ。」

忠は涙乍らも有難さうに父の手を握り占め、多年の間未だ會てない程に感動して、父の手に接吻した。そして「お休みなさい」と挨拶して客間を去つた時其心には近年稀有の快感を得た。快感に幾分心の軽さを感じつゝ、今や忠は寢室へ往かんとし二階の階梯段を登り掛けた時、徐ろ／＼と逃げ隠れ行く家扶の後姿を認めためたので、今迄の事を皆立聞されたと氣付いた時、折角の快き思も此一見に遮ぎられつゝ、溜息吐きながら室へ入つた。そして疲れ果て、褥に就いたが夢は終夜何となく深い／＼谷底へ沈み行く事のみであつた。

夢よりも尚怖ろしい事實は次の朝實現して來たのである。家扶は再び忠の室に入り來り先の手形を取り出し、左も確信あるかの如くに言ふのであつた。

「若様是れは本物では御座いませぬね。」

「何だつて？何を云ふのか？」

「いや、子爵様は決して貴郎に之をお渡しなすつたのぢやないと申すのです。」



「オヤ、それなら他に誰が呉れる人がある？」

忠の言葉は實は其唇にあるのだ。家扶は別に返答もせない。併し何か意味あり顔に机の上から筆を取り上げ、今は顔色益々蒼靨め行く忠の顔に目も放さず眺めながら、斯くして配せしに非ずやとの容態を示した。て忠は可及的其容子を疑はれぬやうにと家扶の方へ背を向けて口籠り乍ら言ふ。

「それが本物だといふ事は直ぐに別かる。それを持つて……銀行へ行つて見ろ！」

「ハア、参ります、先づ子爵様の處へ持つて参つて伺つて見ませう、さ行きませうかな。」

「ま、待て！待て！」

家扶は殆んど入口の戸まで行つたが又靜かに立戻つて來た。此時忠は己が顔の泳ぐ如くに感ぜられ俯いて其顔を隠した。

「さて若様！私は何もあなたに殘忍な事を致す積りぢや御座いませぬ。いつかあなたが銀行の方へ御出になられる時私に御供させて下さい。誰も此事に就ては知る者がありませぬからな。勿論私は彼の證文は返す事が出来ませぬ。併しそれは何年でもあなたが御都合の付くまで御待ち申しませう。それから此の特別な……何を……隠蔽して置いて貰ひ度いと思

召すなら何卒もう百圓丈け私に渡して下さい。その口止め金は三週間以内に御都合なすつて下さいまし。さうすれば私も直ぐ滿洲の方へ旅行致しますから何も御心配にはなりません。是れは善い考であつて又あなたに對しては寧ろ親切な事だと思ひます。眞實に之を口止めるのに百圓は愚か五百圓でも安値いものですよ。」

あはれ忠は云ひ難き怖ろしさに打たれ、全く萎れ返つて仕舞つて、何の返答も出なかつた。

「宜しう御座います。知らない振りをするつて在らつしやるのなら直ぐに子爵様の處へ参ります。私は御承知の通り可及的事を穩便に濟ませたいと思ふのですけれど、あなたが道理と御聞別けにならないから不得已私唯今から参りませう！」

再び忠は「待て！」と叫んだ。

「お前はぢや若し私其金を與へたなら屹度再び此手形に就て文句を云はないと誓約するか！」

「勿論約束致します。」と固く誓つて出て往つた。

此間忠は獨り殘されて反省した。嗚呼實に思はしい。何如に我生涯が既に闇黒の裡に辿り込んで、如何に慘憺荒涼たるものとも終りし事と思ひ廻らしたのである。彼自身の罪が其少



壯時代の快活な美はしき生涯を蔽ふ爲にと、天の四方より呼び集めた雷様様の如き雲は、嗚呼如何に黒く如何に濃密になり来りし事よ。誰あつてか彼の不名譽極まる秘密の重荷を分擔つて呉れる者があらうぞ？ 誰に向つてか同情を求め救を乞ひ、忠告を受け得べき者があらうぞ？ 伊藤清に頼らんか？ 否々彼の勇往快活な天性は必ず何事でも打明けて仕舞へといふ解決を與ふるに極つて居る。さらば森進にか？ 彼とは餘り打解けて語り合つた事がない。併し平素の状況から推察するならば、彼こそ誠に弱き者に同情ある人の如く思はれた。て忠は彼を見付け次第此胸中の苦惱を打明けて善後策を講ずる事に決心した。然も進の性行に於て寛大な男らしい謙遜な處が表はれ居るから、打解けて話し出づる事が出来るであらう。善良な心の人には常に又やさしい人である。一と度邪道に踏込んだ人は一般に正義の道を蹉跌なく歩るいた人よりも過失に對して嚴格である。過失を許し之に同情する事に就ても容易くないものである。て忠が彼の忠告者同情者として進を選んだのは至極適當である。彼の知人の内清に於いて善良な者は進の他にないからだ。

斯くて忠は是より數日の間何事もなく樂しげに、時には遊戯をなし時には遊獵に出掛けて、其心裏に歸りて居る苦惱を微笑の中に蔽ひつゝ、過し居つた。そして何日か進と會見して此苦惱を脱れ得べし智慧を借りたいと日々心掛けて居る間、進は父の命に従はんとして、可及的忠に邂逅事を避けんと勉めて居るのであつた。

第十八 慘酷な禁制

併し一哩も隔てぬ處に住ひ居る舊友が、いつまでも逢はずに居る事は不可能である。て清が熱心に企てゝ居る素人芝居——（是れも信淳が溢々ながら進と淳とに許した事であるが）の練習に集つた時不圖忠と逢つたのは實に數日後の事であつた。

勿論進も現在忠の顔を見れば挨拶もせないやうな冷淡な眞似も出来惜い。て父の前に禁ぜられた意味も左まで嚴重な譯ではあるまいと思つた。すると忠は前より豫期する處あれば、先づ進の傍に寄り來つて色々話し掛ける。進の性質として斯くまで頼り來る友を冷遇して惡感情を懐かせる様な事は如何しても出来難い。雖然父の禁制もある事なれば成し得る限り之を避けねばならぬ。彼は此日頗る其苦痛を感じた。殊に其別れに際し忠は特別に親しげに其肩へ手を掛けて話し掛けるので一層此感を深うした。

此情をニヒト



其翌朝進と淳とは朝飯の卓上前夜の練習の有様と其素人芝居の面白さと其母まつ子夫人に物語つて居た。折しも父は傍らに新聞を読み居つて、今迄家族の話には左まで注意もせなかつたが、淳の話頭偶々忠の事に及び、彼の喜劇に於ける動作は確かに一般の満足と喝采とを得るであらうと物語つた時、突然父は其頭を擡げて早速に尋ねた。

父「忠さんは昨晚矢張り其處へ来たのか？」

淳「忠さん？はい来られました」

父「そしてお前は忠さんと話をしたか？進」

進「はい、あの……已を得ない時ばかり……少し話しました。」

父「進！私は其様なヒネクシた間接の返事をして貰ひたくない。唯話したか話さないかを聞くのだ。」

進「咄しました……けれども……」

父「けれどもは要らん！忠さんが先にお前に話し掛けたのか？」

進「はい。」

父「てお前は其返事の他に何か言うたらう。」

進「……いいえ……お左様です、それは私唯あの……」

父「何だ、いゝえだの左様ですだのつて、哀れな辯解ぢやないか？」

進「否、それは決して辯解ぢやありません。私今よう言ひ表はせませんでしたけれど、私の意味は唯失敬にならない丈けに話をしたといふのです。」

父「宜しい、それなら進！今能く耳を深つて聴け、宜しいか、以後如何なる申譯があらうとも何事でも忠さんと話をする事は許さない。今更めて申渡す、解つたか？」

まつ子夫人は我良人の餘りの嚴格に今更困つて、

夫人「そりやあなた、其様な必要はありませんが？」

一寸思ひ返せば、其様なそれ程迄の必要は確かにない事を信淳と雖も思ひ付いたであらう。雖然性來持病の癖は一度言うた事を引戻す様な事をさせない。て再び新聞を手に取りながら言うた。

父「私それは進の従順を試めず爲にやるのです。」

進「ぢや私達素人芝居なんか止めなけりやなりませんね、私忠さんと一言も交さずにはやれませぬもの。」



父「止めたつて善いぢやないか? 親の命令を守る爲に一晩のつまらない悪戯を止める位何だ?」

淳「あゝお父さん。」

父「私は少し考のある子なら十七八にもなつてクダらない一晩の遊戯を止める位左程大變な事でもないと思ふ筈だといふのだ。」

淳「でも何故それがクダらない悪戯なんですか?」

父「淳ちゃん! 私以前の様な子供と其様な議論はしない、唯私忠さんを餘り善い人と思はな

いからね。放校までされた人なだからお前達が彼の人と交際しては困ると思ふのだ。」

進「私だつてお父さんがいけないと仰しやるなら別に交際をする積りはありません。雖然一言も云はないといふ事は随分六ヶ敷いですよ。まあ一寸道で邂逅つたと想像して御覽なさい」

最早五月蠅いといはぬばかりに信淳は新紙もて其顔を隠しながら、  
父「私は何も其様な想像なんかしない。モウ私充分云ふたから唯従つて貰へばそれで何も文句はないのだ。若しもお前が此命令に背くなら……まあ其様な事は止めにしやう。」

其問題のみならず、總ての話は茲に終を告げて、食事は沈黙の間に済まされた。そして進は父の不當な禁制と不親切な事とを胸に湛へて殆んど失望して居つた。淳も自己が不愉快よりは

寧ろ兄の失望の色を見て泣かぬばかりになつて居る。まつ子夫人は心崩折れて獨り無限の感想に耽つて居た。何時になつたら此家庭の困難が取去られる事であらうか? 若し我良人がモウ少し寛大でモウ少し思慮深くあつて、もウ少し我儘でなくつて、もウ少し忍耐強くつて、もウ少し其鐵意といふ名の下に事毎に曲解する様な點を注意して呉れたなら、如何に我家庭が圓滿になり幸福になるであらうかと感ぜざるを得なかつた。

時は追々基督の誕生日に近づいて來た。併し外見は幸福の他何もなかるべき森家の家庭は如何に悲しき淋しき聖誕祭を迎へる事であらうか?

信淳は間もなく己が室へ歸つた。而も其心には矢張り家族の他の者と同様な悲哀の念があつた。そして之れも亦進の爲であると考えへつゝ怨み居つたのである。

父が室を去つた後進は暫し物をも得言はなかつた。實に痛酷に一種の感想が其胸を打つたのだ。て先づ沈黙を破つたのはまつ子夫人である。

「進さん! 私眞實にお前に氣の毒で耐らないね。何か他によい樂を見付けた方がよからうと思ふから、お前達の知らない内に買つて置いたものを上げやうね。私今迄まあ能くそれを秘密にして居られたと思つて自分乍ら驚いて居るのよ。」



進「ア、お母さん有難う！それは一體何ですか？」

「私はお前達二人にクリスマスプレゼントとして駒を二匹買って置いたのよ。」

「オ、お母さんマア！嬉しい。眞實に有難いね。僕幾度馬が欲しいと思つたか知れなかつたのでもお父さんは乗せて下さるでせうか？」

「勿論乗せますとも。お醫者さんが淳ちゃんに運動を勧めますし、それに獨りて乗り廻す事は面白くないだらうと思ふからね。」

「ア、淳ちゃん！マアどんなに面白いたらうか。輕川位まで乗つて行けるだらう！よく乗れるまで二人稽古しやうね。」

二人は母に従つて裏の廐へ行き愛らしき従順な美しい駒を見喜び勇んで先の悲哀は烟と消え霧と走りつ試めし乗にとて出掛けて往つた。

兄弟は馬上で若し忠に邂逅ふやうな事があつたら如何にすべきかと相談を凝らした。是は實に六ヶ敷問題である。相談の未先づ進が父の禁制を包まず手紙に記して忠に知らせる事が最もよき方法であらうと決定した。雖然乗り廻して居る間に同じく馬に跨つて馳せ来る清に出遇ひ今の心配も亦忘れて仕舞つた。で三人駒を並べて緩る〜と馬上に語り合ひ居る間、話頭は自然演劇の

事に及んだ。進の父が兄弟の聖誕祭に餘興をする事まで禁じたと聞いた清は失望せざるを得なかつた。斯くて演劇の興味は大分減殺される、事と悲しく思つたのである。併し少くとも觀覽人として二人を出し呉るゝならんと豫期して居た。

清「進さん！君と淳ちゃんが出られなけりや餘興だつてうまくは出来やしないよ。誰も君等の代りにやる者はないからね。歌をうたへるのは君等ばかりなんだもの。」

「どうも仕様がなね。僕も君の知つて居る通りそれに就て大に望を持つて居たのだが……」

「ぢや此様しやう。あの僕の父に君のお母さんの處へ行つて、是非二人が出なければ面白く出来なからと話して頂かう。そしたら屹度許して呉れさうなものだね。」

「否や許しさうもないよ。僕の父は一度言出したら最後決して曲げる事はしない人なんだもの。」

「何故？ぢや餘興が悪いといふの？」

「いや別に餘興が悪いといふ譯でもあるまいが、畢竟忠君と話をしてはいけぬといふのだ。」

「ア、ア左様か？困つたものだ。併し放校されてから忠君も全く別の人の様になつて居るよ。」

「君若し忠君に逢つたらさう言うて呉れ給へね君！僕が是れから冷淡な風をし又交際が出来ない



といふのは決して僕の考でなくつて、父が八釜敷いからだつてね。僕も忠君を嫌ひぢやない！忠君も僕に親切にして呉れるのに、父が一言も交はしてはいけぬといふのは閉口して仕舞つた。

「宜しい、其處は僕がうまくやつて置かう！一兩日中に屹度逢ふだらうと思ふから能く話さう。併し君忠君だつて決して君に對して怒りやしないよ。何故かといへば進さん君の一つの缺點は唯札幌中學の生徒でないといふ點にある事を忠君と僕とは能く知つて居るからね。」

別れに臨んで清は自己が愛校の精神を戲談ながら話し出た。て進も亦笑ひながら、「ハ……僕の朋友にも二人程札幌中學の者があるが僕は彼の學校は日本て二番目に善い學校だと思つて居る。若し僕が同志社の學生でなかつたら、君等の學校に入りたと思ふに違ひないつて忠君にもさう言うて呉れ給へ。」

「えゝとして僕ならね、僕若し札幌中學生でなかつたら尙又札幌中學生になりたいと思つて居る。ハハアうまくやられたね。さうぢやないか淳ちゃん、ぢやさよなら。」

進は弟と歸りながら物語つた。若し此二三日間忠と逢はないやうに勉め居るなら、其中に清は彼と遇つて話して呉れるであらう。さらば此度こそは如何に父と雖も、我を不従順とする事は出

來ないであらうと。雖然人の豫期する處は往々にして當らないと考ふる事も大切である。

### 第十九 絶望の板挟み

是より數日の後恰度クリスマス三日前の眞白に霜降つた朝であつた。進と淳とは道廳の池に往つて氷滑りをしやうと出掛けたのであつたが、博物館の傍ら公立病院の裏を此方へやつて來る忠の姿を認めた。て二人は遠方から之を見るより早く博物館の中へ走り込んで隠れて仕舞つた。二人の考では若し今忠が此仕業を見たとしても既に清から斯くせねばならない理由を語され居るであらう。であるから別に悪感情を起させる事は萬々あるまいと思つたのだ。て忠の過ぎ去つた後博物館の木陰から兄弟ともスケートを携へて道廳へ向ひ馳せ行くのであつた。そして稍やく昨晩の寒さで充分に厚く張り詰めた池の面を滑り始めた。

忠は兄弟の斯く隠れ去つた事を夢知らなかつた。そして桑園に森家を訪問れた。雖然二人共不在なので何となく不愉快の感に耐へず、獨り悄然首を低れて北五條通りを廻つて歸り掛けた。そして不圖若しや道廳の池に氷すべりでもなし居るのではないかと思ひ起して道廳へ其歩を向けた。忠の想像は當つた。遠方から彼等兄弟の樂しげな叫び聲や水面を滑る物音を聽く事が出來た



のて、忠は喜悅に満ちて馳せ寄つたのである。先に桑園に訪ねた時にはどうも進が近來自分に對して極めて冷淡に見えるが、是れも自分の偏見かは知らねど今朝の不在も態とされたのではないかと疑つたのであつた。疑は山來罪の初産である。雖然忠の此の疑丈けは當然であつたのだ。忠は斯く嬉しく思つて馳せ寄つたものゝ之を見た森兄弟は何となく心沈んで仕舞つた。勿論現下の状態に於ては逃げ隠れる事は出来ない。若し清が進の心中を忠に能く説明して呉れたとすれば、今此處へやつて來て迷惑を懸けるとは随分酷い譯である。忠の様な機敏な者は直ぐに其様子を見て取る事が出来る。丁寧に迎へられたものゝ何となく迷惑らしい風が見ゆるので、忠も心中面白くなつた。

忠「此様な處よりか僕の家の方が餘程面白さうだ。」

進「いや怒つちや困るね。之れは何も僕の過てない事を君能く御存じてせう。僕はもう君と遊びたくつて仕様が無いのだけれど……」

忠「何？何が君の過失でないつて？」

「いや、その僕がね、君に冷淡にして居る事さ。」

「あゝ左様か？君は殊更に冷淡にする積りなんですか？宜しい。僕は何でも構はない。君が僕を

遠ざけるのなら勿論僕も君の友人といふ名譽さへもう打棄て、仕舞ふ覚悟だ。併し君！僕が何か君に其様に絶交される理由があるのなら説明して呉れませんか？」

「僕は實に失敬な風をせねばならないのだから君に對しては何とも面目がない。清君は何か君に其理由を話さなかつたの？」

「いや何も聞かない。」

「左様か？それは少し思ひ違ひをした。それぢや僕自分で云ひませう。それはね僕の父が君と交際するのを禁じたのだ。」

「ウン………何故君の御尊父さんは僕を其様に輕蔑するのだらう？」

「それは………何故かつて云へば………」

進は言ひ掛けて後が出なかつた。

「エ、宜しい。何故かつて云へば……」

「まあよく僕の言ふ所をさうして呉れ給へ。僕ね僕の思ふ通りに言ふから怒つちやいけな。僕君の爲にも氣の毒に思ふのだが君が放校されたといふ事からなうてせう。」

「左様か？」



忠は今や怒りたくもあるが併し日頃進を頼りとして居る事と、殊に昨今我心を壓迫し居る非の重荷を彼に依つて軽くせられんと迄考へた事を思ひ浮べて憤懣の情を制し而も不愉快げに言ふのであつた。

「進君！君何も其様に僕を怖はがる必要はないよ。僕は成程學校で多少間違もした。雖然森さんに尤て癩病人のやうに嫌はれる程穢ない根性を持つて居る積りはない。嗚呼僕は實に殘念で耐らない。併し君！君の言うた通りこれは君の咎ぢやないから僕は矢張君を朋友と思つて居る。けれどももう決して君の邪魔はしないからね。ぢや失敬する。」

「マ、待ち給へ君！君が此池で氷滑をするのなら、僕等は何も君を追ひ返す譯はないからやり給へ！其代りに僕等が失敬するからね」

「否！其様な事としては困るよ。若し君等が許すなら僕も此處で滑つて見たいな。森さんに見付かるやうな事はあるまいものね。そして又若し見付けられた處でそれは君の過失でなくつて僕が悪いのだ。殊に君！もう再び逢つて遊ぶ事が出来ないとすれば僕眞實に暫らくの間此處で君と遊んで行きたい。それに僕實は特別に君と少し相談したい事があるので實は今朝も君の家を訪ねたのだから、まあ暫らく氷滑をしてからあとで聞いて呉れませんか？」

言ひつゝ忠は既に其靴にスケートを着けて滑り出し、競走を挑んで來た。進と淳とは遂に全く之に釣り込まれて二十分卅分の後には子供心の面白さに何も彼も打忘れ聲高らかに且笑ひ且語りつゝ競走に餘念なかつた。實に進は學校より歸つて以來此の様な面白き想をした事が未だ會てなかつたので父の禁制さへも今は全然忘却して仕舞つた。淳も亦兄の斯く幸なのを見て心に思はないてはなかつたが敢て忠告する事もせなかつた。嗚呼彼は後になつて如何に此の忠告を怠つた罪に責められる事であらう？彼が滑り廻つて居る間に不圖胸を打つたのは彼方を通行する人影を見た事であつた。滑りつゝ進の傍へ進み行き「彼方を御覽と！」指した、進は何事ならんと彼方を見やれば嗚呼是は抑も如何に父は馬に跨つて悠々と此方を眺めながら過ぎ往くのであつた。進は事の急劇に驚いてが、氷上にハタと打倒れた。忠の援助に依つて怪我もよく起さ上つた時進の顔は全く死人の如くに蒼白くなつて居た？

忠「何？何？如何したの？」

進「僕の父が………」と俯白いたまゝ、彼方を指して居る。

忠「誰も居らないぢやないの？」

進「今往つて仕舞つた處なんですよ。」



「忠」え左様？併し心配し給ふなね進君！是れは全く僕の過失なんだから僕明日桑園へ往つて君の御尊父さんに御詫をするからね。僕位不運な者はないな。いつも人迄困らせるやうになる。今日も眞實に早く歸ればよかつたのに……」

「進」もう其様な事考へるのは止し給へ君！今直ぐに歸つた方がよからうと思ふから僕失敬します、ぢや若し僕がね、君を遠ざけるやうな事をして決して悪く取つて呉れ給ふなね。父の命令なら不得止従はなけりやならんから。」

「でも君マア少し待つて呉れませんか？僕は君と話したい事が山々あるのだ。僕は實際不幸な者なんだからね。」

「何だつて？君が不幸だつて？何だ僕はいつも君こそ順風に帆を孕ませて走つて居るやうに楽しい事だと思つて居たのに……」

「それは唯外見ばかりさ。薄ちやん！少し待つて呉れ給へね。其様に長くはかゝらないから。」

三人共池端に腰打掛けて其靴よりスケートを取り居る間忠は今や熱心に近來の所業も懺悔して物語り、總て打明けて進に話すのであつた。他の總ての所爲は皆隠せず話し悉くしたが矢張り彼の最近の最大罪惡は甚麽しても話し出せなかつた。彼は今や勇を鼓してそれ迄も話し仕舞ひた

い又話さうと勉めたのであつたが、其舌は其心の命に背いた。そして遂に話し出せなかつた。否話し出す勇氣がなかつたのだ。て此一事が尙重荷の如く其心に懸つて居た。甚麽しても取去る事が出来なかつた。話の最後に實は未だ「惡事が潜んで居るといふ諷刺さへも言はんとして舌が動かなかつたのである。」

進は悲しげに同情を以て其耳を傾けて居た。そして最後には矢張り清と同様の忠告を與へた。即ち總てを皆不殘其父に打明けて罪の赦免を願ふより他に途はないといふ事を。

忠は未だ其父にも又今現に進にさへも打明けんとして能はざる一事ある事を心に思つて。

「僕には甚麽もそれが出来ないのだ。君が若し僕の地位にあつたら出来ると思ふかね？」

進も斯く問はるれば自己が日常家庭に於ける困難など幾々と其心に浮び來つて、

「僕にしても實際それは六ヶ敷事と思はれる。併し君！君の御尊父さんの様いつも親切になさる方の前になら打明ける事も出来やうと思ふ。」

「實際僕の父は僕に親切にして呉れたのだ。實は餘り親切に過ぎたのだ。若し父がもう少し嚴格な人だつたら僕も今日此憂さ目を見るやうな過失をせなかつたであらうと思ふ。嗚呼進君！僕眞實に甚麽したらよからうか？君！御願だから僕と約束して呉れ給へ。僕が考に餘つ



て相談する時に、何卒僕を援けて呉れるやうに。」

「それは君勿論僕の出来る丈けの力は吝まないが、併し僕の様な者が甚麽して君を援けられやうか？僕は僕自身程他人の援けを要する者が他にあるまいと思ふのだ。」

流石に忠も同情に動かされてか其兩眼に玉の如き涙を湛へて、

忠「それは僕の言ふ事なんだ。」

進「あゝもう其様な事言ひ給ふな。ね忠君！つまらないぢやないか？樂天的に考へないと損だよ。又僕は君に逢ふ事の出来ないのを非常に残念に思ふけれど君決して失敬だの不親切だのと思つて呉れ給ふなね。是れも其様に長い間ぢやあるまいから、まあ幸福な身となつて呉れ給へ。ぢや失敬する。」

三人共均しく皆後悔の念をもて家路に向つた。て進は家に着くや否や氣遣はしげに父は何處へ行かれたかと家婢に尋ねて、始めて區會に出席されたので歸りには宴會があるといふから夜の九時頃でなければ歸宅されまいといふ事を知つた。

信淳は區會に出席したものの、池の傍らを通つて彼の有様を見て以來、心は實に燃え切らんばかりに激して居て、此日の議會では静かな打合せも出来ず、逢ふ人毎に衝突して居た。そして

其間にも進は我絶對の命令にさへ背いて平氣で居るといふ考が其胸に満ち／＼て居た。

夜に入つて家へ歸つてからも直接妻や子に面會せず自己が書齋に入り、態と燃えつゝある憤怒の烟を冷やし消やす憂あるかの如く、繰返し／＼反復回想して益々其火炎を盛ならしめ、家婢を呼んで進をつれ来るやう命ずるのであつた。

進はいつもの如く母と淳と共に一室に居つて、二人の爲に聲高らかに書物を讀みさかせて居た。兄弟は今朝歸つて直ぐ事情を其母に告げたので、三人共同様心配はして居たものの、今突然進に來れといふ命令は、胸に萬愛を蓄へるまつ子夫人の心に、恰も死を報ずる鐘の音の如く鳴り響いたのである。彼女の静かな親切な語調は數々進の爲に父の怒を和げる手段となつた事もあるのであるが、今出し抜けに呼ぶ様であつては、我良人の怒れる様も左こそと思はれて、いつもながら斯かる時に唯取るべき唯一の手段として、其全心を捧げつ神の聖前に黙禱するのてあつた。

進の心も亂麻の如く千々に碎けつ、何故重ね／＼斯くまでも不愉快てふ永久の重荷は負はねばならぬやう不遇に陥るのであらうかなど自問自答した。我は實に現在肉親の父すらも赦し呉るゝ事の出來難い程偏狹な青年であらう？我は今朝の出來事に於てもそれ迄惡い過失をなし



たのであらうか？思へば今は早や偽心暗鬼を生じ來りて其良心すら濃密な浮雲に蔽はれつ明白に之に答ふる事も出来なかつた。併し是れ丈は正確であると思つた。即ち譬へ我は不注意で我行為も亦不完全ではあらうけれども我は正直に服従せんと勉め又熱心之を願つて居たのである。今朝我犯せし罪は實際は境遇の然らしめたものに過ぎず、決して故意に出たものではないといふ事丈けを自覺し居つたのである。であるから父の命を聞いた時にも謂はゞ先づ高慢な失望とでもいふべき心地して起ち上り、母の肩に手を掛けて意味ありげな眼を母の顔に向けつ、静かに歩を移して父の書齋に入つた。

父「其處へ坐れ！」

命に應じて進は坐つた。そして殆んど無意識的に首を低れ腕を拱いた。父は直ちに蘊蓄せる激情の爆弾を發射して一語は一語と更に嘲笑輕蔑を極めて來た。

「フン、何かそれが父の絶對の命令を拒否む子の風貌なんだな。彼の藤原の若殿が其様な役者風を教へて呉れたのだらう！フン大分立派なものだ！」

進は彌々失望して沈黙を守つて居る。

「何だワンともスウとも云はないで……聞こえないのか？」

信濃は其「聞こえないのか？」の一句を殆んど落雷の如き大聲もて嗷鳴つた。て進も嘆息して首を擡げながら靜かに尋ねた。

「何てすお父さん？」

「何てすとは何か？此奴！聞こえない振りをして居るな。貴様は何とか云ふ事がないのか？」

「それは私が忠さんと今朝遊んで居つた事だと思ひますが……」

「何だ……私が忠さんと今朝遊んで居つた事だと思ひますが……よくも其様な事が言へたものだ。」

一言又一言實に嘲笑の口調を加へるのみである。

「彼の時私は實に忠さんを避けやうと勉めたのですけれど……」

「左様か？フン絶えず話したり笑つたり全く親しく遊んで居つたのか避けやうと勉めて居たといふのか？進！我輩はもう貴様を信用しない。」

進は屹と其首を上げた。彼の情緒は今や憤怒をもて燃え上つたのである。

「有難う御座います。お父さん！あなたは私の言ふ事なんかいつも信じて下すつた事はありませんでした。雖然世の中の人は一入として私を虚言吐きとは思つて居りませんからね。」



「何だ！其様な風して怒つたつて何てもありやしない。貴様は何だ子供ぢやないか？而も不  
我輩に不愉快な想ばかり掛けて居る。此親不孝奴！少し弟の様になつて貰ひたいものだ。宜  
しいまだ何か言ひたい節があるのなら言うて見ろ！」

何私にモット申上げる必要がありませうか？お父さんは少しも私の申分を聞いて下さらない  
ぢやありませんか？あなたは私に對して不正です！不親切です！！

「何？よくも言うたな。もう一度それを繰返して見い！」  
其輝く眼を見張つて怨めしげに父を凝視ながら進は更に繰返した。

「あなたは私に對して不正です！不親切です！！」

信淳の情は今や燃え切れた。彼の唇や手足は盛に震へる。暫時が程は何とも云ひ得なかつた  
が稍々あつて漸く舌を動かしたのは實に此の言であつた。

「左様か？それなら最早口で論ずるがものはない。手でやらなけりや解らないので。進！それ  
丈の罰を與へてやるから其處に起て！」

「何の罰ですか？」

「何の罰だか今知らせてやる。雖然貴様もう知つて居りさうなものだ。我輩は自分の子に明か

に命令を蹂躪されて黙つて居る事は出来ない。兎に角其處に起て！」

「お父さん！お待ちなさい！」

「お待ちなさいなら命令に背く時に、何故自分の爲、さう言はなかつた？」

「私何も打たれるのが辛らさに言ふのぢやありません。」

「何でも宜しい、起てと言ふのに何故起たんか？」

進は屹然と立ち上つた。今や憤怒其絶頂に達して信淳は太い鞭を以て進の肩先より背に掛け  
て頻りに亂打した。軽くしてはなし。一打一撃儘かに其手應へがある程充分に打込まれた。併し  
進は全く木偶の如く叫びもせず啼きもせず語りもせず屈みもせずに突き立つて居た。

唯一度彼は手を上げて鞭を把へ、前と同様な口調も「お父さん！お待ちなさい！」と叫んだ。  
併し此舉動は更に其父の怒を増さしめるのみであつた。て父は力任せに進を突き飛ばし再び鞭

を奪ひ取つて之を亂打した。其儘にされて居つたなら進は此後何如になりしか想像も出来難い。  
若し此時夫人と淳とが入つて來なかつたなら恐らくは尙も苛酷な處置に出た事であらう！

「オ、あなた！もう澤山です、進は最早充分の罰を受けたぢやありませんか？」  
他の場合であるならば斯かる干渉は却つて信淳の怒を増すのみであるが、今は早や彼自身の



怒も進の抵抗せざるが爲に押けんとし居る際でもあり、殊にまづ子夫人の態度と語調とは全く其愛情の底より出たものであるが故に流石は信淳も之に感動されたのであらうか、今は其手を控へた。傍らに驚いて立ち居る小さな淳の顔を見ても何となく恐怖と謎貢との交つた眼色をもて其父を凝視め居る事が解る。

「ウン、今は先づそれ丈けて勘辨してやらう。まづ子！其親不孝者を連れて彼方へ御出て！眞實に貴様は家庭の悪魔なんだ！」

淳は早くも既に兄の傍らに來居つた。そして今父の斯くも残忍な言葉を聴いて全く絶望せる進をば、母と共に手を把つて此室を去つた。客間へ行つて二人の間に坐つた時進は其双手で顔を掩らた。今迄は毅然として父の鞭に耐へ居つたが、此室へ來ては唯もう包み切れぬ悲嘆の情を涙に現はすのみであつて、泣きたい丈け泣くの自由を得た。て彼の心は恰も張り劈けんばかりに堰さあぬ涙を迸らせ、折々幽かに嘯やく事は「それは事實だ！私は家庭の悪魔なんだ！」といふのであつた。母と弟との愛情を以てしても今直ちに彼を慰めて此苦痛を忘れさせる事は出來難い程である。彼は二人より親切な愛あふるゝ慰めの言葉も聞いて二人の手を把り、又之を接吻したが、尙無言のまま居るものは儘かに其心に重く／＼落ち來つた或者を容易に彼

等二人にさへ語り得ぬものがあるからであらう？嗚呼是は實に悲惨な光景である。てまづ子夫人は一時も早く此事を忘却せんとして、家婢に命じて夕飯の備へをなさしめたが、三人共實は一口も咽喉を通らなかつたのだ。今はモツ子供等を寝かせて勞れたる眠と共に其悲を忘れさせるより他に方法はないと思つた夫人は斯く言ひ出たが、何故か進は一分時も其母の傍へを離るゝを好まぬやうに見受けられた。して尙も母の手を把つたまゝ放さない。夫人は實に進の爲に血涙を絞らざるを得なかつた。其後暫らくの間夫人は此夕べ最後に進の手を放させつ寢室の方へと送り出した時、進の浮べた憂き顔を忘るゝ事が出来なかつた。

進は斯くて弟と共に二階の寢室へ入つたが、今誰も居らぬと思へば悲しき情けなさどが新たに三寸の胸臆に滿ち來つて、獨り聲を立て、泣き出すのであつた。雖然淳よりも勝つてよく彼を慰め得る者はない。淳は兄を慰め力を付け之を勵まして自ら兄の衣服を脱がせ小さき手をもて静かに兄の肩と背にある青血染の箇所を撫てた。そして褥に入る前兄の傍らに跪いて暫時静かにし居る様を見て進は、噫！我小き弟も亦我爲に神に祈り居るのであると思ひ浮べた。嗚呼此家庭は斯かる無邪氣の小き魂をして、尙神に祈り其援助を願ふの必要なるを感ぜしめたのである。」

あめんこでいひなすは  
一〇分位はかゝる



## 第二十 家庭への告別

一三

進は此夕へこそ遂に耻辱と悲哀とに終るべき或事を遂げんと決心した。即ち彼は家を出奔せんとする覚悟を極めたのである。

何時如何にして斯かる怖ろしい決心が我心に出来たのであるか進自身さへも知る由がなかつた。殆んど無意識的に而も確實に、彼は是れまで曾て思つた事もない仕事を敢てせんと徐々準備するに至つたのである。併し疑もなく彼の書齋に於ける父の態度殊に其無慈悲な苛酷い言葉は遂に此舉に出てねばならぬやう強ひたものであらう。

彼は今や心中悲哀と苦痛とに満ちて居る。意氣銷沈し心崩折れて早や自己が身體に受けた打傷の痛みさへ覺えぬ程であつた。流石は彌々家を去らんとするに方つて萬感交々胸に通つて來るものがある。これが其少年時代を過ごした家庭への永久の告別であるかといふ考やら、一言別れの言葉も述べずに愛する母と弟とを棄て去る事やらが苦痛といふよりも寧ろ何か、モット大罪惡であるかの如くに感ぜられた。我が去つた後母と弟とが事の成行を知つたならどれ程心配するであらうか？又これが二度と逢ふ事の出來ない恐らくは永久の別れだと思はれたならど

んなに悲しむ事であらうかなど考へた。併し是れ等の考も尙未だ彼の心に満ち來つた新しい決心を翻へす力はない。斯くて心緒實に亂れて麻の如く、種々と心を碎き思を凝らして、うとくし居る間に近村の寺の鐘が今將に來らんとする悲哀の時を萬有悉く眠つた寒空に報じ來つたのである。指を屈して數ふれば早や十二時。進は靜かに起き上つて褥の上に坐つた。嗚呼今や空は全く牙を渡りつ寒月の光窓を通して涼の褥の上に輝やいて居る。暫らくは送も其儘彼れや是れやを思ひ廻らして時の移るさへ氣付かなかつた併し今は最早猶豫すべきでないと私かに洋服を纏ひ始める、纏ひ居る間にも彼は無限の感想をもて熱心我弟の顔を眺めて居た。何は鬼もあれ彼は愛する弟を起して永久の別れを告げ、我希望をも打明けて彼を安心させ彼の涙を拭うてやりたいと思つたのである。雖然彼は左様する事が出來ない唯愛らしい其寝顔を眺めて、爲し能ひし事は態と聞こえぬ小聲もて告別の一言を囁やいたに過ぎない。

今や空はいやが上に牙を渡つた。併し宵の中より降り積つた雪は三四尺も深くなつて月の光を反射して居る。漸次音をもさせずに思ひ切つて其窓を排けるや否や進は一閃身を躍らせて戸外の雪の中に飛び降りた。雪の深かりし爲に左まで物音もしなかつたか、進は暫時立止まつて家内の模様を聞いた。そして誰も目を覺せる様子のなき事を認めたとのである。

一三